

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

親と子の話

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 江口, 一久 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001812



親
と
子
の
話

137 ヒヨウタンからでてきた娘

お話、お話。

ある男に二人のよめさんがあった。一人は子どもをうんだけれども、もう一人は子どもをうまなかった。

さて、朝、女たちはいつも畑にいく。

さて、ある日、子どもをうんでいない女がでかけていくと、道のまんなかにヒヨウタンの種があった。そこで、女はその種をひろいあげると、屋敷にうえておいた。

さて、ヒヨウタンの蔓はどんどんのびていき、女の小屋のうえに一つ実をならせた。

さて、ほんとうのことこの実のなかには娘がいて、女たちがでかけると、実からとびだし、子どもをうまなかった女の小屋を掃除し、洗濯をし、カタガユをつくり、それをたべ、女にカタガユをのこしておいてやるのだった。女たちは家にかえつてくると、不思議におもった。女たちはどうしたものかとおもう。

さて、子どもをうんだ女の娘たちはだんだんおおきくなっていった。娘たちは結婚したかったけれども、相手がいかなかった。

さて、ある日の夕方、王子がウマにのって、やってきて、ヒヨウタンからでてきた娘が水浴びをし、ヒヨウタンのなかにはいつていくのであった。娘はたいへんうつくしかった。

さて、王子は家にかえると、父親にヒヨウタンと結婚したいといった。王さまは自分の子どもは気がくるつたので、つかまえて、しばらくのようにとらえた。人びとは王子をつかまえて、しばらくあけて、たたいた。王子はヒヨウタンがすきだといった。王さまは、「よろしい」といった。王さまたちはたちあがり、(ヒヨウタンの持ち主のところ)にでかけていき、ヒヨウタンをもらえないかとのんだ。(ヒヨウタンの持ち主がけげんにおもうので)王子は、「よろしい。きなさい。かくれていよう。ヒヨウタンのなかからながでてくるかみてみなさい」といった。王さまから、母親、ヒヨウタンの種をうえた女、(ヒヨウタンのなかからでてくる娘の)父親にあたる人までみんなやってきて、かくれた。

さて、娘がヒヨウタンからとびだし、あちこちをみわたし、だれもないのをたしかめ、やってくると、自分の母親の小屋を掃除し、カタガユをつくり、それをたべ、母親の分をとっておき、小屋をしめ、もどつていくと、水浴びをして、すつかりきれいになると、もとのようにヒヨウタンのなかにはいった。

さて、王子の召使いたちは結婚のための贈り物を取り、もってくる。娘たちをうんだ女は、「おまえさんたちはその品じなをここにもってくるのだよ。ここにももってくるの。あの女は子どもをうんでいない」といった。王子の召使いたちは、「いいや、あそこに、わたしたちを使いだされた」といった。召使いたちは結婚の贈り物

をとると、ヒヨウタンのなかにはいつている娘の母親のところにも
つていった。王子の召使いたちは嫁入りの日、でかけていった。召
使いたちはいつて、娘の母親の小屋のうえからヒヨウタンをとつ
た。召使いたちはやつてくると、それをウマのうえにのせて、王子
のところに嫁入りさせた。

さて、王子の幼友だちはみんなわらって、「王子はヒヨウタンと
結婚した。王子はヒヨウタンと結婚した」という。

さて、ある日、王子は老女に、「わたしはどうしたら娘をヒヨウ
タンからだし、あのヒヨウタンをなくしてしまうことができるだろ
う」とたずねた。老女は王子に、「いつて、ウシをみんなはなしな
さい。おまえさんはそのウシをおまえさんの父親の屋敷のうしろに
つれてかえつてきなさい。雨がふつているとき、おまえさんは家か
らでて、ウシをおいなさい。家からでて、ウシをおいなさい。しば
らくすると、おまえさんは娘に『わたしがつかれるのをみたら、お
まえもヒヨウタンからでてきて、わたしといっしょにウシをおう
のだ』といいなさい。娘がヒヨウタンからでてきて、あるいていく
と、小屋のなかにおおきな火をたきなさい。娘がヒヨウタンからで
てくると、おまえさんはヒヨウタンの殻をとり、それを火のなかに
なげいれなさい」といった。王子は老女に、「わかった」といった。
王子は雨期まで、老女にいわれたようにしかなかった。王子は自分の
屋敷のまわりを葦簀でかこんだ。雨がふる日、ウシの囲いのなかか

らウシをおいだし、父親の屋敷のうらまでつれてきた。ウシは葦簀
をたべている。王子は家からでて、ウシをおう。王子は家からでる
と、雨のなかでウシをおう。王子はいやになって、娘に、「おねが
いだ。どうして、おまえはできて、わたしとウシをおつてくれな
いのか。みてみなさい。わたしはこんなに雨にうたれている」とい
った。

さて、娘は王子に、「わたしがそとにでると、あなたはわたしの
ヒヨウタンをもやしてしまう」といった。王子は、「わたしはもや
さない」といった。娘は、「もやしてしまう」といった。王子は娘
に、「わたしはもやさない」といった。娘は王子のことを信じた。
さて、娘はヒヨウタンからとびだして、いくと、ウシをおつてい
る。

さて、王子はヒヨウタンをとると、火のなかになげこんだ。娘は
かえつてくると、大声をあげたけれども、どうしようもなかった。
王子は娘に話をし、二人は仲直りをした。王子はでかけていくと、
自分の父親をよんだ。父親はやつてくると、娘をみた。

さて、王子の父親はいくと、計画をたて、「わしは息子をころし
てやる」といった。王さまは息子のよめさんと結婚した。

さて、王さまの奴隷たちはやつてくると、野原におおきな穴をほ
った。

さて、王さまは王子に旅についてくるようにといった。王子は王

さまとでかけていった。

さて、王さまと王子はでかけていき、穴のあるところまでいった。

さて、王さまたちは王子を穴のなかにつきおとした。夫がでかけるとき、女は夫にナツメヤシを三粒わたし、銀の指輪をとって、わたしした。

さて、王さまと王子たちは野原についた。

さて、王さまたちは王子を穴のなかにつきおとし、おおきな岩をもつてくると、その穴をふさいだ。

さて、王子はナツメヤシをたべ、その種をうめた。ナツメヤシの木はおおきくなつていく。王子はナツメヤシの木にのぼつていく。ナツメヤシの木はおおきくなつていく。王子はナツメヤシの木にのぼつていく。ナツメヤシの木はおおきくなつていく。とうとう、王子は穴の入り口からそとにでた。

さて、王子は穴の入り口にすわった。

さて、穴はウシの囲いにいく途中にあった。人びとはでかけていき、乳をしほり、かえつてくる。

さて、王子はこの人たちをよび、「乳をもつてきなさい。きて、わたしにその乳をすこしおくれ。のむのだ」といった。

さて、王子はナツメヤシの木にのぼつていく。ナツメヤシの木はおおきくなつていく。

さて、人びとはやつてくると、乳をくんだ。

さて、王子は手にはめていた指輪をとると、酸乳をつくるための半截ヒヨウタンになげこんだ。

さて、人びとは酸乳をつくるための半截ヒヨウタンをとり、もつてかえった。人びとは乳のはいった半截ヒヨウタンを一つとると、王子のよめさんのところにもつていった。

さて、王子のよめさんは半截ヒヨウタンにはいった乳をあけると、指輪をみつけた。

さて、王子のよめさんは女奴隷をよんだ。女は女奴隷に、「きなさい。わたしにこのなかにだれかが指輪をいれたところをおしえておくれ」といった。

さて、女奴隷は女をつれていった。いくと、王子が穴の入り口にすわっていた。

さて、女は女奴隷たちをつれにいった。女は王さまに、「わたしをよめにしたのなら、雌ウシをわたしの小屋の入り口にたおし、その喉をかききっておくれ」といった。王さまは雌ウシをよこにし、女のために雌ウシの喉をかききった。

さて、女はその肉を料理した。女はその肉をいためた。女はその肉をやいた。女はその肉を王子のところにもつていかなければならないといった。（女はその肉を王子のところにもつていった。）王子はその肉をどんたべていき、とうとうもとのようにふとった。

女はカミソリをもつてくると、王子の髪の毛をそった。王子はきれいになった。女はウマをひいてくると、王子にわたした。王子はウマにのった。女は槍をもつてきて、王子にわたした。王さまの家来たちがたくさんあつまってくるまでそのままにしておいた。

さて、王子は自分のウマにまたがった。王子は自分の剣をもった。王子はウマをはしらせた。王子はやってきて、王さまのところにいった。王子は父親の首をきりすてた。

さて、太鼓がなった。王子は父親の屋敷にはいった。王子は王さまになった。王子は自分の父親のよめさんたちをおいだして、自分のよめさんをつれてきて、いっしょにすんだとき。

お話はみじかく、わたしの命はながい。

(一九八三年一月二〇日、語り手 ハディージャ・ブーバ、ガウンデレにて)

138 ロバの皮をかぶった娘

(語り手) さて、慈悲深い、慈悲にかぎりのあるアッラーのみ名によって。

お話、お話。こたえなさい。

(聞き手) いこう、うけとる人よ。

(語り手) ムチ何本でうけるのか。

(聞き手) ムチ百本でうける。

(語り手) よろしい。

ある男にたくさんの子どもができた。一人のよめさんは男のためにロバの子をうんだ。この子どもはロバだったが、ほかにきれいな娘もたくさんいた。

さて、王子はでかけていき、このロバが(皮をぬいで)水浴びをしているのをみた。

さて、王子は自分はロバがすきだといった。王子はほかの娘がきらいだといった。王子の父親は、「おまえは、気がふれたのか。娘がいくらでも手にはいるというのに、ロバと結婚するというのか」といった。王子は、「そのロバだけがすき」といった。王子は父親にわかってもらえず、うまくいかなかった。

さて、王子はロバと結婚の約束をかわした。王子はロバと結婚した。王子はロバと結婚し、屋敷につれていった。王子の幼友たちは王子のことをわらって、ロバと結婚したといった。王子はなにもいかなかった。ほんとうのこと、王子のロバはほかのどの娘よりきれいだった。

さて、王子がでていってしまつと、ロバは皮をぬいで、おいでおき、自分のすべての仕事をしおえ、食べ物をつくっておいておくと、もどっていき、皮を着る。夫はそれがいやだった。王子はでかけていき、あっちこっちをうろついた。王子はもどつてくるとき、

老女にであつた。王子は老女にであつた。老女は、「なんだって、おまえさんは王さまの子どもで、すきなことをしている。おまえさんはやってきて、わたしにであつた」といった。王子は、「母さん、王さまの子どもらしいところはどこにある。わたしはロバをよめさんにもらった。ロバは部屋の中までは、わたしに窮屈なおもいをさせている」といった。老女は、「よろしい。おまえさんがでていくとき、おまえさんはよめさんに野原にいくといいなさい。おまえさんはもどってきて、よめさんの様子をみるのだ。よめさんがロバの皮をおくと、おまえさんはそれを灰汁のなかにひたし、ぶらさげておくのだ。そして、どこかにいってしまいなさい」といった。王子は、「どこで、灰汁を手にいれるのか」といった。老女は、王子に灰汁をやった。王子はやってくると、その灰汁をとっておいた。王子はよめさんの様子をみている。王子はロバの皮を灰汁にひたし、ぶらさげておき、どこかにいってしまった。娘は仕事をしおえて、やってきて、皮をもちあげて、それをきようとすると、皮はちぎれてしまった。娘はちぎれたあとの皮をとると、ぶらさげておいた。トビがやってくると、その皮をとっていつてしまった。トビが皮をもつていつてしまうと、娘は部屋にはいつて、ないた。娘は身をまゐめて、よこになった。むこさんが家にかえつてきくと、よめさんはまるで銀のようだった。むこさんはよめさんをなぐさめている。娘はなにもいおうとしない。娘は身をまゐめて、よこになって

いる。むこさんは老女のところにもどつていつた。老女は、「いくのだ。ここにゴマがある。いつて、このゴマをいりなさい。わたしはだれにもたのまない、わたしはゴマをいつて、たべるといいなさい。いくと、ゴマを火になげこみなさい。よめさんはずつとすねているが、おまえさんになにかいいだすだろう」といつた。王子はゴマをもつてきた。王子は土器の蓋を火にかけた。土器の蓋があつくなつた。王子はゴマをもつてきて、土器の蓋のうえにあけた。ゴマはやけていく。

さて、よめさんはむこさんに、「そんなにして、ゴマをいるの」といつた。

さて、よめさんはおきあがり、土器の蓋をむこさんの手からとり、ゴマをいつて、むこさんにわたした。二人は話をした。むこさんはよめさんとずつといつしよにいた。

さて、むこさんの父親である王さまは、「なんと、王子さんのよめさんのような女はここにはいない」と人がいうのをきいた。父親は王子のよめさんを横取りするといつた。

さて、父親は旅にでかけるといい、王子をつれていつた。王さまたちは野原のまんなかにつた。王さまがいくと、そこにおおきな穴があつた。

さて、王さまは自分の息子をその穴のなかにつきおとした。王子がでていくとき、よめさんはナツメヤシの実をとり、むこさんの

ポケットにいれておいた。王子は穴のなかにはいり、穴のなかにはいた。ナツメヤシの実がポケットのなかで芽をだし、木はどんなのびていき、穴のそとにでていった。

さて、王子は穴のそとをみている。ナツメヤシの木はおおきくなっている。王子はナツメヤシの木に足をかけ、どんなのぼっている、穴のそとにでた。王子は穴の入り口によこになった。王子の屋敷の女奴隷たちが朝はやく、乳をしほりにいき、家にかえつてくるとき、王子がよこになっているのをみつけた。王子は、「牛乳をおくれ。それをのむ」といった。女奴隷たちは、「おまえさんのようにみにくいものが、牛乳をのむというのかい。わたしたちのご主人さまはどこかにいってしまった。くやしくて、死にそうだ。王さまはご主人さまのよめさんをとろうとして、ありとあらゆることをし、一生懸命になっている。ご主人さまのよめさんをころすといっている。よめさんをころすといっているが、よめさんは王さまのところにはいかない。よめさんは王さまのところに行くのをこぼんだ。こぼんだ」といった。

さて、そのつぎの日、子どもの女奴隷たちは家にかえつてくると、王子のよめさんに、「みにくい人があそこによこになっているのをみつけた。その人は牛乳をくれといった。のむといった」といった。王子のよめさんは、「おねがい。あす、その人がくれといったら、牛乳をあげておくれ」といった。女奴隷たちはでかけていっ

た。女奴隷たちはいくと、乳をもってきた。いくと、王子は穴のそとにでて、よこになっていた。王子は、「きょうも、おまえさんたちはわたしに牛乳をくれないのか」といった。女奴隷たちは、「あげる」といった。王子の指に、王子のよめさんがしっている指輪はめてあった。

さて、王子はその指輪をとると、乳のなかにはいた。王子は、「それでは、これをもつてかえりなさい。家にかえたら、おまえたちの女主人に牛乳をわけてもらいなさい」といった。女奴隷が、「はい」といった。女奴隷はかえつてくると、王子のよめさんに話をした。王子のよめさんはまるくなつて、ねたいた。

さて、よめさんはおきあがった。よめさんは、乳をわけて、瀝した。

さて、よめさんは、指輪をみつけた。よめさんは、「なんだって、わたしのむこさんの指輪ではないの。おまえさんたちはその人をどこでみつけたの」という。女奴隷たちは、「どこそこで見つけた」といった。よめさんは、「そこにいこう」といった。

さて、よめさんと女奴隷たちはでかけていった。よめさんがいくと、そこにいたのは自分のむこさんだった。よめさんは家にもどってきた。よめさんは、「雌ヒツジをつかまえて、ころしなさい。それを料理して、あの人のところにもつていきなさい。ニワトリをつかまえ、ころしなさい。それを料理して、もつていきなさい。カユ

をつくり、もっていきなさい」という。とうとう、王子は元気になって、ふとつてきた。王子はどんだんふとつていき、体をうごかすのがたいへんだった。よめさんは王子のところにウマをもつていった。女奴隷たちは服をもつていった。床屋をつれていった。床屋はいつて、王子の頭の毛をそった。

さて、よめさんたちは樂師たちをあつめた。よめさんは王子のところに樂師たちをつれていった。よめさんは、樂師たちにいろいろなものをあたえた。よめさんは、いつて、自分のむこさんをつれてかえってくるようにとிட்டた。樂師たちはいくと、むこさんをつれて、太鼓をうち、角笛をふき、王子をたたえた。太鼓はドンドンなる。王子の父親がでてきた。王さまの家来たちは不思議におもひ、「なんということか。どこの王子さまがやってくるのだろう。どこの王子さまがやってくるのだろう」とிட்டた。王子はウマをとばして、やつてきて、父親のまえで、ウマをとめて、もどつてிட்டた。王子はウマをとばして、もどつてிட்டた。王子はウマをとばして、またしてもやつてきた。

さて、王子はやつてくると、父親の首をきりおとした。王子は父親をころしてしまった。

さて、王子は父親の屋敷にはிட்டた。王子は王さまになったとさ。

おしまい。

(一九八三年一月二六日、語り手 アスタ・ジョーダ、ガウンデレにて。母方の祖父にかたつてもらつたという)

139 頭に角のある男の子

ちいさなお話、ちいさなお話。

ある女がみこもつた。女は王さまと結婚して、みこもつたのだつた。

さて、女はやつてきて、おちついた。女は男の子をうんだ。子どもは頭に角をつけてでてきた。

さて、女はその子どもをほつておいた。子どもの体は雄ウシの体をしていた。子どもはいつも、でていき、食べ物をさがす。

さて、男の子は水浴びにிட்டた。娘は酸乳をいれるための半截ヒョウタンをあらいにிட்டた。男の子はそこにいた娘たちをみんなおいはらつた。娘たちをみんなおいはらつた。(男の子はかぶつている皮をぬいで、はだかになる。)

さて、ある娘がミモサの茂みにかくれた。ミモサの木がいう。(ガジャンジとよばれるミモサはオジキソウのように、葉をひらいたり、しめたりする。)

「おまえさんの義理の父母がやつてくると、体をちぢめる。おまえさんの義理の父母がいつてしまうと、体をのばす」

さて、娘は男の子をみた。男の子はたいへんきれいだった。男の子はきれいだった。娘は男の子をみた。

さて、娘は家にかえつてくると、「母さん、わたしは王さまの子どもの雄ウシと結婚する」といった。娘の母親は、「どうして、雄ウシと結婚できるのか」といった。娘は、「わたしはあの雄ウシと結婚する」といった。

さて、娘の母親は王さまにいいにいった。王さまは、「よろしい」といい、その娘を結婚させ、雄ウシのところにつれていった。娘と雄ウシが結婚すると、人びとは娘を雄ウシのところにつれていった。娘はいつも、男の子の様子をみている。娘は老女に、「あの人の皮をどうしたらとれるだろう」といった。老女は娘に、「ふかい穴をほりなさい。そうして、むこさんが自分の皮をとり、おいておくと、おまえさんはその皮をとって、穴にいれなさい」といった。

さて、娘は穴をほった。老女が娘にそういったからだ。娘はふかい穴をほった。雄ウシはやつてくると、屋敷のまんなかでねた。男のやすむ小屋があつたからだ。男の子は皮をぶらさげておいた。

さて、娘はやつてくると、その皮をとり、いくと、穴にいれた。穴にいれると、穴をうめて、そのうえに石をもつてきて、おした。

さて、雄ウシは目をさまし、娘に皮がどこにあるかたずねた。娘は皮がどこにあるかしらないといった。雄ウシは皮がどこにあるか、しらなかった。

さて、男の子、すなわち、雄ウシは小屋にはいつて、よこになった。

さて、男の子の父親が乳搾りをする人たちをいかせた。乳搾りをする人たちは、「きょう、雄ウシはどこにいるのか」という。男の子のところにいる人たちは、「雄ウシはきていない」といった。

さて、人びとは王さまについていった。王さまは、息子と息子の屋敷でみるといった。人びとは王さまの息子を息子の屋敷でみた。

さて、雄ウシはたちあがつた。

さて、雄ウシの父親がやつてきて、雄ウシをみると、雄ウシは人の姿になっていた。男の子はたいへんうつくしかった。

さて、男の子の父親は太鼓をたたいたとさ。

お話はそこにある。わたしはここにいる。お話は、おしまい。

(一九六六年、語り手 ガルア出身のアスタ・ジュンバ、ガルアにて)

140 バター娘

お話、お話。

ある女がいた。女は子どもをうんだことがなかった。人びとは女のことをわらっている。人びとは女のことをわらった。女はイスラム教の先生のところに行った。先生は女に、「おまえさんは屋敷に

かえって、ナベをとり、それをおきなさい。おまえさんは、そのナベのなかにしぼりたての乳をそのナベがいっぱいになるまで、どんなに入れていくのだ」という。女はナベがいっぱいになるまで、しぼりたての乳をいれていった。女はそのナベにしっかりと蓋をした。先生は女に、一週間たつてからナベをひらくのだといった。女は、そのナベをおいておいた。そのナベは一週間のあいだそこにあった。女は、そのナベをひらいた。女がいつてみると、そのなかに年頃の娘はいっていた。その娘はきれいだった。このような毛をもっていた。女は娘をナベからだした。女は年頃の娘を手にいれたのだった。人びとは女が子どもをうんだことがないといって、馬鹿にしていた。人びとは女のことをわらっている。女は娘を手にいれた。ある人がどこからかやってきて、娘のことが気に入ったので、結婚したいといった。女は娘をやらないといった。女は、「わかるな。わたしの娘は、苦勞して、手にいれた。わたしは、この娘を先生のところについて、手にいれた。よろしい、あなたがわたしの娘がほしいなら、娘のために召使いをやとってやり、その召使いに料理をさせ、娘はその食べ物をつたべる。娘は火のそばにいてはならない」という。その人は、娘のことが気に入って、「なんでも、わたしは、おまえさんのいうとおりにする」といった。女は、「よろしい」といった。女たちはこの人に娘をやった。男は召使いをやとった。召使いは、娘のために料理をし、娘のために洗濯をした。娘

はすわっているだけで、料理もつくらなければ、なにもしなかった。娘は屋敷のなかにいるだけだった。むこさんは仕事をしている。召使いはいつも、料理をつくっている。ある日、召使いは腹をたてた。召使いは、その日、料理をしない、娘が火にちかづかなければならないといった。娘は召使いに、「母がなにをいつていたか、きいたの。母はわたしが火にちかづかないようにといった。わたしが火にちかづくと、火のそばで、わたしはなくなってしまう。というの、わたしはバターだから」という。召使いは、「よろしい。あなたが自分の母親がすきだというのなら、あなたの母親がやってきて、きょうこそあなたのために料理をつくればよい。そうでなければ、どうしてもあなたが火にちかづかなければならない」といった。娘はすわった。娘はどんな大声をあげてなく。むこさんはそこからとおくはなれた野原にいる。むこさんはその泣き声をきかなかった。娘は、大声をあげてなく。召使いは、「どうしても、きょう、あなたはご主人さまがたべるために、料理をしなければならぬ。あなたが料理しなくても、きょう、わたしは料理をしない」といった。娘はたちあがつて、火をつけた。娘は火をしつかりたい。娘はそこにすわった。

さて、娘はすわっていた椅子のうえでなくなってしまった。娘はもともとバターだった。娘はそこで、なくなってしまった。バターはとけて、地面にながれていった。むこさんがかえつてくると、娘

がいなかった。地面にバターがながれていた。むこさんはその土をあつめた。むこさんはそこに水をそそいだ。娘はもとのようになつた。むこさんは召使いに、「おまえは、おまえのくにいく道があるき、おまえの家族のところにええればよい。わたしはおまえがきらいだ。わたしはべつの召使いをさがす」という。この召使いはいつてしまった。むこさんはべつの召使いをさがした。この召使いは、ずっと娘のために料理をつくっている。五ヶ月ほど、召使いは娘のために料理をつくっている。娘はすわっているだけだった。

さて、ある日、召使いは腹をたてた。召使いは、「きょうこそ、あんたは料理するのだ。きょうは、料理をしない。あんたが、料理をするのだ」といった。娘は、「よろしい」といった。娘はしかたなく、料理をすることになり、料理をしているところで、なくなつてしまった。召使いはそこにバターがしみていくのを見ると、そのバターをとって、むこさんにみられないように火のなかに入れた。むこさんがかえつてきて、あっちこっちをあるいている。よめさんがいかなかった。むこさんは、バターがしみた土を一生懸命さがしたが、その土がなかった。バターがしみた土を一生懸命さがしたが、その土がなかった。むこさんは、野原にいった。むこさんは、どんな鳥をさがす。むこさんは、トゥプリ語でガーリというカンムリヅルをみつけた。むこさんは、「カンムリヅルよ、なきなさい」といった。カンムリヅルはなきはじめた。

「ラーグジャルのお母さん、グランク。

ラーグジャルのお父さん、グランク。

ラーグジャルのお父さん、みんながわたしにいった。

むこさんが、お母さんの娘が子どもをうんだといった。グラ

ンク。

むこさんが、お母さんにいくようにといった。グランク。

むこさんが、お父さんにいくようにといった。グランク」

(むこさんはカンムリヅルにいくようにという。) 娘の母親のすんでいる村はとおかつた。鳥はとびたち、木のうえにとまる。鳥はうたう。

「ラーグジャルのお母さん、グランク。

ラーグジャルのお父さん、グランク。

ラーグジャルのお父さん、みんながわたしにいった。

むこさんが、お母さんの娘が子どもをうんだといった。グラ

ンク。

むこさんが、お母さんにいくようにといった。グランク。

むこさんが、お父さんにいくようにといった。グランク」

鳥はとびたち、べつの木にとまった。鳥はうたう。

「ラーグジャルのお母さん、グランク。

ラーグジャルのお父さん、グランク。

ラーグジャルのお父さん、みんながわたしにいった。

むこさんが、お母さんの娘が子どもをうんだといった。グラ
ンク。

むこさんが、お母さんにいくようにといった。グラंक。

むこさんが、お父さんにいくようにといった。グラंक

鳥はとびたち、めざす屋敷からとおくなかった。屋敷にちかづい
た。ずっと、屋敷にちかづいてきた。鳥はうたう。

「ラーグジャルのお母さん、グラंक。

ラーグジャルのお父さん、グラंक。

ラーグジャルのお父さん、みんながわたしにいった。

むこさんが、お母さんの娘が子どもをうんだといった。グラ
ンク。

むこさんが、お母さんにいくようにといった。グラंक。

むこさんが、お父さんにいくようにといった。グラंक

娘の母親がそれをきいた。娘の父親もきいた。母親たちはロバを千
匹つれてきて、そのロバの背に粉などなんでもしばりつけて、ロバ
をおつていく。母親たちは子どもをうんだ娘のところにやってこよ
うとする。母親たちは満足だった。母親はわらっている。母親は、
「これで、わたしには娘がいるし、娘は孫をうんだ」といった。鳥
は母親たちのところにつき、母親たちのさきをとんでいく。(一方)
むこさんたちは死体をうめるところをほっている。母親たちは娘が
子どもをうんだとおもっている。ほんとうのこと、娘は死んでい

た。鳥はとびたつ。母親たちはロバをつれて、鳥のあとをあるいて
いく。粉をのせたロバ千匹をつれて、鳥のあとをあるいていく。鳥
は母親たちのまえで木にとまる。鳥はうたう。

「ラーグジャルのお母さん、グラंक。

ラーグジャルのお父さん、グラंक。

ラーグジャルのお父さん、みんながわたしにいった。

むこさんが、お母さんの娘が子どもをうんだといった。グラ
ンク。

むこさんが、お母さんにいくようにといった。グラंक。

むこさんが、お母さんにいくようにといった。グラंक

母親たちは力をいれて、ロバをおつていく。母親たちはわらってい
るだけだ。母親たちはわらっている。娘が死んだところにちかづく
と、鳥がうたう。

「ラーグジャルのお母さん、グラंक。

ラーグジャルのお父さん、グラंक。

ラーグジャルのお父さん、みんながわたしにいった。

むこさんが、お母さんの娘が死んだといった。グラंक。

むこさんが、お母さんにいくようにといった。グラंक。

むこさんが、お父さんにいくようにといった。グラंक

母親たちはロバをたたいてる。粉はみんな地面におちてしまっ
た。というのは、鳥が娘の死の話をしたからだ。母親たちは自分た

ちの娘が死んだといった。母親は野原で大声をだし、野原で気がくるってしまったとき。

お話は、おしまい。

(一九九〇年二月一九日、語り手 ベッロ・デニス、ケイニ村にて。この話はギディギス村出身のジョゼフから聞いたという)

141 脂肪娘(1)

ちいさなお話、ちいさなお話。ジャツラ・タボーイエル。

あるところに老女がいた。貧乏人だったけれども、雌ヒツジをもっていた。老女はでかけていき、糠を手にいれ、その雌ヒツジにやる。でかけていき、糠を手にいれ、その雌ヒツジにやる。でかけていき、糠を手にいれ、その雌ヒツジにやる。そういうことだった。

さて、クモがたちあがった。クモははかりごとをするわるいやつだ。クモはたちあがると、いった。クモは雌ヒツジをみた。この雌ヒツジは王さまのもので、老女が世話をしていた。

さて、クモがいくと、ハイエナがいた。クモはハイエナに、「あそこに雌ヒツジがいる。こい。みにいこう」といった。老女がどこかにいっているときに、クモとハイエナがやってきた。

さて、クモとハイエナはやってくると、雌ヒツジをみた。クモとハイエナは雌ヒツジをみるといってしまった。

さて、クモはやってくると、王さまに、「王さま、王さま、わかりますか。ある老女がいて、あなたのところにいるような雌ヒツジをもっています。王さまのところにも、あのような雌ヒツジはいません」という。

さて、王さまは、「おまえはうそをついている。だれがこの町でわしをもっていないようなものをもっているか」といった。王さまはそのことを町の人たちにしらせた。町の人みんなにラウドスピカーでしらせた。町の人だれがそんな雌ヒツジをもっているか、わからなかった。

さて、町の人びとは男のところいき、女のところいく。

さて、町の人びとは王さまの屋敷の門番たちをつかわし、もっていそうな人のところをみさせた。門番たちがいき、老女のところをのぞいた。

さて、門番たちは雌ヒツジをみつけた。老女はいなかった。

さて、門番たちは、はしっていった。

さて、人びとはいくと、その雌ヒツジをぬすんだ。老女はいなかった。老女がえつてくると、雌ヒツジがいなかった。

さて、雌ヒツジはどこかにいってしまった。

さて、雌ヒツジはいく。

「ムブー、ムブー、プーバの雌ヒツジ。

ヤーキ・ジャーシダニー、プーバの雌ヒツジ。

ヤーキ・ファーターワー、プーバの雌ヒツジ。

ムプー、ムプー、わたしは戦いにいく。

王さまの家来たちの戦いに。

王さまの家来の戦いに」

雌ヒツジは早足であるいていく。

さて、老女が家にかえつてくると、自分の雌ヒツジがいなかった。老女は雌ヒツジの足跡をつけていく。老女はずっと大声をあげている。老女は王さまの屋敷まで、雌ヒツジの足跡をつけていく。老女はやってきて、大声をあげた。雌ヒツジがやってくると、王さまは、「なるほど」といった。

さて、王さまは雌ヒツジをつかまえると、ころしてしまった。

さて、王さまは、「なるほど。このような雌ヒツジはいない。まちがひなく、わしがたべる」といった。

さて、人びとは老女をよんで、「この雌ヒツジをどこで見つけたのか」という。老女は、「あれは王さまの雌ヒツジだよ。まだ小さいなときに、手にいれて、そだててきた」といった。王さまは、「なにがほしい。ほしいものをやる」といった。老女は、「わたしはなにもいらない」という。王さまは、「わたしは雌ヒツジをとるが」という。老女は、「わたしはなにもいらない」といった。王さまは雌ヒツジをとり、雌ヒツジをころすといった。王さまは雌ヒツジをころしてしまった。

さて、王さまは、「おまえさんがほしいものをいうのだ。弁償しよう」といった。

さて、老女は、「あなたになにも弁償してほしくありません。わたしに臓物をください。わたしに雌ヒツジのお腹にあるものをすべてください。ほしいのです。ほかのものは、なにもいりません」といった。

さて、王さまはすべての臓物をとると、老女にやった。老女はいくと、おおきな土ナベの蓋をあけ、腸や胃のなかにあるものから、肝、腸など腹にあったものをすべてそのなかにいれた。雌ヒツジの腹をあけたとき、そのなかにあったものをすべてあけて、老女にやった。王さまは肉をとる。老女はたちあがると、おおきな土ナベをとった。

さて、老女は腹のなかにあったものをすべて、その土ナベのなかにいれた。老女はずっとなく。老女は雌ヒツジのことで、なきやまなかった。

さて、老女はじつとしている。ある日、どの雌ヒツジの臓物にも、虫がわいていた。老女は土ナベのところにいき、蓋をとったが、なにもいかなかった。

さて、夜、老女はよこになった。

さて、老女は腸が子どもになる夢をみた。

さて、老女は土ナベの蓋をとってみた。ある日、みてみると、結

婚してもよい年頃の娘たちが土ナベのなかからでてきた。

さて、老女は娘たちを土ナベからだすと、自分の小屋のなかにおいておいた。娘たちはそこにいる。老女は小屋からでると、食べ物やさがしてきて、娘たちにやる。脂肪が人になっている。肝も、人になっている。腸も、人になっている。腸や胃のなかにあるものも、人になっている。人のしっている臓物はすべて人になっている。

さて、老女はそこにいた。

さて、ハイエナがクモとうろついている。老女はでかけていった。子どもたちは結婚してよい年頃の娘たちだ。

さて、ハイエナとクモがやってきて、水をくれといった。ハイエナとクモは水をのむといった。

さて、腸や胃のなかにあるものからできた娘が、「でていって、客に水をあげなさい」といった。

さて、腸からでてきた娘が、「でていかない」といった。

さて、一人の娘が、「水をあげなさい」といった。

さて、一人がでていった。脂肪からでてきた娘は体がからく、おきあがると、水をくみ、客にやった。娘は水を客にやると、どこかにいってしまった。水を客にやると、どこかにいってしまった。ここで、クモは結婚してよい年頃の娘をみた。

さて、クモはいくと、「なるほど、老女は娘ももっている」とい

った。老女がかえつてくると、娘は老女の姿をみて、「おかあさん、きょう、人（この人はクモをさす。人とクモの区別はついていない）がやってきた。その人はいままでみたことがない」といった。老女は、「それはだれ」といった。娘は、「人がやってきて、水をくれといった。わたしたちはみんなやらないといった。でも、腸や胃のなかにあるものからでてきた娘が脂肪からでてきた娘にたちあがり、そとにでて、その人に水をあげなさいといった。そこで、脂肪からでてきた娘はたちあがり、いくと、水をわたした」といった。老女は小屋にかえると、「えらいことになった。それはほんとうか。わたしを雌ヒツジからはなしたとおなじように、おまえたちからわたしをひきはなそうとしているのだな」といった。

さて、老女は、「その人がまたやってきても、水をやらないように」といった。老女は小屋からでて、草原にいき、食べ物をさがし、子どもたちにもつてくる。

さて、ある日、ハイエナとクモはいくと、娘のことをはなした。ハイエナとクモが老女の小屋にやってくると、ハイエナは人の姿になり、水をくれといった。

さて、ハイエナはたちあがった。ハイエナは老女の屋敷からでて、いってしまった。ハイエナはいくと、町で娘たちの話をした。

さて、娘たちの母親が、「これから二度と水をやらないように」といった。

さて、ハイエナはやってくるといった。

「テキセよ、テキセよ。」

水をくんで、そこにきている客に水をあげなさい」

さて、娘はそれをこぼみ、すわっていた。

さて、ある日、ハイエナがもどってきた。娘は、「ある人がもどってきたよ、かあさん」といった。老女は、「きょうは、その人に水をやるのを禁じる」といった。ハイエナはいつてしまった。娘は、「水をやるのを禁じてくれてよかった」といった。

さて、そのあと、またしても、ハイエナがやってきた。

さて、ハイエナとクモがやってきた。

さて、ハイエナとクモはいつてしまった。

さて、ハイエナとクモがいった。「さあ、

セトゥンビよ、セトゥンビよ。」

この町の人がのめるように、

そとにでて、水をあげなさい。

セトゥンビよ」

胃からでてきた娘が、「わたしが水をもつて、そとにいる人に水をあげなければならないの。母さんにそれを禁じられている」という。

さて、一人の娘が腸からでてきた娘に、「腸からでてきた娘よ、腸からでてきた娘よ、たちあがって、その人に水をあげなさい」と

いった。

さて、腸からでてきた娘が、「わたしがその人に水をあげなければならないの。そこに心臓からでてきた娘がいる」といった。一人の娘が、「心臓からでてきた娘よ、心臓からでてきた娘よ、たちあがって、そとにでて、その人に水をあげなさい」という。心臓からでてきた娘が、「なんだって、わたしに水をやれというのか。わたしは水をくまない」といった。

さて、一人の娘が、「脂肪からでてきた娘よ、脂肪からでてきた娘よ、たちあがって、水をあげなさい」といった。脂肪からでてきた娘はもどつていき、水をくんで、その人にやった。ある日、ハイエナとクモはもどつていき、王さまにすべてをはなした。

さて、王さまの家来たちは、「きょうも、あの人（たぶん、クモのこと）がきました」といった。王さまは奴隷たちをいかせることにした。ハイエナとクモと奴隷たちはでかけていった。さて、ハイエナとクモたちはでかけていった。

さて、ハイエナとクモたちはいつてしまった。ハイエナとクモたちはいくと、老女の家にやってきた。その日、ハイエナとクモは王さまの奴隷をつれてきた。奴隷たちはやってきて、あちらのほうにすわった。ハイエナとクモたちはやってくると、水をくれといった。

さて、娘は水をもつてくるのをこぼんだ。娘たちはやってくる

と、話をし、そのなかの一人をよんで、「肝からでてきた娘よ、肝からでてきた娘よ、水をあげなさい」という。肝からでてきた娘が、「あげない」といった。娘たちは一人ずつ娘の名前をあげていった。みんなやらないといった。のこるは腸からでてきた娘だけだった。「腸からでてきた娘よ、腸からでてきた娘よ、水をあげなさい」

さて、腸からでてきた娘はたちあがり、そこにいる人たちに水をやった。水をうけとると、腸からでてきた娘をつかまえて、ウマのうえにのせた。王さまの奴隷たちがいつてしまうと、娘たちは大声をあげる。王さまはその娘をとってしまうと、よめさんにしようとした。

さて、王さまの奴隷たちは娘を王さまの屋敷につれていった。

さて、王さまの奴隷たちは娘をつれていった。つれていくと、娘を王さまにわたした。

さて、奴隷たちは娘を王さまにわたした。王さまは娘をみて、「こんな娘がこの世にいるのか。老女をさがして、くるようにいいなさい」といった。老女はたちあがり、やってきた。老女がやってくる。老女は王さまの屋敷につくと、「きょう、王さまの奴隷たちは腸からでてきた娘をつれていつてしまった」といった。老女は大声をあげている。

さて、老女はやってくると、王さまに、「どういうこと」といっ

た。王さまは、「なんと、おまえさんにはこんな娘がいるんだな」といった。老女は、「わたしの雌ヒツジの臓物があのような娘になったのです。アッラーはわたしをかえりみられたのです」といった。

さて、王さまは、「わしはほっておくわけにはいかん。そういうことなら、おまえさんのほしいものをおまえさんにやるから、なにがほしいかいつてくれ」といった。老女は、「いいえ、王さま、いりません。わたしはあなたに娘をやるわけにはいきません」といった。王さまは、「あの娘はもう」という。王さまは娘をころすといった。王さまは老女をころすといった。老女は、「あなたのしたようにしてください。でも、ころさないでください。わたしの娘は火のちかくにすることができません」といった。王さまの奴隷たちは、「わたしたちはあの娘をとりました」といった。老女は、「わたしの娘がほしいなら、つめたい水のあるすずしいところにおらせてください。あつものにふれさせないでください。日のあたるころにおらせないでください。うごかないようにしてください」といった。王さまは、「わしはあの娘に、なんでもおまえのいうとおりのことをしてやる」といった。

さて、老女は、「わたしの娘がほしいなら、あなたの町をわけておくれ」といった。王さまは、「わしはわしの町をわけてやる」といった。すぐさま、王さまは町をまっ二つにした。王さまは半分は

老女のもので、半分は自分のものだといった。というのは、自分のよめさんのためだという。

さて、老女は、「よろしい、それでも、わたしの娘は食べ物が十分ないとこまります」といった。王さまは、「わかった」といった。

さて、王さまはいくと、娘たちをつれにいった。いくと、老女とすべての娘をつれて、町にもどってきた。このようにして、町の人たちはやってきて、娘をつれていき、結婚させた。お金持ちや、財産のあるもの、重臣たちはみんな娘と結婚した。老女はおちついたね。娘もおちついた。王さまは娘がすきだった。それで、王さまの屋敷にいる女たちは、「なるほど。日のあたるところにおらせないということは、あの娘は脂肪だからだ」といった。王さまは家来たちのところにいき、戦いにいった。

さて、王さまたちは娘をあとにのこした。その日、王さまの屋敷にいる女が娘のところに行って、「たちあがつて、火をもやしにきなさい。わたしたちはずっとおまえさんのために料理をしている。おまえさんは料理をしないのか」といった。

さて、娘は自分は料理をしないといった。女たちは、「そういうわけにはいかない」といった。

さて、女たちはたちあがり、娘をたたくといった。

さて、娘はいわれたままになるのをこぼんでいたが、たちあがり、いくと、火をもやす。娘はいくと、火のそばにすわっている。

女たちは娘にそこにすわって、料理をするようにといった。娘は火のそばにすわっている。

さて、娘はだんだんとけていく。娘はとけてしまった。脂肪は地面にとびちった。頭だけがこった。娘は、「ああ、母さん、ああ、母さん、母さんがいっていったようになった」といって、なく。そのうちに、頭もとけてしまった。女たちは死にたければ、死ねばよい、王さまが自分たちをころしたいなら、ころせばよいといった。娘は地面のうえてただの脂肪になってしまった。さて、王さまがかえってきた。王さまの召使いの女が、王さまのよめさんの小屋までやってきた。

さて、召使いの女は娘をみつけれなかった。召使いの女は娘がどこにいるかたずねた。

さて、女たちは、「屋敷にいる女たちはこのようにした」といった。王さまがやってきて、「なんだって、この女たちの首をきつてしまふのだ」といった。王さまには家来がいる。奴隷たちはやってくる、女たちの首をみんなはねてしまった。

さて、王さまは老女に、「どうしたものか」といった。老女は、「わたしの脂肪をあつめておくれ」といった。

さて、土がつめたくなると、老女は脂肪をみんなあつめて、それをもっていつてしまった。

さて、老女はいくと、それを土ナベにいれた。アッラーはまたし

ても、老女の娘をもどされた。こうして、老女は町を手にいれた。老女の娘はもとの人の姿にもどった。老女は娘をある人と結婚させた。老女は町を自分のものにしたとさ。

このようにして、このお話はおわった。

(一九八三年一月二一日、語り手 ハッジャ・ラブラトゥ・イス
フ、ガウンデレにて)

142 脂肪娘 (2)

お話、お話。

ある女がいた。女は自分の畑にいく。いつも、女は畑にでかけていく。女はでかけていき、畑をたがやす。女はでかけていき、畑をたがやす。女はでかけていき、畑をたがやす。女はでかけていき、畑をたがやす。

さて、ある日、女はでかけていった。女がいくと、やせ細った雌ウシがいた。女はその雌ウシを屋敷につれてかえった。女はその雌ウシにどんどんたべさせていく。とうとう、雌ウシは、おおきくなつた。雌ウシはおおきくそだった。

さて、クモがその屋敷にやってきた。クモはやってくると、のむために水をくれといった。のむために水をくれとたのむと、その屋敷の人たちはクモに水をくれた。クモはもらった水をポケットにい

れた。

さて、クモははしって、王さまのところいき、「王さま、王さま。あなたには耳がいくつありますか」といった。王さまは、「わたしには、耳が二つある」といった。クモは、「それに二つ耳をつけくわえて、この話をよくきいてください」という。

さて、王さまは、「二つつけくわえた」といった。王さまはクモの話をよくきくために耳を二つつけくわえた。クモは、「わたしが老女の屋敷にいくと、おおきな雌ウシがいました。たいへんおおきな雌ウシでした」という。

さて、王さまと奴隷たちは老女の屋敷にいった。奴隷たちはいくと、その雌ウシをつかまえた。奴隷たちは雌ウシをひっぱる。雌ウシはいこうとしない。奴隷たちはウシをひっぱっていこうとする。雌ウシはいこうとしない。奴隷たちは雌ウシをたたく。雌ウシはいこうとしない。奴隷たちは雌ウシをおおうとする。雌ウシはいこうとしない。

さて、王さまは、「わしはクモをたたくのか、雌ウシをたたくのか」といった。クモは、「雌ウシをたたいてください」といった。さて、雌ウシはいった。

「タピ・タピ・イエー、テイルコン・サラ・カンバナ・コダ
イ・カリ・ス。

いこう。王さまの屋敷にいこう」

さて、雌ウシは老女の屋敷からでた。雌ウシをつれた奴隷が王さまの屋敷のまえについた。雌ウシは王さまの屋敷にはいろうとしない。雌ウシが屋敷にはいろうとしないので、奴隷たちは、「クモをたたくのか、雌ウシをたたくのか」といった。

さて、雌ウシは、「わたしはクモをたたく」といった。クモがいった。

「シゴ・シゴ・イエー、ティルコン・サラ・カンバナ・コダイ・カリ・ス。

いこう。王さまの屋敷にいこう」

さて、雌ウシは王さまの屋敷にはいった。奴隷たちが雌ウシをよこにしようとするが、雌ウシはよこになろうとしなかった。奴隷たちが雌ウシをひっぱるけれども、雌ウシはよこにならなかった。奴隷たちが雌ウシをひっぱるけれども、雌ウシはよこにならなかった。

さて、奴隷たちは老女をたたくといった。

さて、老女がいった。

「コンチ・コンチ・イエー、ティルコン・サラ・カンバナ・コダイ・カリ・ス。

いこう。王さまの屋敷にいこう」

雌ウシはよこになった。奴隷たちが雌ウシの喉をかききろうとするが、きれなかった。短刀で喉をかききろうとするが、きれなかった。

た。奴隷たちは剣をもってくる。でも、きれなかった。奴隷たちは雌ウシをたたいた。たたいても、自分の体をきられようとしなかった。

さて、奴隷たちはまたしても、老女をたたくといった。

さて、人びとは、「奴隷たちが老女をたたくか、クモをたたくか、雌ウシをたたくのか」といった。

さて、老女がいった。

「ヤンコ・ヤンコ・イエー、ティルコン・サラ・カンバナ・コダイ・カリ・ス。

いこう。王さまの屋敷にいこう」

さて、雌ウシは老女に、自分が奴隷たちにころされたら、自分の腹にあるものをとり、もどっていくようにといった。老女が腹にはいつているものをすべてとり、それをたべるなら、なるように、でも、それよりほかのものと皮をとらないようにといった。老女は腹にはいつているものをとり、いくと、おいておいた。老女は野原にでかけていく。いつも、老女は畑にいつて、草取りをしてかえってくる。家にもどると、自分のものがすべて、きれいになっている。だれかが、老女のをきれいにし、食べ物をつくつて、老女のためにおいておく。

さて、ある日、老女は野原にいく真似をする。

さて、老女はかくれた。臓物をいれている土ナベから、臓物が

きあがつた。臍物はきれいな、きれいな、きれいな娘になった。老女は娘たちの手をとった。老女は娘たちの手をとると、一人の娘に、「おまえさんの名前はなんというの」とたずねた。娘は、「タハンジ（ハンジはハウサ語で、腸という意味）です」といった。老女はもう一人に、「おまえさんの名前はなんというの」という。娘は、タハンタ（ハンタはハウサ語で、肝臓という意味）という。老女はもう一人に、「おまえさんの名前はなんというの」という。娘は、タトゥンビ（トゥンビはハウサ語で、胃袋の意味）だという。老女はもう一人に、「おまえさんの名前はなんというの」という。娘は、タランジだという。

さて、ある日、クモが老女のところにやってきたら、娘たちが仕事をしていた。クモは水がのみたいからと水をたのんだ。クモが水をもうとして、水をくれといった。

さて、老女がいった。

「タハンジよ、タハンジよ、

水をくんで、きて、この人にあげなさい」

タハンジはいう。

「それはできない。それはできない。母さん」

老女はいう。

「水をくんで、きて、この人にあげなさい。

タトゥンビよ、ナー・イナー」。

タトゥンビよ、タトゥンビよ、
水をくんで、きて、この人にあげなさい」
タトゥンビがいう。

「それはできない。それはできない。母さん」
老女はいう。

「水をくんで、きて、この人にあげなさい。
タトゥンビよ、ナー・イナー」。

タトゥンビよ、タトゥンビよ、

水をくんで、きて、この人にあげなさい」

タトゥンビがいう。

「いいわ、母さん」

タトゥンビは水をくんで、もってきた。タトゥンビはやってくと、クモに水をやった。

さて、クモは水をポケットにいれると、王さまのところにいき、

「王さま、王さま。あなたには耳がいくつありますか」といった。

王さまは、「わしには、耳が二つある」といった。クモは、「それにも、二つ耳をつけくわえて、この話をよくきいてください。またして、あの老女の屋敷であったことです。わたしがいくと、きれいな、きれいな、きれいな娘たちがいました。あそこで、娘たちは老女のために食べ物をつくっています。わたしは娘たちをみんなよびました。でも、娘たちはくるのをこばみました。一人の娘がやっ

てきて、わたしに水をくれました」といった。王さまは、「よろしい。おまえがうそをいつているのなら、わしはおまえにどうすればよいか」といった。クモは、「わたしをころしてください」といった。奴隷たちは王さまの召使いたちとでかけていった。いくと、娘たちをつかまえて、つれてきた。奴隷たちは娘をつかまえて、王さまのところにつれてきた。王さまはその娘たちをすべてめとるといった。王さまは娘たちと結婚すると、ほかのよめさんたちをみんな離縁した。

さて、王さまは戦いでかけていった。戦争にいったのだ。王さまは戦争にいき、よめさんたちを屋敷にのこした。よめさんたちは食べ物をつくっている。もともと脂肪だった娘は、タトゥンビとよばれたば、タトゥンビは料理をしなかった。タトゥンビは屋敷にいたただった。ほかの女たちが食べ物をつくると、タトゥンビにやった。王さまがでかけていってしまったので、女たちはタトゥンビにも、食事をつくるようにといった。女たちに食事をつくれといわれたので、料理しにいった。

さて、タトゥンビオはとろけてしまった。タトゥンビは火のそばで、とろけてしまった。

さて、女たちはトビをよんだ。女たちは、「わたしたちがおまえさんを王さまのところに使いにだすと、おまえさんはなんというか」といった。トビは、「わたしは、『おまえさんたちに使いにださ

れた。おまえさんたちは王さまのよめさんのタトゥンビをつれてきて、火のそばまでおしていった。それで、タトゥンビはとけてしまった。とけて、水のようになってしまった」といった。女が、「おまえさんはいってはいけない」という。女はオウムをよんだ。女たちは、「わたしたちがおまえさんを王さまのところに使いにだすと、おまえさんはなんというか」といった。オウムは、「わたしはいって、おまえさんたちのいうことをみんないう」といった。女たちは、「それでは、おまえさんはいって、王さまに『タトゥンビは火にあたつてとけてしまった。とけて、水のようになってしまった』といいなさい」といった。オウムはいそいでいった。オウムは王さまが戦争をしているところまで、いった。

さて、王さまはオウムのいうことをきいた。オウムは、「王さま、王さま」という。王さまは頭をあげて、みた。みると、木のうえにオウムがいた。王さまは、「なんだ」といった。オウムは王さまに「あなたのおよめさんはとけてしまいました」といった。王さまは戦いをそのままにしておいた。戦争をそのままにしておいたのだ。王さまは屋敷にかえってきた。王さまがやってきて、みた。王さまがやってきて、みると、自分のよめさんが火のそばでとけてしまっていた。

さて、王さまは老女をよんだ。老女がやってきた。やってくと、老女はタトゥンビがとけてできた油をみんなあつめて、それを

ナベにいれて火にかけた。

さて、タトゥンビはもとよりずっときれいな女になった。まえとおなじように、きれいになった。王さまはタトゥンビに、「おまえは、わしがおまえのライバルたちになをしたらよいというのか」といった。タトゥンビはライバルたちをころしてほしいといった。王さまの奴隷たちはライバルたちをころしてしまった。奴隷たちはその女たちの首をあつちこつちにいった。奴隷たちはタトゥンビのライバルたちをみんなころしてしまったとき。

よろしい。このお話は、おしまい。

(一九八三年一月二二日、語り手 アーマドゥ・ルファイー、ガウンデレにて。この話は、ガウンデレで、ンブム族のベベからきいたという)

143 ウシをのみこんだジャモ(1)

男がいた。男の名前はジャモ・フェレットという。ジャモ・フェレットが名前だった。ジャモはコーラン学校で勉強をしている。ジャモの母親が死んでしまった。父親も死んでしまった。人びとはジャモをある女のところにつれていった。女はジャモにコーランの読み方をおしえる。

さて、ほんとうのことジャモにはウシなどありとあらゆる財産が

あった。

さて、ジャモは父親にウシなどの財産をのこしてもらい、それがかつていいる。ウシをかつていいるところで、かわいた棒をみつけ、それでウシをたたくと、ウシはそれぞれをのみこんでいき、最後に三頭になった。ジャモはそれを取り、自分のお腹にいれた。ジャモは、「よし」といった。

さて、ジャモは雌ヒツジをたいた。ジャモはそれをのみこむ。ジャモは雌ヒツジをたいた。ジャモはそれをのみこむ。のこるは一頭のみになった。ジャモはそれをのみこむ。ジャモはウシをたたく。そのウシはべつのウシをのみこむ。べつのウシがそのウシをのみこむ。こうして、のこるは一頭のみになった。そこで、ジャモはそれをのみこんだ。ジャモは雌ヤギをたたく。その雌ヤギはべつの雌ヤギをのみこむ。べつの雌ヤギはその雌ヤギをのみこむ。とうとう、ジャモはみんなのみこんでしまった。お腹には、三つの固まりができた。

さて、ジャモは世にでていった。

さて、ジャモはある女に求婚した。ジャモはその女をめとつた。

さて、よめさんは食べ物をヒョウタンのかけらにのせて、ジャモにやる。ジャモは餌のなかでねる。よめさんはジャモのことがきらいでしかたがなかった。

さて、ある日、ある老女はジャモのよめさんをよんで、「おまえ

さんのむこさんには財産がある。おまえさんはあの人をしていることをやめなさい」といった。

さて、金曜日、女のむこさんは屋敷からでて、村の人たちがみんながあつまるモスクにいつて、（自分がはきだした）いい服をきて、（自分がはきだした）自分のウマにまたがった。金曜日がくると、男はいつもよめさんにコーラの核をおくるのだった。

さて、ある日、男は屋敷からでて、金曜日のモスクにいつた。男はかえってくる。男は自分のウマにのつた。

さて、老女は男のよめさんをよび、よめさんに、「きて、きょうこそ、おまえさんのむこさんをみてみなさい」といた。

さて、よめさんはやつてきて、むこさんを見ると、「なんだつて」といつた。ジャモがかえってくるまで、よめさんがしないことはなかった。

さて、ジャモのウマはあるくとき、こんな音をだした。

「ジャモよ、ジャモ・フェレットよ。」

ジャモよ、ジャモはヒョウタンのかげらで食べ物をたべる。

ジャモよ、ジャモは炉のなかでねる。

ジャモよ、ジャモ・フェレットよ。

ジャモよ、ジャモ・フェレットよ。

ジャモよ……

さて、よめさんはきかざつて、きれいにした。

さて、むこさんがかえってきた。よめさんは食べ物をつくつて、琺瑯引きの食器にいれて、むこさんにわたした。むこさんは、「いや、わたしは琺瑯引きの食器にはいつた食べ物をたべない。わたしはヒョウタンのかげらにもつた食べ物をたべる」といつた。よめさんは、「おねがいだから、琺瑯引きの食器からたべておくれ」といつた。むこさんのジャモはなにをいつてもきかなかった。ジャモは夜になると炉にもどつた。よめさんはジャモに、「おねがいだから、きておくれ。ベッドのうえにきて、ねておくれ」といつた。ジャモはよめさんに、「いいや、わたしは炉のなかでねるのだ」といつた。ジャモはよめさんに、「おまえがそうしてほしいなら、琺瑯引きの食器から食べ物をたべる。おまえは、ある動物の尾っぽをとりに行くのだ。ああ、あの動物はなんという名前だったかな。その動物は、ねると、肛門がまっかになる。野原にいる動物だ。たぶん、あれはサルだ。もし、おまえがサルの尾っぽを手にいれたら、そうしてやる。おまえがサルの尾っぽを手にいれて、それで、琺瑯引きの食器をきれいにしたら、わたしはそれで食べ物をたべてやる」といつた。よめさんは男に、「よろしい」といつた。娘は家からでていき、野原にいつて、夫にいわれた動物の母親のところへいつた。その動物の母親は人間だった。動物の母親は娘に、「おまえさんはどうしてここにきたのか」といつた。娘は動物の母親に、「こういうことで、ここにきた。わたしはおまえさんの末っ子の尾

つぽがほしい。わたしはその尾っぽでジャモが食べ物をたべられるように、琺瑯引きの食器をきれいにする」といった。動物の母親は娘に、「よろしい。尾っぽがほしいなら、いつて、おおきな半截ヒョウタンいっぱいのおえをつかまえて、もつてきておくれ」といった。娘は村にかえると、おおきな半截ヒョウタンいっぱいのおえをとり、それを動物の母親のところにもつていった。動物の母親は娘に、「それでは、きて、わたしのお尻のしたにはいり、そこにおりなさい」といった。

さて、娘はやつてきて、動物の母親のお尻のしたにはいつて、かくれていた。そのうちに、子どもたちがかえつてきた。子どもたちは、「母さん、そこになにかの臭いがする。人の臭いがする。それをたべたい」という。

さて、母親は、「いいや、ここにはなにもいない。おまえたちはわたしがたべたいのならべつだけれども。わたしがたべたいのなら、たべなさい。きて、わたしをたべなさい。でも、だれもきていない」といった。子どもたちは、「いいや、そこで人の臭いがする」という。母親は、「そんなことはない。たべたいなら、きて、わたしをたべなさい」といった。

さて、子どもたちはいくと、よこになって、ねてしまった。

さて、夜がふけた。子どもたちの肛門はみんなまっかになった。

さて、子どもたちの母親は娘にお呪いをわたし、「尾っぽをきつ

て、手にいれて、にげていくとき、このお呪いをなげなさい。おまえさんはこのお呪いをなげたところからでてくる木のうしろにいきなさい。おまえさんがにげていくとき、このお呪いをなげなさい。このお呪いをなげたところに、木がでてくる。木がでてきたら、おまえさんはその木のうしろにいきなさい。おまえさんはわたしの子どもたちから身をかくすことができるらう」といった。

さて、夜がふけた。

さて、母親はいくと、末っ子の尾っぽをきつて、娘にわたした。そのうちに夜が明け、朝になった。子どもたちは、末っ子の尾っぽがないのに気がついた。娘はどんどんにげていく。娘はお呪いをもっている。もうすこしで、屋敷につくところまでやつてきた。子どもたちは末っ子の尾っぽがないのに気づいた。それで、子どもたちはたちあがった。子どもたちは、「末っ子の尾っぽがあつたら、どんどんもどつてくるように」という。それをきいて、母親は、「末っ子の尾っぽがあつたら、どんどんまえにすむように」といった。娘はどんどんにげていき、自分たちの屋敷のちかくについた。そこで、娘はお呪いをなげた。すると、そこに木があらわれた。

さて、娘は木のうしろにいった。

さて、娘は屋敷についた。娘は尾っぽを手にいれて、それでジャモのために琺瑯引きの食器をきれいにした。娘は食器をきれいに

し、それで食べ物をつたへるようにと、ジャモにわたす。こうして、娘とジャモは仲直りをしたとき。

(一九八三年一月二〇日、語り手 ハディージャ・ブーバ、ガウ
ンデレにて)

144 ウシをのみこんだジャモ(2)

ちいさなお話、ちいさなお話。

王子がいた。王子の父親には王子しか子どもがうまれなかった。王子の母親も、王子しかうまなかつた。王子は、「わたしは、よその土地まで、世の中をみにいく」といった。王さまは、「よろしい」といった。王子は、自分の服をみんなのみこんだ。自分のウマも、自分の奴隷も、のみこんだ。王子のお腹はこんなにおおきくなった。王子はそこにいた。

さて、王子は檻をきた。王子は父親の領地につく。人びとは、「王子さんがきた。王子さんがきた。王子さんに雌ヒツジをころしてあげよう」といい、雌ヒツジをころす。王子がいくと、「王子さんに雌ウシをころしてあげよう」といい、雌ウシをころす。人びとは、「王子さんがきた。王子さんにニワトリをころしてあげよう」という。そのつぎの日も、目がさめると、あるいていく。そのつぎの日も、目がさめると、あるいていく。とうとう、王子は父親の

領地をでた。王子はべつの王さまの領地に行く。人びとは王子に、「おまえさんはなんという名前か」とたずねる。王子は王さまの屋敷のまえで、「平安、なんじらにあれ」と挨拶をした。人びとは、「おまえさんはなんという名前か」という。王子は、「わたしの名前はこげめし王子」という。王子はフンドシしかつけていない。王子はきていた服をぬいで、ほかした。人びとが、「こげめし王子」といった。王子は、「はい」といった。人びとは、「よろしい、それでは、きて、王さまの屋敷にすみなさい。友よ、こげめし王子よ」という。王子は、「よろしい。問題はない」といった。人びとが食べ物をつくって、たべると、「こげめし王子よ、きて、琺瑯引きの食器をもつていきなさい。いって、のこったものをたべろ」という。王子は、「なんだって、わたしはこげめししかたべない」という。人びとは王子にこげめしをやる、王子はそれをたべる。このようにして、王子は王さまの屋敷にいる。

さて、王さまの娘が結婚する年頃になった。

さて、王さまは、まだ人をのせたことのない自分のウマをだしてきた。王さまは、「このウマにのって、この牛乳のはいった半截ヒョウタンをもつて、ウマをはしらせ、牛乳をかたまらせ、やってきて、半截ヒョウタンをおくことのできるものが、わしの娘と結婚する」といった。みんな、一生懸命になって、ウマにのって、はしってきて、半截ヒョウタンをもちあげようとするが、できない。

さて、こげめし王子は王さまにちかづいていき、「わたしがやってもいいでしょうか。アッラーがあなたにいいことをしてくださいように」といった。だれかが、「なんだって、おまえはおおきな腹をしている。こげめし王子よ、おまえはどこでおまえの服をぬぎすてたのか。どうか、ここにおまえの墓をほらせないでくれ」といった。王さまが、「なんだって、こげめし王子にもやらせてやれ」といった。人びとはこのような話をしている。

さて、こげめし王子はウマにまたがった。王子はどんどんウマをはしらせ、やってきて、ウマをムチでうつと、ウマはひざまずいた。王子は牛乳のはいった半截ヒョウタンをとり、もどつていった。ウマをはしらせ、野原にいった。牛乳はかたまつた。王子はかえつてきて、ウマをムチでうつと、ウマはひざまずいた。王子は牛乳のはいった半截ヒョウタンをおいた。王さまはこげめし王子に、「おまえさんになつて、わしの娘をやる。結婚するがよい。わしはおまえさんに屋敷を半分やる」といった。

さて、王子は、「よろしい。アッラーがいいことをしてくださいますように」といった。人びとは娘を王子のもとに嫁入りさせた。娘は一日中なくて、「父さんはわたしをきらつて、こげめし王子といっしょにした」という。夜になり、娘は食べ物をつくると、王子のところにすこしだけ、かわらけにのせてもっていく。娘はこげめし王子に、「たべなさい」という。こげめし王子は、それをたべて、

台所でねる。娘はでかけていくと愛人をよぶ。娘と愛人はかえつてくると、ねる。娘と愛人は小屋のなかでねる。いつも、そのようだった。

さて、女は市場にいくときに、ゴマ、豆などを地面にちらかしておく。女はこげめし王子に、「わたしがかえつてくるまでに、これをそれぞれ種類別にひらいあつめておくのだ。火をおこし、おかずをたくナベを火にかけ、わたしがかえつてきて、食事をつくれるようにしておくように」という。女は市場にいく。女が市場にいくと、こげめし王子は奴隸や女奴隸をはきだす。奴隸たちは女がまきちらしたものをひろいあげる。あるものは、掃除をする。あるものは、食器をあらう。あるものは、水をくむ。あるものは、モロコシをつく。奴隸たちは仕事をしてしまう。王子は一人をのこして、みんなのみこんでしまう。王子は服をはきだす。王子はウマをはきだす。王子はいい格好をする。王子は服をきて、剣を肩にかけて、ウマにまたがる。王子はでかけていき、そのへんをまわり、市場にでかけていき、一日中ぶらぶらしている自分のよめさんといっしょになる。よめさんは、「わたしはおまえさんのような人をさがしている。どうしたのか、父親は、わたしをこんなお腹をし、フンドシだけしかしていないこげめし王子といっしょにした。もし、うまいやりかたがあるなら、わたしはこげめし王子をおいだし、あなたと結婚する」という。女は自分がであっているのがこげめし王子だとい

うことをしらない。こげめし王子は女に、「うんうんうん」とこたえている。

さて、昼過ぎの礼拝のときがくると、こげめし王子は女に、「いま、おまえさんは家にかえったほうがよい」という。女は、「よろしい」という。

さて、よめさんがたちあがり、家にかえつていくと、こげめし王子は、ウマにのり、奴隸をさきにあるかせる。王子は女に、「つぎの市場までさようなら」という。女は、「はい」という。王子は回り道をする、女よりさきに家にかえる。奴隸たちはウマの足をきれいにする。王子はすべてをまえとおなじようにのみこんでしまふ。王子はフンドシをしめる。王子はすわる。腹はまえとおなじようになる。女がかえつてくる。女は、「父無し子、こげめし王子よ。仕事をみんなしおえたのか」という。王子は、「仕事をしてしまった」といった。よめさんはきつい女だったので、かえるとそういった。女は食事をつくると、愛人にはきれいな琺瑯引きの食器に食物をもつてやる。こげめし王子には、かわらけによそつてやる。こげめし王子は食事をする、食器をあらう。夜、こげめし王子は台所にねる。いつも、そのような様子だった。ほんとうのこと、老女が隣にいた。

さて、老女はこげめし王子がすることをみていた。こげめし王子がすることをみていて、女に、「おまえさんが市場でである男は

だれなのかしているか。あれは、おまえさんのむこさんだよ」という。女は、「そんなうそをつかないでくれ」といった。老女は、「よろしい、つぎの市場の日、おまえさんはわたしのところにきて、あの人のすることをみればよい」といった。

さて、市場の日がやってきた。女はいつもとおなじようにいろいろなものをまきちらかした。女はこげめし王子に、「仕事をみんなしておくのよ。不信心ものめ。ぶらぶらしているフンドシをおいておきなさい。おかずをたくナベを火にかけなさい。わたしは、市場にいく」という。女はいい格好をする。女は若者にあいにくでかけていく。

さて、女は市場にいくようにし、そのへんをまわつて、老女のところに行った。

さて、こげめし王子は奴隸たちをはきだした。奴隸たちは仕事をしあげてしまった。王子は奴隸とウマをはきだし、いい格好をする、ウマにのつて、奴隸をさきにあるかせた。

さて、女は、(その様子をみていて)「母さん、おねがい。いかせておくれ。あの人をつかまえるの。おねがい。おねがい」という。老女は、「なにをいつているの。まちなさい」という。女は、「おねがい。いかせておくれ。あの人をつかまえる」という。

さて、女はやつてくると、こげめし王子をつかまえてしまった。王子ははきだしたものをのみこむことができなかった。

さて、女と王子は家にかえってきた。日暮れどき、女は小屋にきれいな寝具をひろげた。女は食べ物をつくると、こげめし王子がたべるようにともってきた。女は夕食を蓋のついた琺瑯引きの食器にいれて、こげめし王子がたべるようにと、水といっしょにもってきた。こげめし王子は、「とんでもない。わたしは、かわらけでたべろ」といった。女はずっとないている。女は自分の父親に、「父さんが結婚させてくれたむこさんはわたしとねないばかりか、わたしのつくったものを食べたべようとしない」といった。王さまはこげめし王子をよんで、話をした。こげめし王子はいくと、ベッドのうえにねた。女はこげめし王子に話をした。こげめし王子は女に返事をしようとしなかった。女はこげめし王子にいたずらをするが、王子は体をうごかさない。女はこげめし王子にうまいことをする。こげめし王子は女に尻をこく。そうしているうちに、ある日、女は王さまにうったえた。女とこげめし王子は家にかえつてくると、二人でねる。ながいときがたった。こげめし王子は、「王さま、わたしはわたしの村にいったほうがよいとおもいます。わたしは、すこしのあいだわたしの村をみて、かえってきます」といった。王さまは王子に、「おまえさんはおまえさんのよめさんと故郷にかえるのか」という。王子は、「もちろん、わたしはわたしのよめさんといっしょにいきます。奴隷といっしょにいつて、かえってきます」といった。王さまは、「よろしい」という。こげめし王子はいい格好を

して、ウマにまたがった。奴隷がさきをあるいていった。よめさんは、サンダルをはいて、自分もウマにのった。王子たちはどんどんすすんでいく。とうとう、王子は女の父親の領地をでて、自分の父親の領地にはいった。人びとは、「王子さま、ようこそ。王子さま、ようこそ」というと、ニワトリをころしてくれる。人びとは、「王子さま、ようこそ。王子さま、ようこそ」というと、雌ヒツジをころしてくれる。人びとは、「王子さま、ようこそ」というと、王子のために雌ヤギをころしてくれる。こげめし王子は村むらで、いろいろなものをたべはじめる。自分の村につくと、わかるかな、父親はすっかり年をとっていて、目がみえなかった。ほんとうのころ、こげめし王子はかえつてくると、王さまになることになっていた。こげめし王子の父親は髭がタバコの煙のようにしろくなっていたが、息子のほうをみた。父親の目はみえなかったが、人びとは王さまに王子がかえってきたといった。父親はすわってない。父親は、「わしのこげめし王子がかえってきたのか」という。父親は王子をなんどもさわり、それが自分の息子だということがわかった。父親はずっとないている。母親もやってきて、ないている。

さて、王子はいくと、よめさんたちをほっておいた。王子はよめさんたちになにもたべるものをやらなかった。よめさんたちを屋敷にいれなかった。

さて、王子は、「わたしがあちらの村でもらった王さまの娘をよ

びなさい」といった。人びとは女をよんだ。人びとが女をよぶと、女がやってきた。王子は女に、「わたしが、おまえさんたちが馬鹿にしていたわたしの村にいる様子をみたか。それでは、家にかえれ。わたしはおまえさんになにもやらない。あす、かえればよい」といった。

つぎの日、王子はつれてきたもの一人一人に六千フランずつやった。王子は王さまの奴隷に女をあずけた。王子は女をわたした。王子は女にも、六千フランと着物とウマをやった。王子はおなじようにみんなにやった。王子は、「おまえさんたちの村にかえりなさい。わたしはかえらない」といった。

さて、女たちは自分たちの村にかえってきた。女たちは、「なるほど、こげめし王子はれっきとした王さまなのに、わたしたちはちゃんとそれらしいことをしていなかった」といったとき。

お話は、おしまい。

(一九六九—七〇年、語り手 パーセーウオ村出身のアブドゥッ
ラーイ・ウスマース、マルアにて)

145 とおくの川にいった子ども(1)

お話をしよう。

この話も、二人の娘の話だ。二人の娘はおなじ父親の子どもだった。

た。母親はちがった。

さて、一人の娘の母親が死んでしまった。母親は死んでしまい、そのあとに娘をのこした。

さて、もう一人の女はその娘と自分の娘をいっしょにし、そだてた。父親は略奪戦争にでかけていった。

さて、女は食べ物をつくつても、継子にはやらなかった。自分の娘にだけやるのだった。

さて、継子がカユをのんでいるとき、カユが敷皮のうえにこぼれた。女は、「おまえの父親の敷皮をルウォンバガジェの池にもつていって、あらいなさい。おまえはここにいてはならない」といった。

さて、娘の父親はいなかった。ルウォンバガジェの池には精霊などありとあらゆるものがある。娘は敷皮を肩にかけていく。娘がいう。

「おまえさんは、ルウォンバガジェの川か。

それとも、ルウォンバガジェの川ではないのか。

アバ・コー・ラーナー、ドーミン・ジルギ

サー・ルワ、カー・ルウォンバガジェ」

木が娘に、「なんだって、その池はまだずっとさきにある」という。娘はさきにあるいき、またしても、たちどまり、いう。

「おまえさんは、ルウォンバガジェの川か。

それとも、ルウオンバガジェの川ではないのか。

アバ・コー・ラーナー、ドーミン・ジルギ

サー・ルワ、カー・ルウオンバガジェ

そこにいたものが、「もうすぐしたらつく」という。

「おまえさんは、ルウオンバガジェの川か。」

それとも、ルウオンバガジェの川ではないのか。

アバ・コー・ラーナー、ドーミン・ジルギ

サー・ルワ、カー・ルウオンバガジェ

水がうごいて、くろくなった。娘はいう。

「おまえさんは、ルウオンバガジェの川か。」

それとも、ルウオンバガジェの川ではないのか。

アバ・コー・ラーナー、ドーミン・ジルギ

サー・ルワ、カー・ルウオンバガジェ

さて、水があかくなつた。

「おまえさんは、ルウオンバガジェの川か。」

それとも、ルウオンバガジェの川ではないのか。

アバ・コー・ラーナー、ドーミン・ジルギ

サー・ルワ、カー・ルウオンバガジェ

さて、こんなにながい髭をした老人がでてきて、娘に、「子どもよ」といった。娘は、「はい」といった。老人は、「おまえは、どうしてここにやってきたのか」といった。娘は、「わたしの継母が

ここまできて、この池で父親の礼拝につかう敷皮をあらえといったの」という。老人は、「おまえの継母がおまえにそういったのか」といった。娘は、「はい」といった。老人は、「それで、おまえの父親はどこにいるのか」という。娘は、「わたしの父親はいない」といった。老人は、「よろしい。おまえはこわいか」といった。娘は、「ううん」という。老人は、「ほんとうのことをいっておくれ」という。娘は、「こわくない」という。老人は、「それでは、おいで。わたしの髭をつかみなさい。その池のなかにはいるう」という。娘は老人の髭をつかんだ。老人は娘に、「髭をぬくな。一本でもひきぬいたら、おまえをひどい目にあわす。気をつけて、つかみなさい。気をつけないなら、わしがあるいているとき、おまえがおちてしまつても、おまえの責任だ。おまえは死んでしまう」という。

さて、老人と娘は池の底まであるいていった。すると、そこにおきな町があつた。そこについたが、ほんとうのこと、町の人たちはみんな化け物だつた。

さて、娘は疥癬などをもっているハンセン病にかかった子どもをみつけた。

さて、子どもは、「わたしはウンコをする」といった。町の人が、「だれがおまえをつれていくのか」という。子どもは、「よそものにつれていってもらう。よそものに」といった。町の人たちは娘に、「ここに小枝（便をふきとるための小枝）がある。子どもを脇でしっ

かりとはさみなさい」といった。よそののである娘は、「まかしておいておくれ。その子どもをもちあげてあげる」というと、子どもをつかみ、もちあげて、ウンコをしにつれていった。子どもは、「わたしはウンコがしたくて、ここにきたのではない。わたしはおまえさんにこの町の様子をおしえてあげようとおもって、きたの。肉のはいったおかずをもらつても、それをたべてはいけない。きれいな小屋にねろといわれても、はいといわないように。ニワトリの小屋にねなさい。人に、『はい、モロコシだ、粉にして、料理しなさい』といわれて、そこにニワトリがやつてきて、モロコシをつついても、なにもいってはいらない。人が、『はい、ウシがいる。このウシの番をしなさい』といつても、ウシが水をのむまで、おまえさんはのんではならない。我慢をしなさい。ウシがのんでは、のむのだ」といった。娘は、「よろしい」といった。娘と子どもはたちあがり、かえつていった。人びとは娘に肉のはいったおかずをくれた。娘はそれをたべない、バオバブの葉っぱだけのおかずしかたべないといった。人びとはバオバブの葉っぱのはいったおかずをやつた。娘はそれをたべた。人びとは娘に、「なにといいしよにねるか」といった。娘は、「わたしはニワトリといっしよにねる」といった。人びとは娘をニワトリ小屋につれていき、寝具をひろげてやつた。人びとは娘に、「なんとということか。きれいな小屋があるのに、ねないというのか。ニワトリ小屋にねるというのか」といっ

た。娘は、「わたしはニワトリといっしよにねたい」といった。

さて、真夜中、娘がニワトリ小屋にはいると、人びとはヒョウの姿になった。人びとはとびはね、ニワトリ小屋の屋根につかつてある草をおとしてしまおうとする。娘はニワトリをたたく。ニワトリがない。人びとはにげていつてしまふ。そのうちに、夜があげて、朝になった。娘はずつとねていない。人びとはなんとかして、このようにして、娘をたべてしまおうとする。

さて、人びとは娘に、「ここにモロコシがある」といった。娘がモロコシを粉にひいているとき、人びとはニワトリの姿をしてやつてくると、モロコシをたべようとする。娘はニワトリをおいはらおうとしなかった。人びとは娘に、「ここにウシがいる」といった。娘はウシをつれていくと、ウシが水をのんでしまふまで、我慢して、そのあと水をのんだ。娘がかえつてくると、またしても、疥癬などをもっているハンセン病にかかった子どもは、娘に、「わたしはいうのをわすれていたらけれども、『はい、ここにヒョウタンがある。穀物倉にはいり、ヒョウタンをひろいなさい』といわれたら、まっすぐなヒョウタンを三つ以上とらないようにし、まがつたヒョウタンを籠がいっぱいになるまでひらいなさい」といった。娘は、「よろしい」といった。

さて、娘は、「もう、家にかえる」といった。人びとは娘に、「家にかえるのかい、娘よ。穀物倉にはいつて、どれでもおまえさん

のすきなヒヨウタンをひらいなさい」といった。娘はいくと、まがつたヒヨウタンを籠がいつぱいになるまでひらった。人びとは娘に、「それがほしいのか」といった。娘は、「うん」といった。人びとが、「それがほしいのか」という。娘は、「うん」という。人びとが、「おまえさんはこれをとらないのか。このまっすぐなヒヨウタンをとらないのか」という。娘はまっすぐなヒヨウタンを三つとった。

さて、娘はかえるといった。人びとは、「よろしい」といった。

さて、娘はあるいていくと、まがつているヒヨウタンをみんなつぶした。すると、そのなかから、人間やロバやウシがでてきた。娘はまがつたヒヨウタンを一つつぶした。そのなかから、ヒヨウとライオンがでてきた。ヒヨウタンからでてきた人たちが、それをころしてしまった。娘はもう一つをつぶした。そのなかから、ありとあらゆる野原の動物がでてきた。ヒヨウタンからでてきた人たちが、それをころした。

さて、娘とヒヨウタンからでてきた人たちはすすんでいく。娘はウマにのり、まぎれもない自分の旗をもっている。黄金なども、ないものがなかった。こうして、娘は家についた。継母は継子をみると、自分の娘にも池にいくようにといった。娘はでかけていくと、うたった。

「おまえさんは、ルウオンバガジェの川か。」

それとも、ルウオンバガジェの川ではないのか。

アバー・コー・ラーナー、ドーミン・ジルギ

サー・ルワ、カー・ルウオンバガジェ

さて、木が娘に、「その池はさきにある」という。娘は、「ケツケツケツ、今年、わたしはかえってくる。木が口をきくとはどういうことなの。木が口をきくとは」といった。娘はあるいていき、池につくと老人がいた。

さて、娘は池につくと、歌をうたった。池の水があかくなった。娘は歌をうたった。またしても、老人がでてきた。

さて、娘は、「ケツケツケツ、この老人の髭はなんと」といった。老人は娘をみている。老人は、「きて、わしの髭をつかみなさい。いこう」といった。娘は、「わたしはその髭をひっぱり。おまえさんをひどい目にあわせてやる」といった。老人は、「おまえさんが、この髭をひっぱりたければ、ひっぱりなさい。わしはおまえさんをほっておく」という。老人は娘をつれていった。老人は町にいった。町につくと、またしても、疥癬などをもっているハンセン病にかかった子どもがおおきな声をあげた。町の人が、「どうしたのか」といった。子どもは、「ウンコがしたい。いまやってきたばかりのその人についてきてもらおう」といった。

さて、人びとは、「よろしい。ここに草（便をふきとるための草）がある。子どもを脇にかかえなさい」といった。娘は草をうけと

り、子どもを脇にかかえた。ウンコをする場所につくと、娘は子どもに、「ウンコをしないさい」といった。子どもは、「わたしはウンコをするためにきたのではない」といった。娘は、「自慢話でもするつもりだったのかい。それでは、そこをのきなさい。たちなさい。かえろう」といった。子どもは、「わたしがおまえさんにこの町の様子をおしえてあげるためののだ」といった。娘は、「なんだって」といった。子どもは、「肉のはいったおかずをもらったら、それをたべてはいけない。バオバブの葉っぱのはいったおかずをたべない」といった。娘は、「なんだって、肉があるというのに、わたしにたべないようにというのかい。わたしにバオバブの葉っぱのはいったおかずをたべろというの。わたしはバオバブの葉っぱのはいったおかずはたべない」といった。子どもは、「きれいな小屋をもらっても、そこにねてはならない。いつて、ニワトリの小屋にねなさい」といった。娘は、「だれがニワトリの糞のあるところにいることができるのか。わたしはいい小屋にねる」といった。子どもは娘にいろいろなことをいった。

さて、娘は、「わたしはおまえさんをつれていく」といった。娘は子どもをつれていくと、子どもからきいたことをみんないつてしまった。人びとは子どもをつかまえて、たたいた。夜、人びとは娘にきれいな小屋をやった。娘はそこにいつて、ねた。

さて、こうして、人びとは娘をたべてしまったとき。

(一九六九一七〇年、語り手 パーサーウオ村出身のアブドゥウ
ラーイ・ウスマース、マルアにて)

146 とおくの川にいった子ども (2)

ほら、そこにいる。ほら、そこにいる。

お話、お話。ジャツラ・タボーイエル。

あるところに、娘と母親と父親たちがいた。娘の父親は二人のよめさんをもっていた。娘の母親が娘をうんだ。母親のライバルも、娘をうんだ。二人とも、結婚してよい年頃の娘だった。祭りのときがやってくると、人びとはモスクに行く。

さて、娘たちは自分たちのきる着物をくれという。娘たちは自分たちのきる着物をくれという。

さて、二人のうち一人はどうしようもない娘で、あっちこっちをうろつくだけで、お金をさがしてきて、母親にやるのをこばむ。着飾るときに、いろいろなものをくれるようにという。

さて、母親は、「わたしはおまえにやらない。バガザーの川の水をくんできてくれないと、きょう、おまえは着飾らなくてよい」といった。もう一人の娘はバガザーの川までいつて、その水を手にいれ、もつてきていた。

さて、娘はでかけていった。もう一人は家にいる。

さて、娘はずっと大声をだしている。

さて、娘はでかけていった。人びとは着飾って、祭りにでかけていった。

さて、娘はヒョウタンをもって、でかけていった。娘がいくと、川があった。娘はいう。

「川よ、川よ、おまえさんがバガザーの川か。

バガザーの川よ、王さまの娘をよんでおくれ。

というのは、敷き皮のおかげで、母親においだされた。

バガザーの川の水をくんでこいといわれた」

さて、娘はでかけていった。

さて、川が、「わたしはバガザーの川ではない。わたしはしほりたての乳だ。のみなさい」といった。娘がこうとしているのは、

バガザーの川だった。

さて、娘はたちあがり、さきにすすんだ。娘はその川をわたっ

て、さきにすすんでいった。

さて、娘は川をみつけたのである。

「川よ、川よ、おまえさんはバガザーの川か。

バガザーの川よ、王さまの娘をよんでおくれ。

というのは、敷き皮のおかげで、わたしはおいだされた。

バガザーの川の水で、敷き皮をあらってこいといわれた」

川はいう。

「わたしはバガザーの川ではない」

さて、川は娘に、「わたしはバガザーの川ではない。バガザーの川はさきにある。わたしはいためた肉だ。とって、たべなさい」といった。娘は、「わたしはお腹がいっぱい」といった。娘は川をわたって、なきながら、あるいていった。いくと、そこに重湯などありとあらゆるものはいっている水があった。

さて、娘はたずねた。

「川よ、川よ、おまえさんはバガザーの川か。

バガザーの川よ、王さまの娘をよんでおくれ。

というのは、敷き皮のおかげで、わたしはおいだされた。

バガザーの川の水で、敷き皮をあらってこいといわれた」

川はいう。

「わたしはバガザーの川ではない。

わたしはバガザーの川ではない。

わたしは重湯だ」

さて、娘は、「よろしい」といった。川は、「わたって、さきにいきなさい」という。娘はさきにいった。いくと、川があった。この川はご飯といためた肉などありとあらゆるものはいっていた。娘はお腹がすいている。

さて、娘は、「おまえさんがバガザーの川か」といった。

さて、川は、「いいや、わたしはバガザーの川ではない。わたし

はご飯の川だ。とって、たべなさい」といった。娘は腹をたてたので、たべないといって、川をわたると、さきにすすんでいった。さきにすすんでいくと、蜂蜜などいいものがある川があった。娘はいった。

「おまえさんがバガザーの川か」

娘は喉がかわいている。娘は腹をたてたので、なにものまなかった。娘はいう。

「おまえさんがバガザーの川か。」

バガザーの川よ、王さまの娘をよんでおくれ。

わたしは水がくみたい」

さて、川は、「いいや、わたしはバガザーの川ではない。バガザーの川はさきにある。わたしは蜂蜜だ。なめなさい」といった。娘はなめないといった。娘はさきにすすんでいった。いくと、自分のさがしている川があった。娘は川岸にすわって、いった。

「おまえさんがバガザーの川か。」

バガザーの川よ、王さまの娘をよんでおくれ。

そういうことで、バガザーの水をくむ。

敷き皮のおかげで、わたしはおいだされた。

バガザーの川の水をくんでこいといわれた」

さて、川は、「わたしはバガザーの川だ。くみなさい」といった。さて、娘は水をくんだ。娘がわたった川ではどこでも、不思議な

ことがおこった。主が娘にそうさせたのだった。重湯などがどれもなかった。道すがらみつけた食べ物をたべていたら、バガザーの水を手にいれることができた。

さて、娘はきた道をもどっていき、川をいくつもわたった。娘は家にかえってくる。

さて、娘はあるいていく。娘はどんどんはしっていく。とうとう、夜がふけた。娘はやってくる。

さて、娘がやってくると、ハイエナたちがいた。動物は一晩中、道であそんでいる。娘はそこをとおるすぎていく。

さて、ハイエナたちはおきあがり、娘をたべるといって、娘をおった。

さて、娘はどんどんはしっていく。ヒョウタンがつぶれるほどだった。ヒョウタンはつぶれなかった。夜になってしまった。夜になり、娘は母親の小屋の戸をたたいて、「母さん、母さん、戸をあけておくれ。小屋にはいる」という。ところが、母親は、「わたしはおまえのために戸をあけてやらない。わたしがおまえに夜おそくまでおれといったのか。わたしはバガザーの川の水をくんでこいといっただけだろう。どうして、いつてはやくかえってこなかったのか」といった。

さて、娘は、「ハイエナがいる。ハイエナにたべられてしまう」といった。母親は、「たべられてしまいなさい」といった。

さて、娘はたちあがると、母親のライバルのところにいつて、小屋の戸をたたいた。娘は、「母さんのライバルよ、母さんのライバルよ、戸をあけておくれ。小屋にはいる」という。

さて、母親のライバルは娘のために戸をあけなかった。

さて、娘は父親が妻にした奴隷女のところにいつた。娘は、「母さんのライバルよ、母さんのライバルよ、戸をあけておくれ。ハイエナにたべられてしまふ」という。

さて、父親が妻にした奴隷女はたちあがり、娘のために小屋の戸をひらいた。

さて、娘は水をもって小屋にはいつた。父親が妻にした奴隷女は、「どこからきたのか」といつた。娘は、「遊びにいかせてもらえず、バガザーの川の水をもってこいといわれたの。わたしがいってバガザーの水をもってきて、その水で敷皮をあらわないとだめといわれた」といつた。父親が妻にした奴隷女は、「よろしい」といつた。夜があけて、朝になった。娘は、「きょう、わたしはこの村からでていく」といつた。父親が妻にした奴隷女が、「どうしてでていくのか。でていかないうに」といつた。娘は、「ほんとう。でていかないうに」といつた。わたしはでていく。わたしはここにはすまない」といつた。

さて、娘はおきた。夜があけて、朝になったので、娘は水をもって、母親のところにいつた。娘は道があるいていつた。娘はでてい

った。娘はなにもいわなかった。娘はどんどんあるいていつた。娘はあっちこっちをうろつき、どんどんあるいていく。

さて、娘はある村にいつた。ある村にいくと、老女がいた。娘は老女のところに身をよせた。老女は娘に、「どこからきたの。きれいな年頃の娘よ」という。

さて、娘は、「こういうことがあつた、おばあさん。こういうことがあつた。こうして、母さんはわたしを使いにだした。水をくんでこいといわれた。その水で敷皮をあらつてやるといつた。こうして、わたしはずっとあるいていつた。わたしは重湯の川や、蜂蜜の川や、しばらくたての乳の川をみた。わたしはその水をのまなかつた。いくと、バガザーの川があつた。わたしは母さんのために水をくんで、その水をもつてかえつてきた。かえつてくるとき、ハイエナがあそんでいた。ハイエナにたべられそうになった。わたしはにげて、母さんの小屋にいつた。母さんは、小屋の戸をあけてくれなかつた。わたしは母さんのライバルの小屋にいつた。母さんのライバルは小屋の戸をあけてくれなかつた。わたしは父さんが妻にした奴隷女のところにいつた。父さんが妻にした奴隷女は小屋の戸をあけてくれた。そういうことで、わたしは家出をして、野原にはいつたの」といつた。

さて、老女は、「よろしい、いなさい、娘よ。アツラーがゆるさるるならば、わたしはあなたの面倒をみる」といつた。娘は、「よ

ろしい」といった。娘はおちついた。娘がおちつくと、老女は王さまのところについていった。老女は王さまに、「王さま、わかるね。こういうことで、王さまのためによめさんを手にいれました。あのような娘はこの町にはいません」といった。

さて、王さまは、「なんだと、おまえさんほうそをついている」といった。老女は、「ほんとです」といった。王さまは、「おまえさんほうそをついている」といった。老女は、「ほんとです」といった。

さて、その日、老女は娘をつれていった。

さて、老女は娘を王さまのところに連れていった。王さまのよめさんが娘をみて、「いやいや、その娘はわたしの息子のよめにする」といった。老女が娘をつれていくと、王さまは自分のものだとい、娘と結婚した。娘の父親たちの村に飢饉がおこった。娘は王さまの町にいた。老女が娘の母代わりになった。この町にはたくさん食べ物があった。娘はいろいろなものを手にいれた。夫の町で手にいれたものがたまっていた。娘はこの町の王さまのよめさんだった。

さて、娘の父親たちの村には飢饉がやってきて、父親のもつていたものがすべてなくなってしまった。

さて、娘の父親たちの村の人たちは娘のいる町にやってきて、「娘は王さまの屋敷にいる。娘のところに使いをだして、食べ物を

もらおう」といった。さて、人びとはいつてしまった。

さて、娘の父親たちの村の人たちは、「さて、だれを使いになそうか」といった。人びとは鳥をよんだ。人びとは、「鳥よ、こい。おまえを使いになす」といった。人びとはいつて、カラスをよんだ。カラスがやってきて、「カー、カー、カー」といった。人びとは、「どこかにいつてしまえ」といった。人びとは大鳥をよんだ。大鳥は、「チョーット、チョーット、チョーット」といつて、どこかにいつてしまった。

さて、人びとはツメバゲリをよんだ。鳥は、「ケラケッタ、ケラケッタ」という。人びとは、「どこかにいつてしまえ」といった。

さて、人びとはホロホロチョウをよんだ。ホロホロチョウがやってきて、「クエーット、クエーット、クエーット」といい、どこかにいつてしまう。

さて、人びとはカンムリヅルをよんだ。カンムリヅルは、「わたしのいうのをきいておくれ」といった。人びとは、「おまえさんがいつたら、どういうのか」といった。カンムリヅルは、「わたしを使いになすのだ」といった。

さて、人びとは鳥に、「それでは、王さまの屋敷にいつたら、サルキン・アルカウサラという役職の人にいうのだ。おまえはいつて、タローマに母親が死んだというのだ」といった。娘はタローマという。

さて、鳥はいくと、まいおりた。いくと、王さまの屋敷にまいおりた。鳥はいう。

「平安、なんじらにあれ、タローマよ。」

平安、なんじらにあれ」

娘がいう。

「なんじらに、平安あれ、カンムリヅルよ。」

なんじらに、平安あれ」

鳥はいう。

「おまえさんの母親が死んでしまった、タローマよ。」

たちあがりなさい。いこう」

娘がいう。

「わたしはいかない。」

カンムリヅルよ、わたしはいかない」

鳥はいう。

「いきなさい。わたしについておいで」

娘はいう。

「カンムリヅルよ、悪意と病気があるのではないの」

さて、鳥はもどっていった。鳥は、「わたしは屋敷のあるところ
がわかり、話をした。わたしが話をしたけれど、娘はこないといっ
た」といった。

さて、人びとは、「いやいや、この鳥はいつていない。王さまの

家来のところに行くのだ」といった。鳥はいくと、家来の長がい
た。家来の長はたちあがり、家来をあつめた。

さて、鳥は王さまのところにまいおりた。王さまはなにもいわ
ない。家来たちもなにもいわない。鳥がいった。

「なんじらに、平安あれ、王さまよ。」

なんじらに、平安あれ」

人びとは、「こら、しずかにするのだ。鳥はなんといっている」と
いった。

さて、鳥はいった。

「平安、なんじらにあれ、タローマよ。」

平安、なんじらにあれ。」

おまえさんの母親が死んでしまった、タローマよ。」

たちあがりなさい。いこう。」

たちあがりなさい。いこう。」

タローマよ、たちあがりなさい。いこう」

さて、王さまは、「鳥はなんといっているのか」といった。

さて、王さまは自分のよめさんの名前をきいておきあがった。王

さまはおきあがると、屋敷のなかにはいつていった。

さて、鳥は王さまについていくと、よめさんの小屋のうえにおり
て、さっそくいう。

「平安、なんじらにあれ、タローマよ。」

平安、なんじらにあれ。

おまえさんの母親が死んでしまった、タローマよ。

たちあがりなさい。いこう」

さて、娘はいった。

「なんじらに、平安あれ、カンムリツルよ。

なんじらに、平安あれ。

いきなさい。いって、わたしの母さんをほおむりなさい。

わたしはいかない」

娘は心がいたんでいる。

さて、鳥はとびたち、もどつてきて、「娘はこない」といった。

さて、人びとはまたしても、鳥を使いにした。人びとは、娘の父親が死んでしまったといわせた。鳥は使いにいった。娘はいかないといった。人びとは何度も鳥を使いにした。鳥は娘に母親のライバルが死んだといわせた。娘はもどつていかないといった。

さて、鳥は、それでは父親が妻にした奴隷女が死んだといったらしいといった。

さて、そこにいた人が、「なんだって、母親が死んだといってもこなかったのに、父親が妻にした奴隷女が死んだといつてもくるわけがない」といった。

さて、人びとは鳥を使いにした。人びとは鳥に、父親が妻にした奴隷女が死んだというようにといった。

さて、鳥はやってきた。鳥は娘の小屋のうえにまいおりた。鳥はいう。

「平安、なんじらにあれ、タローマよ。

平安、なんじらにあれ。

おまえさんの父親が妻にした奴隷女が死んでしまった、タロ

ーマよ。

たちあがりなさい。いこう」

さて、娘は王さまに、「ウマに鞍をつけておくれ。ウマに鞍をつけておくれ。おねがい。わたしはいく」という。娘はずつとないている。

さて、王さまはそれをきいた。王さまは、「よめさんの父親が妻にした奴隷女が死んだ。よめさんはいく。さつさとウマに鞍をつけてやりなさい。いって、みるように」といった。よめさんがかけていくとき、王さまはよめさんの父親たちの村に飢饉があるということをきいた。王さまの家のものたちはたくさんラクダに食べ物をつんだ。人びとがあつまつた。よめさんはでかけていく。よめさんはたちあがり、でかけていた。娘は父親の村についた。村の人たちはサナイの音をきいた。人びとは、「だれがやってくるのか。王さまか。どうなのだ。わからない」といった。

さて、娘がやってきて、ウマからおりた。娘はつくと、母親のライバルの小屋の入り口にいった。

さて、母親のライバルがいた。王さまがよめさんといっしょにいかせたものは、すべて娘についていった。人びとはいくと、娘を父親が妻にした奴隷女のところにおちつかせた。娘の母親がみている。娘の母親のライバルがみている。娘はだれにもなにもやらなかった。

さて、娘は父親が妻にした奴隷女のところにはいつていき、おちついた。娘と父親が妻にした奴隷女は食べ物をつたべた。父親が妻にした奴隷女が、「どうなの」といった。娘は、「あなたが死んだときいたの」といった。父親が妻にした奴隷女が、「わたしは死んでいない。ここの人たちが使いをだして、おまえさんにおまえさんの母親が空腹のため死んでしまったといった。わたしはどうしたらよいのかわからなかった。わたしはおまえさんが気楽にしているときいた。おまえさんがおまえさんの母親にコメやモロコシをすこしおくつてきたときから、みんなはおまえさんが満腹しているといっている」といった。娘は、「そうなの。あなたは死んでいないけど、わたしがつてきたものは、みんなあなたのもの」といった。娘はもつてきたものをすべて、袋からだした。娘は父親が妻にした奴隷女のためにだした。娘はもどつていった。娘は母親とも、父親とも、だれとも話をしなかった。娘は一週間のあいだ母親のところにいた。娘は母親をつれて、むこさんの家にかえつていったとき。

これで、このお話はおしまい。

(一九八三年一月二一日、語り手 ラブラトク・イスフ、ガウンデレにて。子どものころ、友だちと昔話をかたつた。ガウンデレでハウサ語で昔話をかたつてきた。ラブラトウは成人してからフルフルデ語をはなしだした)

147 とおくの川にいった子ども (3)

ちいさなお話、ちいさなお話。はやくやりなさい。

ある娘の名前はリブリという。リブリの父親は王さままで、何階もある家にすんでいる。家が家のうえにのっているから、わたしは何階もある家といつておく。何階ものうえにすんでいる。父親が旅にでる日に、リブリの継母に、「わしは、旅にでる。でも、わしの娘にハエをたからせてはならない。まして、日のあたるころなどにだすことがないように」という。娘の継母は、「よろしい」といった。

さて、娘の父親は旅にでかけていった。娘は、「わたしは水がほしい。水浴びをする」という。継母は、「水浴びがしたいなら、水をくむところまでいって、水をくんで、水浴びをしなさい」という。娘はでていった。娘は半截ヒョウタンと水をくむためのヒョウタンをもつて、水汲みにいった。娘がいくと、ライオンにであつた。ライオンがいう。

「リブリよ、おまえさんは、どこにいく。」

末っ子のリブリよ、どこにいく。

宝貝のような歯をしたリブリよ、どこにいく。

ガーヨの木の花のような歯茎をしたリブリよ、どこにいく。

銀のような鼻をもつリブリよ、どこにいく」

娘がいう。

「わたしは、テンディリにいく。

テンディリに、ダベル・ダベル。

人のいない野原にあるテンディリに」

ライオンは、「アッラーがおまえさんをムンダ鳥（どんな鳥か不明）にあわせられないように」という。娘はそこをとおりました。娘はゾウにであつた。ゾウがいう。

「リブリよ、おまえさんは、どこにいく。

末っ子のリブリよ、どこにいく。

宝貝のような歯をしたリブリよ、どこにいく。

ガーヨの木の花のような歯茎をしたリブリよ、どこにいく。

銀のような鼻をもつリブリよ、どこにいく」

娘がいう。

「わたしは、テンディリにいく。

テンディリに、ダベル・ダベル。

人のいない野原にあるテンディリに」

娘はそこをとおりました。娘は自分とおなじくらいの年頃の若者にあつた。若者にあうと、若者はいう。

「リブリよ、おまえさんは、どこにいく。

末っ子のリブリよ、どこにいく。

宝貝のような歯をしたリブリよ、どこにいく。

ガーヨの木の花のような歯茎をしたリブリよ、どこにいく。

銀のような鼻をもつリブリよ、どこにいく」

娘がいう。

「わたしは、テンディリにいく。

テンディリに、ダベル・ダベル。

人のいない野原にあるテンディリに」

若者は、「アッラーがおまえさんをムンダ鳥にあわせられないように」という。娘はそこをとおりました。娘はムンダ鳥にであつた。ムンダ鳥がいう。

「リブリよ、おまえさんは、どこにいく。

末っ子のリブリよ、どこにいく。

宝貝のような歯をしたリブリよ、どこにいく。

ガーヨの木の花のような歯茎をしたリブリよ、どこにいく。

銀のような鼻をもつリブリよ、どこにいく」

娘がいう。

「わたしは、テンディリにいく。

テンディリに、ダブル・ダブル。

人のいない野原にあるテンディリに」

ムンダ鳥が、「アッラーがおまえさんをムンダ鳥にあわせられないように」という。娘はそこをとりすぎた。そこをとりすぎると、ムンダ鳥は娘のまえにとんでいき、いう。

「リブリよ、おまえさんは、どこにいく。」

末っ子のリブリよ、どこにいく。

宝貝のような歯をしたリブリよ、どこにいく。

ガーヨの木の花のような歯茎をしたリブリよ、どこにいく。

銀のような鼻をもつリブリよ、どこにいく」

ムンダ鳥は、「おまえさんがムンダ鳥とであうと、ムンダ鳥はおまえさんを一口でのみこんでしまうだろう」といった。ムンダ鳥は娘のまえにとんでいった、いう。

「リブリよ、おまえさんは、どこにいく。」

末っ子のリブリよ、どこにいく。

宝貝のような歯をしたリブリよ、どこにいく。

ガーヨの木の花のような歯茎をしたリブリよ、どこにいく。

銀のような鼻をもつリブリよ、どこにいく」

ムンダ鳥は両翼をかがけて、娘をおそおうとする。若者は娘のあとをあるいていく。若者は茂みから茂みへあるいていき、ムンダ鳥と娘のあいだにはいった。若者はムンダ鳥に、「ここにあらわれると

は（意味不詳）」といった。テンディリ（若者か、怪物か）がやってきて、リブリをつれていき、「ここに水がある。というの、みておりなさい。おまえさんがこの高みからでると、雨がふりだすだろう」という。

さて、テンディリは、「きなさい。わたしはおまえさんをつれていつてあげる」という。テンディリは娘といっしょにいった。娘といっしょにいった。とうとう、テンディリは娘がある墓につれていった。娘は、「アッラーよ、あなたの力とわたしの力で、わたしと母さんをあわせておくれ」という。地面がひらいたので、娘はそのなかにはいった。雨がふって、雨がやんだ。

さて、かわくものはかわき、もえるものはもえた。母親がでてきた。娘の母親が命をとりもどした。娘は母親とべつの村にかえってきた。娘はそこにおちついた。王さまが家にかえってきた。王さまは、「わしのリブリはどこにいる」という。娘の継母は、「あなたはウマからおりないで、リブリのことをきく」という。（王さまはウマからおりる。）王さまは、「それで、わしのリブリはどこにいる」という。娘の継母は、「あなたは屋敷のなかについてないのに、リブリのことをきく」といった。王さまは屋敷のなかについた。王さまは、「わしのリブリはどこにいる」という。娘の継母は、「あなたはみんなと挨拶をかわしていないのに、リブリのことをきく」という。王さまはみんなと挨拶をかわした。王さまは、「わし

のリブリはどこにいる」という。娘の継母は、「あなたは食事をしてないで、リブリのことをきくの」といった。王さまは食事をした。王さまは、「わしのリブリはどこにいる」という。娘の継母は、「あなたは水をのまないで、リブリのことをきくの」という。王さまは水をのんだ。王さまは、「わしのリブリはどこにいる」という。娘の継母は、「あなたはあなたをきらっている人たちとあなたをすいている人たちみんなと挨拶をしないの」といった。王さまは挨拶をかわした。王さまは、「わしのリブリはどこにいる」という。娘の継母は、「リブリは雌ヤギに草をくわせたにいった」といった。王さまは、「雌ヤギだつて。雌ヤギをかつている子どもたちをあつめて、こさせなさい」といった。人びとは雌ヤギをかつている子どもたちをあつめた。王さまは、「子どもたちよ、おまえたちはわしのリブリをみていないかい」という。子どもたちは、「わたしたちは、きのうからリブリをみていない。リブリが水くみにいくのをみた」という。王さまは、「よろしい」という。王さまはウマにまたがった。娘の継母が、「王さま、わたしはわすれていました。リブリは死んでしまいました」という。王さまが、「リブリが死んだというのか」という。娘の継母は、「はい」という。王さまは、「だれとだれがリブリをほおむったのか」といった。娘の継母は、「だれそれという村長とだれそれという王子が娘をほおむった」といった。王さまは、「その村長と王子をよびなさい」といった。人びとは村長と王

子をよんだ。村長と王子がやってきた。王さまは、「おまえたちがリブリをほおむったのか」という。村長と王子は、「いいえ、王さま、わたしたちはリブリをほおむっていません。死体をもってきたら、その死体がだれの死体かわかりますか。わかりませんか」という。娘の継母は、「王さま、死んでしまった人をどうして、墓からだせましょうか」といった。ほんとうのこと、娘の継母は穴をほって、そこに缶やキネなどをうめておいて、その穴をリブリの墓だといっているのだつた。王さまは、「ほりおこせ」という。人びとはそこをほりおこした。そこにはほかのものがはいっていた。人びとはリブリとリブリの母親をつれてかえってきた。人びとは二人を家につれてかえつてくるときずっと、喜びの声をあげている。人びとは娘に、「リブリよ、おまえはおまえの継母になにをしてほしいか」といった。娘は、「わたしは、なにもしていません。ただ、あの人をたたせておいて、その皮をはぎとるだけでよろしい。わたしはその皮にすわって、礼拝をする。あなたたちはあの人の首をきりとる。わたしはその首を屋敷の入り口にぶらさげる。わたしはそこにいて、その首をなぐる。またそこにいて、その首をなぐる」といった。人びとは娘の継母の皮をはぎとり、娘にやった。娘はその皮のうえにすわり、礼拝をしている。首は、娘のために屋敷の入り口のまんなかぶらさげてやった。娘はそこにいて、首をなぐる。娘は、「おまえさんはわたしをころすといつた」といい、ゴ

ツンとなくなる。娘はまたそこにいつて、首をなぐる。娘の姉妹たちは、「おまえさんはわたしたちの姉妹をころすといった」といい、ゴツンとなくなる。娘は、「おまえさんはわたしをころすといった」といい、ゴツンとなくなる。

お話は、おしまい。ウサギとニワトリの蒸し焼きができた。

(語り手不明)

148 とおくの川にいった子ども(4)

お話、お話。

さて、二人の娘がいた。一人の娘の母親は死んで、娘を継母のもとにのこした。継母にももう一人の娘がいた。

さて、母親に死なれた娘は継母の娘とおなじベッドでねる。母親のある娘はベッドのうえで夜尿をする。母親をなくした娘はベッドのうえで夜尿をしなかった。夜がけると、継母は母親のない娘に、ベッドにしていた皮と娘のつかった食器を川にあらうにいう。川にいくとき、娘は母親の墓にいき、たちどまって、いう。

「母さん、わたしはいく。」

ヨーヨーの母さんよ、わたしはいく」

母親がいう。

「クンボよ、どこにいく。」

クンボ・サージョよ、どこにいく」

娘がいう。

「継母がわたしに、

この皮をあらわず、

このちいさな木鉢をあらわないなら、

わたしに食べ物をくれないといった」

さて、母親は娘に、「それでは、アッラーが無事におまえをそこにやらせ、無事にそこからかえらせてくださるように」という。娘はでかけていく。娘は川にでかけていくが、川には精霊たちがいる。

さて、継母はいつも継子によくれた敷き皮と食器をわたす。娘は川にでかけていき、それをあらってかえってくる。そのつぎの日もまた、娘は継母に敷き皮と食器をあらってやる。継母は娘に川にいつて、あらうようにいう。娘はでかていくとたちどまって、いう。

「母さん、わたしはいく。」

ヨーヨーの母さんよ、わたしはいく」

母親がいう。

「クンボよ、どこにいく。」

クンボ・サージョよ、どこにいく」

娘がいう。

「継母がわたしに、

この皮をあらわず、

このちいさな木鉢をあらわないなら、

わたしに食べ物をくれないといった」

母親は、「それでは、アッラーが無事におまえをそこにやらせ、無事にそこからかえらせてくださるように」という。娘は、「それではいつてくる」という。娘は川にいくと、皮と食器をあらう。娘はもときた道があるき、家にかえってくる。継母は継子のしていることがわかったので、でかけていくと、継子の母親の墓をほりおこし、墓のなかにあつた骨をすべてとりだし、それをもやしにいった。ほんとうのこと、娘の母親の歯が一本墓にのこっていた。そのつぎの日も、娘はやってくると、またしてもたちどまつて、いう。

「母さん、わたしはいく。」

ヨーヨーの母さんよ、わたしはいく」

母親がいう。

「クンボよ、どこにいく。」

クンボ・サージョよ、どこにいく」

娘がいう。

「継母がわたしに、

この皮をあらわず、

このちいさな木鉢をあらわないなら、

わたしに食べ物をくれないといった」

母親（の歯）は、「それでは、アッラーが無事におまえをそこにやらせ、無事にそこからかえらせてくださるように」という。継母はそのことがわかったので、墓までやってくると、その歯をとり、墓からはなれたところにもつていき、歯ももやしてしまった。娘はやってくると、墓のところでもたちどまり、母親によびかけるけれども、母親にはとどかなかった。

さて、娘は川にでかけていった。精霊は娘をつかまえ、精霊の村につれていった。

さて、娘が精霊の村にいくと、体中傷だらけの子どもがすわっていた。

さて、その子どもは娘に、「ウンコをしにいく」といった。娘はその子どもに、「よろしい」といった。子どもは、「わたしは、よそのものにウンコをしにつれていってもらう」という。村人たちは、「それでは、ここにいる子どもを両脇からささえて、箒につかてある草を一本もつて、つれていきなさい。その子はむこうにいった、ウンコをするのだ」といった。娘は、「よろしい」といった。

さて、娘はやってくると、子どもをもちあげ、背中にせおって、草むらにつれていった。子どもは、「わたしはウンコをするためにここにきたのではない。わたしはここにきて、おまえさんにあるこ

とをいうためにきたの。わたしたちの村の人たちは人をころす」といった。娘は、「わかった」といった。子どもは、「村人がおまえさんに骨を一本わたし、料理しなさいといったら、それをこぼまず、その骨をとり、料理しなさい。その骨は肉になる。それが肉になつても、おまえさんはそれをたべてはならない。おまえさんは村人たちにおまえさんがとるよりずっとおおくの分をわけてやりなさい。村人はおまえさんにモロコシの粒を一つわたし、料理しなさいといったら、それを料理しなさい。料理をしていると、モロコシの粒は何倍にもふえるだろう」という。娘は、「わかった」といった。子どもは、「あの人たちの雌ヒツジに草をたべさせにいったら、雌ヒツジは木陰にいる。おまえさんは日向にいるのだ。雌ヒツジはきれいな水をのむ。おまえさんはきれいな水をのむのだ。雌ヒツジはうれたイチジクの実をたべる。おまえさんはうれないイチジクの実をたべるのだ」といった。娘は、「わかった」といった。二人は村にかえった。

さて、娘は子どもにいわれたとおり、仕事をした。とうとう、娘が家にかえるときになった。村人たちは娘に別れをいうときがちかづいたといった。

さて、娘は、「わかった」といった。子どもは、「きょうも、ウンコをしにいく」という。村人は子どもに、「よろしい」といった。子どもは、「わたしはよそのものにウンコをしにつれていってもらう」

という。村人たちは、「それでは、ここにいる子どもを両脇からさえて、つれていきなさい」といった。娘はまたしてもその子どもを背中につけていった。

さて、娘は子どもをつれていった。娘が子どもをつれていくと、子どもは、「ウンコをするのではない。ここにきて、こういうことをおしえてあげようとしたの。村人たちはおまえさんに別れをいう。おまえさんは家にかえる。おまえさんがかえるとき、村人たちはおまえさんのために穀倉をあけてくれる。穀倉のなかから、まがつたヒヨウタンとまっすぐなヒヨウタンをとるのだ」といった。娘は、「わかった」といった。子どもは、「でも、まがつたヒヨウタンをまっすぐなものよりたくさんとりなさい。まっすぐなヒヨウタンを三つとりなさい」という。娘は、「わかった」といった。

さて、二人は村にかえっていった。

さて、村人は娘に、「あの子どもはウンコをしたか」とたずねた。娘は、「うん、ウンコをした」といった。

さて、村人は、「よろしい」というと、いつてしまった。

さて、村人は娘に、「きょう、おまえさんは家にかえるのだ。穀倉をあけて、ヒヨウタンをとりなさい」といった。娘はいくと、ヒヨウタンをとった。娘はまがつたヒヨウタンをたくさんとった。まっすぐなヒヨウタンを三つとった。娘はあるていく。娘は野原についた。

さて、娘はなにかが、「ヒョウタンをつぶせ、つぶせ」というのをきいた。娘はつぶさなかつた。娘はすすんでいった。なにかが、「つぶすな、つぶすな」といった。

さて、娘は（まがつた）ヒョウタンをつぶした。雌ウシや雌ヒツジや非フルベ族の奴隷たちがたくさんでてきた。娘はまたしてもあるいていった。なにかが、「ヒョウタンをつぶせ、つぶせ」といった。

さて、娘は（まっすぐな）ヒョウタンをつぶした。

さて、ヒョウタンから化け物などべつのものがたくさんでてきた。

さて、非フルベ族の奴隷たちはこの化け物たちをみんなころしてしまった。娘は継母のところにえつていった。継母はそれを見て、自分の娘も精霊の村にいくようにといった。

さて、継母の娘はやってくると、川があつた。娘は、「このように波打つのはなんの川か」といった。

さて、川は娘をつれさつた。

さて、娘は精霊の村にいった。子どもが、「ウンコをしにいく」といった。村人は娘に、「子どもを両脇からささえて、子どもを野原につれていきなさい」といった。

さて、娘は子どもを両脇からささえて、つれていった。娘は、「体中、膿だらけなのに、はこべというの」といった。

さて、娘は子どもをはこんでいった。子どもは、「わたしはウンコをするのではない。わたしはここにきて、おまえさんにあることをいうためにきたの。村人たちに食べ物をもらったら、このようにしなさい。村人の雌ヒツジは木陰でよこになる。おまえさんは日向によこになる。村人の雌ヒツジはうれたイチジクの実をたべる。おまえさんはうれていないイチジクの実をたべるの」といった。娘は、「わかつた」といった。娘はたちあがり、村にかえつてきた。村人たちは娘に、「あの子はウンコをしたか」とたずねた。娘は、「あの子はウンコをしなかつた。あの子は、このようなことをいつてくれた」といった。村人たちはその子どもの耳をひっぱつた。娘も子どもの耳をひっぱつた。

さて、娘は村にやつてきた。娘は食べ物をつくると、すこしだけとると村人たちにやつた。娘は自分の分をたくさんとつて、たべる。娘は雌ヒツジを草をたべさせにつれていくと雌ヒツジを日向にほつておき、自分は木陰にすわつた。娘はうれたイチジクの実をたべる。雌ヒツジはうれていない実をたべる。娘はきれいな水をのむ。雌ヒツジはきたない水をのむ。

さて、娘が家にかえるときがちかづくと、子どもは、「もう一度、ウンコをしにいく」といった。娘は子どもをつれていった。子どもは、「おまえさんに、このようなことをいつてあげたいの」といった。娘は、「わかつた」といった。

さて、娘は村にかえってきた。村人たちは娘に、「あの子どもはウンコをしたか」とたずねた。娘は、「あの子はウンコをしなかった。あの子は、このようなことをいってくれた」といった。村人はやつてくると、娘のために穀倉をひらいてやった。娘はやつてくると、まっすぐなヒョウタンをえらんでたくさんとった。娘はまがつたのを二つとった。

さて、娘は野原にいった。なにかが、「ヒョウタンをつぶせ、つぶせ」というのをきいた。

さて、娘は（まっすぐな）ヒョウタンを一つたたいて、つぶした。ハイエナや化け物やサルなど、人をたべるものがたくさんでできた。手足のないものたちなどがたくさんでできた。

さて、またすこしすすんでいくと、なにかが、「つぶすな、つぶすな」というのがきこえた。さて、娘は（まがつた）ヒョウタンをつぶした。

さて、よい人たちができた。

さて、化け物たちはこのよい人たちをなくって、ころしてしまった。

さて、化け物たちは娘をころしてしまった。娘の母親はすわって、草でできた盆をつかって、モロコシの粉のなかにあるごみをとりのぞいているとき、アリの娘の爪をはこんでいるのをみた。さて、母親はそれを見て、それは自分の娘の爪だといった。

さて、母親は大声をあげて、なきだしたとき。
お話はみじかく、わたしの命はながい。

（一九八三年一月二〇日、語り手 ハデーリジャ・ブーバ、ガウ
ンデレにて）

149 とおくの川にいった子ども (5)

ちいさなお話、ちいさなお話。モロコシのちいさな茎、モロコシのちいさな茎。ヒナ族の母さんの頭にある禿のまんなか。

子どもが二人いた。子どもの父親は一人がたいへんすきだった。父親がすいている子どもには、家に母親がいなかった。

さて、父親がきらっている子どもには、家に母親がいた。きらわれている子どもの母親は老女に、「どうかおしえておくれ。わたしの継子をなきものにするには、どうしたらいいだろう」といった。老女は、「そうかね。ルワン・バガザウという川がある。おまえさんは、その子にそこに行くようにいうのだ」といった。女はしばらくたての牛乳を子どもたちによった。女は、「それを敷皮のところにもつていき、のみなさい」といった。子どもたちは敷皮のうえにすわって、牛乳をのんだ。（継子は牛乳を敷皮のうえにこぼす。）継母は継子に、「その敷皮をもち、ルワン・バガザウ川にいつて、あらいなさい。その敷皮をルワン・バガザウ川であらわれないなら、ひど

い目にあわせてやる」といった。子どもはその敷皮を頭にのせて、あるいていく。子どもはいう。

「父さん、父さん、

おまえさんが、ルワン・バガザウ川か。

おまえさんは、ガイヤ（意味不明）をしらないのか、王子よ。

川は、きたないものでいっぱい」

川は子どもに、「ここをとおりますぎて、さきにいきなさい」といった。子どもはさきにいつて、いう。

「父さん、父さん、

おまえさんが、ルワン・バガザウ川か。

おまえさんは、ガイヤをしらないのか、王子よ。

川は、きたないものでいっぱい」

川は子どもに、「ここをとおりますぎて、さきにいきなさい」といった。子どもはさきにいつて、いう。

「父さん、父さん、

おまえさんが、ルワン・バガザウ川か。

おまえさんは、ガイヤをしらないのか、王子よ。

川は、きたないものでいっぱい」

川は、「子どもよ、おまえさんは無事にルワン・バガザウ川につくだろう」といった。子どもは、「継母が、わたしにこの敷皮をルワ

ン・バガザウ川であらわないと、ひどい目にあうといった」といった。川は、「よろしい。アッラーが平安をもたらされるように。ここをとおりますぎて、いくと、とおくに、まるで雨雲のようにまっくろな水がみえるだろう。でも、そこから無事にかえってくるのは、むつかしいだろう」という。子どもは、「よろしい。アッラーのなさることは、すべていいことよ」といった。子どもがいくと、とおくに、水がみえた。水はうごいており、まっくろだった。子どもはやってくる、岸にたつた。子どもはいう。

「父さん、父さん、

おまえさんが、ルワン・バガザウ川か。

おまえさんは、ガイヤをしらないのか、王子よ。

川は、きたないものでいっぱい」

さて、子どもは、水が、「カジャウ・バガジャウ・カジャウ・バガジャウ・カジャウ・バガジャウ」という音をだすのをきいた。

さて、おおきな魚がでてきて、子どもをのみこんで、水のなかにつれていった。魚はいくと、子どもをなめ、子どもの体をすべて真珠のようにしてしまった。魚は敷皮をとり、敷皮に黄金をぬりつけた。魚は黄金をとり、子どもにやって、「おまえさんが死ぬまで、これだけあれば、じゅうぶんだろう」といった。

さて、子どもははしって、家にかえってきた。子どもは家に敷皮をもつてかえってきた。そのつぎの日、継母は自分の子どもに、

「おまえも、皮のうえで牛乳をのみなさい」といった。継母の子どもは敷皮のうえで、牛乳をのんだ。(子どもは牛乳をこぼす。) 継母は自分の子どもに、「ルワン・バガザウ川にいつて、その敷皮をあらいなさい」といった。母親のいない子どもがやってきた。母親のある子どもがほとんどあるいていく。母親のいない子どもが、「おいで、どういふうにいつて、にげてきたか、あなたにおしえてあげる」という。母親のある子どもは、「うん」といった。母親のいない子どもは、「あなたが川にいつたら、こいいいなさい。」

父さん、父さん、

おまえさんが、ルワン・バガザウ川か。

おまえさんは、ガイヤをしらないのか、王子よ。

川は、きたないものでいつばい」

母親のある子どもは、「あなたはうそをついている。わたしはわたしのいいたいことをいう。おまえさんはいくとき、だれにおしえてもらったのか」といった。母親のいない子どもはもう一人の子どもに、「それでは、いきなさい」といった。子どもは川につくと、「おまえさんがルワン・バガザウ川なのか」という。川は、「いいや、さきにいきなさい」という。子どもは、「なんと、川が口をきく」という。川が、「アッラーがおまえさんをここにもどらせないように。いきなさい」といった。子どもはそのようにしてあるいていく。どの川でも、おなじようにいつた。とうとう、子どもはルワ

ン・バガザウ川にいつた。子どもは、「こんなにくろいのはどういう水なのか、母さんよ」という。川の水は、「バジャウ・バガジャウ・バジャウ・バガジャウ」と音をたてている。子どもは、「なんだつて、水が口をきくとは。おまえさんたちはなんなの」という。さて、川はゴーという音をたて、子どもにおしよせてき、子どもをつれさつた。子どもはどこかにきえていつてしまったとさ。

おしまい。

お話は、おしまい。ニワトリの糞の蒸し焼きができた。母親は子どもをなくしてしまった。

こういうこと。

(一九六五年、語り手 マーヨ・ルウェの人、マーヨ・ルウェにて)

150 とおくの川にいつた子ども (6)

ちいさなお話、ちいさなお話。

この話はこうだ。ある娘に父親と母親がいた。

さて、父親には自分の娘があつた。

さて、娘の母親が死んでしまった。母親が死んでしまうと、父親と娘と継母がいた。娘は継母といつしよだった。継母は、継子だけをどこにでもやつた。継母の娘はきかざつて、村のなかにいき、あつちこつちこつちをうろつく。継母は自分の娘がでかけていき、あつちこ

つちがあるき、だれかに結婚してもらえばよいという。一人の娘にはその屋敷に母親がいた。

さて、継母はもう一人の娘に川に行くようにといった。女はそこにいる野原の動物たちと話をし、娘がそこにやってくると、その動物たちに娘をたべるようにとっておいた。女は継子を野原の動物たちにうりわたした。

さて、娘はカン川にでかけていった。娘は、ある川のところにいくと、川に、「ここがカン川か」とたずねる。川は、「なんだって。カン川はさきにある」という。娘は、「よろしい」という。娘がそこにつくと、蜂蜜があった。娘は蜂蜜に、「ここが、カン川か」といった。蜂蜜は、「なんだって。ここは、カン川ではない。おまえさんは、わたしをたべるかい」といった。娘は、「なんだって。わたしはお腹がいっぱい」といった。娘はさきにいった。いくと、そこにある川にニワトリの肉がながれている。

さて、娘はそこにつくと、その川に、「ここが、カン川か」といった。川は、「なんだって。これはカン川ではない」といった。娘はそこをとりすぎて、さきにいった。娘はあるいていった。

さて、娘はその川で一人の女をみつけた。娘は、「ここが、カン川か」といった。女は、「そうだ。ここが、カン川だ」という。娘はそこにくると、自分の着物をあらった。娘はあらいおえた。娘はたちあがり、家にかえる。たちあがって、家にかえってくる。

さて、娘はまつしろな女をみつけた。ほんとうのこと、この女は幽霊の類だった。この女は娘の母親だった。母親は死の世界からでてきて、娘に、「娘よ、おまえは使いにだされて、川のそばまでやってきた。おまえの継母はおまえをうりわたした。わかるな。わたしはおまえのほか、だれとも話をしない」といった。

さて、娘はたちあがった。娘は母親のいうことをきいた。娘はたちあがり、家にかえっていった。家にかえると、夜なのに、継母は娘に、「川のそばにいき、そこにいなさい」といった。夜、娘ははしって、川のそばにいくと、腰をおろした。娘はずっと大声をあげてない。

さて、娘の母親が川からでてきて、娘をみつけた。母親が川のそばで娘をみつけたとき、娘はすわっていた。母親は（どうしたのかと）娘にたずねた。母親は娘に自分といっしょに墓場にいこうといった。娘がやってくると、母親と娘は川にいった。

さて、娘がいくと、アリの穴があった。娘がアリの穴をみつけると、娘はそのアリの穴のなかにはいるようにといわれた。娘はそれをこぼんだ。娘はそのアリの穴のなかにはいるようにといわれた。娘はそれをこぼんだ。娘はその穴のなかにおしこまれた。そのアリは精霊たちだった。そこには、宝があった。娘はそれをひらいあつめ、家にもつてかえってきた。

さて、娘が家につくと、腹違いの姉さんがいた。娘は姉さんに自

分のみたことをはなした。

さて、昼ころ、女は自分の娘を使いにした。継母の娘はでかけていった。いくと、そこに、蜂蜜があつた。蜂蜜は娘に、「おまえさんは、どこにいくのか」といった。娘は、「わたしはカン川にいくところ」という。蜂蜜は、「おまえさんはそこにいつて、なにをするのか」という。娘は、「わたしはそこにいつて、洗濯をする。母親にいつてこいといわれた。それでは、おまえさんをたべようか」という。蜂蜜は、「それなら、たべなさい」といった。娘は、「おまえさんにいわれなくても、わたしはおまえさんをたべてやる」といった。娘はその蜂蜜をみんなたべてしまった。たべてしまい、家にかえつてくるとき、野原の動物たちは娘をころしてしまつたとき。

よろしい。このお話も、おしまい。

(一九八三年一月二二日、語り手 アーマドゥ・ルフアーイ、ガウンデレにて。この話は、ガウンデレで、自分のフルベ族のおじからきいたという)

151 クンボと化け物(1)

お話、お話。

さて、このお話はこういうこと。ある男がよめさんを二人もらつ

た。一人が子どもをうんだ。もう一人も子どもをうんだ。男は一人をおいだして、もう一人をそのままにしておいた。あとにのこつた女はライバルのうんだ子どもをひきとり、自分の子どもといつしよにした。子どもたちがあつたきだしたので、女はいくと、ビーズの飾りをつけて、自分の娘につけてやる。女は泥で飾りをつくと、それをライバルのうんだ娘の腰にしばりつけた。娘たちは水浴びにいくという。娘たちは水浴びにいく。さつそく、泥でできた飾りは駄目になつてしまふ。女はやつてくると、継子娘をつかまえ、たたく。そのつぎの日も、おなじだつた。またそのつぎの日も、おなじだつた。娘はいやになつて、いつてしまつた。娘は自分の半截ヒョウタンをとり、自分の小ヒツジをつかまえた。小ヒツジをつないである縄をもつと、どんどんあるいていく。とうとう、娘は野原のまんなかについた。野原のまんなかにつくと、大蛇がいた。大蛇は自分の子どもをねかせた。

さて、大蛇は自分の子どもとよこになると、娘に、「おまえさんはなにがほしくて、きたのか」という。娘は、「こういうことなの。こういうことなの。こういうことなの」といった。大蛇は、「問題はない。娘よ、いなさい。おそれるな」という。娘は、「よろしい」といった。その娘はクンボという。

さて、娘がそこにいるといつも、ヘビはでかけていき、獲物をころす。

さて、ライオンの子どもが娘をみた。ライオンの子どもは人になった。日中、その化け物がやってきた。化け物たちがやってきて、娘をむかえた。化け物は、「夜にくる。あそぼう」といった。娘は、「よろしい。それでよい」といった。娘は小屋に自分の小ヒツジをつないでおく。

さて、大蛇がいつて、かえつてきた。大蛇は、「ここにだれがきたのか」といった。娘は、「ここに人が四人やってきた」といった。大蛇は、「その人たちはどのような様子だったか」といった。娘はその人たちは人だったが、自分はその人たちをしらなかったといった。大蛇は、「よろしい。問題はない。おまえさんの小ヒツジをとり、おまえさんの小屋の入り口につないでおきなさい。その人たちがやってきて、返事をしてはならない。その人たちはライオンが化けているのだ」といった。娘は大蛇に、「よろしい」といった。

さて、大蛇は自分の小屋にはいり、戸をしめた。娘は小ヒツジをとり、それをつないでおくと、小屋にはいつて、よこになった。さて、化け物たちがやってきた。化け物たちはやってくると、歌をうたう。一人の化け物がうたいはじめた。

「クンボよ、わたしたちはやってきた。

クンボよ、わたしたちはやってきた。

村長の娘のクンボよ、わたしたちはやってきた。

クンボよ、わたしたちはやってきた。

クンボよ、わたしたちはやってきた。

村長の娘のクンボよ、わたしたちはやってきた」

小ヒツジは化け物にこたえた。

「クンボは、ねてしまった。

村長の娘のクンボは、ねてしまった。

トゥルルバン・ティリンバン、クンボは、ねてしまった

よ」

化け物たちはたちあがると、黄金の糞をした。化け物たちははしつていく。化け物たちは黄金の糞をした。小屋の入り口は黄金の糞でいっぱいになった。夜があけて、朝になった。黄金の糞がいっぱいたまっていた。またしても、大蛇がでてきて、「どうだ、娘よ」といった。娘は、「ほら。あの人たちはこんなことをした」といった。大蛇は、「よろしい。その黄金をあつめて、まとめなさい」といった。娘は黄金をまとめて、おいておいた。そのつぎの日の日中に、またしても、化け物たちがやってきて、「わたしたちは夜、あそびにきたのに、おまえさんの小屋にいるヒツジがわたしたちをたのしませてくれなかった。そのヒツジをころしてしまいなさい」といった。娘は、「よろしい。ころす。問題はない」といった。

さて、大蛇は娘に、「ヒツジをころさないように」といった。娘は小ヒツジをころさなかった。娘はその小ヒツジをつないでおいだ。またしても、夜、化け物たちがやってきた。化け物という。

「クンボよ、わたしたちはやってきた。」

クンボよ、わたしたちはやってきた。

村長の娘のクンボよ、わたしたちはやってきた」

小ヒツジは化け物にこたえる。

「トゥルルンバン・ティリンバン、クンボは、ねてしまったよ」

化け物たちはまたしても、もどっていった。化け物たちは銀の糞をした。黄金の糞をした。娘はその黄金をまとめておいた。そのうちに、黄金はじゅうぶんになった。大蛇はいくと、道をとおりかか
る人のもっているものをうばい、娘におおきな箱をもってきてやっ
た。娘はその箱のなかに黄金をいれた。大蛇は、「それで、あの人
たちにヒツジをころせといわれたら、ころすのだ。ヒツジの肉がこ
こでなくなってしまうかもしれないが、おまえさんはにげきつて、
家にかえられるだろう」といった。娘は、「よろしい」といった。

さて、娘は小ヒツジをつかまえると、ころした。

さて、娘はその肉をナベにいれて、火にかけた。化け物たちがや
つてくると、いつもとおなじように、歌をうたっている。またして
も火にかけてある肉がそれにこたえて、いう。化け物たちはもどっ
ていった。三日のあいだ、地面におちた小ヒツジの血が化け物たち
にいつものようにこたえた。娘はその血をすっかりはぎおとしてし
まったではないか。

さて、大蛇はあることをした。それがおわると、大蛇は、「娘よ、
おまえさんがいくとき、どうか、おぼえておいておくれ。道でつめ
たい水があっても、それをのんではならない。それは、わたしだ。
おまえさんがいき、スモモにた実がうれていても、それをたべて
はならない。それは、わたしだ。わたしはおまえさんについていっ
ているのだ。よろしい。おまえさんがいくとき、まっしろい砂があ
るのをみつけたら、その砂を足でふみつけてはならない。くろい砂
のあるところに道をそれなさい。そこに、わたしが、よこになつて
いるからだ」といった。娘は、「よろしい」といった。娘はずっと
家にかえるまで、大蛇にいわれたとおりにした。自分の父親の家に
かえると、腹違いの妹が娘をみて、自分もいくのだといった。娘は
もつてかえってきたものをわけると、腹違いの妹にやった。腹違い
の妹はそれがまったくきらいだといった。腹違いの妹は、「あなた
には、母親もいないのに、それを手にいれにいった。わたしに手には
いらないわけはない。わたしもいく」という。娘は、「あなたは、
いかないで。いかないで」といった。二人はそのことでいいあらそ
った。腹違いの妹は、小ヒツジをつれて、でかけていった。娘はど
んどんあるいていった。やってくると、大蛇がいた。娘は、「なる
ほど。姉さんは、ヘビのいるところにきてたのね」といった。大蛇
は目を娘のほうにむけて、娘をみて、「きたのか」といった。娘は、
「はい」といった。大蛇は、「おまえさんはなにがほしいのか」とい

った。娘は、「こういうことなの」という。大蛇は、「よろしい。そこに小屋がある。いなさい。でも、こういうことだ。わたしは野原にいく。人がきて、いうことをすべて、わたしのところにきて、わたしにいつておくれ」といった。娘は、「よろしい」といった。

さて、大蛇はおきあがり、野原にいった。化け物たちがやってきた。化け物たちは娘をむかえた。化け物たちは娘になにかをくれた。化け物は、「わたしたちは、夜、あそびにくる」といった。娘は、「よろしい」といった。娘は小屋までやってくると、小屋にはいつて、様子をみた。大蛇は娘に、「おまえさんのヒツジをとり、小屋の入り口につないでおきなさい。人が話しても、それにこたえないように」といった。娘は、「よろしい」といった。

さて、娘は小ヒツジを入り口のところにつないでおいだ。娘はよこになると、ねてしまった。

さて、化け物がやってきた。化け物はうたう。人の化け物がうたいはじめた。

「クンボよ、わたしたちはやってきた。

クンボよ、わたしたちはやってきた。

村長の娘のクンボよ、わたしたちはやってきた」

小ヒツジは化け物にこたえた。

「クンボは、ねてしまった。

村長の娘のクンボは、ねてしまった。

トゥルルンバン・ティリンバン、クンボは、ねてしまったよ」

化け物たちはみた。化け物たちは黄金の糞をした。化け物たちは、もときたほうに、はしっていった。

さて、そのつぎの日、化け物たちがやってきた。化け物は、「おまえさんはおまえさんのヒツジをころすのだ」といった。娘は、「よろしい。ころす」といった。娘は大蛇のところまでやってきた。大蛇は、「ヒツジをころすな」といった。娘はころすといった。娘は、「ヒツジは人が夜遊びする邪魔をするの」といった。

さて、娘は小ヒツジをつかまえると、ころしてしまった。

さて、またしても、化け物たちがやってきた。化け物たちがうたう。

「クンボよ、わたしたちはやってきた。

クンボよ、わたしたちはやってきた。

村長の娘のクンボよ、わたしたちはやってきた」

ころされた小ヒツジの血は化け物にこたえた。

「クンボは、ねてしまった。

村長の娘のクンボは、ねてしまった。

トゥルルンバン・ティリンバン、クンボは、ねてしまったよ」

ころされた小ヒツジの血がこのようにこたえた。娘は血をすっかり

はぎとった。娘は小ヒツジの血をみんな小屋のそとにほかした。小屋にはなにもものこっていなかった。

さて、化け物がやってきて、いつものようにうたった。なんの音もしなかった。化け物たちがうたった。なんの音もしなかった。

さて、化け物が、「そちらのほうをやれ。わしらは、こちらをやる。手を一本ずつ、足を一本ずつやるのだ」といった。化け物たちはばらばらになると娘におそいかかった。化け物は娘をたべてしまった。すっかり、たべてしまった。

さて、朝になった。娘の母親はなっているだけだった。娘はかえってこなかったとき。

ほら、お話はそちらにいく。ほら、わたしはここにすわっている。

(一九九〇年二月一九日、語り手 ラタン・ヤージの妻ハデー
ジャ、ケイニ村にて。この話は母方の祖母と母親からきいたと
いう。祖父はムンダン族)

152 クンボと化け物 (2)

ちいさなお話、ちいさなお話。

二人の女が一人のむこさんといった。一人の女は子どもをうんだ。もう一人は子どもをうんでいない。子どもをうんだ女は、ウスでつ

き、携帯食をつくった。女は、自分の子どもをつれ、携帯食をもつて、野原のまんなかにいった。女は、キシメニアの実をつんで、半截ヒヨウタンにいれた。ヴィテックスの実をつんで、半截ヒヨウタンにいれた。女がいくと、おおきな池があった。いくと、おおきな池があった。

さて、女は池にはいつていき、水浴びをした。池の名前はわからないが、そこで水浴びをすると、女はあるいていく。するとそこに、穀物倉のある小屋があった。

さて、女はそこにいくと、荷物をおろし、自分の雌ヒツジをつないでおいだ。女はウスでついた子どもをおいておいだ。

さて、木にとまっている鳥がいった。

「穀物倉からモロコシをとつても、わたしはいない。

穀物倉からモロコシをとらなくても、わたしはいない。

ダンバ、ちいさな葉っぱ、ちいさなヒヨウタンのかけら」

さて、女は穀物倉のなかにはいつて、モロコシをとつた。

さて、女はいった。

「モロコシをウスでついても、わたしはいない。

モロコシをウスでつかなくても、わたしはいない。

そういうこと。ダンバ、ちいさな葉っぱ、ちいさなヒヨウタンのかけら」

さて、女はその穀物をついた。女がいう。

「モロコシについて、粉にしても、わたしはいない。

モロコシについて、粉にしなくても、わたしはいない。

そういうこと。ダンバ、ちいさな葉っぱ、ちいさなヒヨウタ

ンのかけら」

女は穀物をあらった。女がいう。

「ウスでついても、わたしはいない。

ウスでつかなくても、わたしはいない。

そういうこと。ダンバ、ちいさな葉っぱ、ちいさなヒヨウタ

ンのかけら」

女は穀物をウスでついた。女がいう。

「カタガユをつくるための湯をわかしても、わたしはいない。

カタガユをつくるための湯をわかさなくても、わたしはいな

い」

女はカタガユをつくるための湯をわかった。女がいう。

「おかずをつくるための湯をわかしても、わたしはいない。

おかずをつくるための湯をわかさなくても、わたしはいな

い」

女はおかずをつくった。女がいう。

「おかずをうつても、わたしはいない。

おかずをうらなくても、わたしはいない」

女はおかずをうった。女がいう。

「カタガユをうつても、わたしはいない。

カタガユをうらなくても、わたしはいない」

女はカタガユをうった。女がいう。

「カタガユをこねても、わたしはいない。

カタガユをこねなくても、わたしはいない」

女はカタガユをこねた。女がいう。

「カタガユをすくつても、わたしはいない。

カタガユをすくわなくても、わたしはいない」

女はカタガユをすくった。

さて、女はカタガユをすくった。女はカタガユを一すくいした。

女はカタガユを一すくいした。女はカタガユを鳥のためにとってお

いた。女は自分の分をとって、子どものためにとっておいた。

さて、女は池にいき、水浴びをした。女はかえってくる。

さて、化け物たちが、「おまえの名前はなにか」といった。女は、

「わたしの名前はいつも小屋にいるクンボ」といった。化け物たち

は、「今晚、いく。あそぼう」という。女は、「よろしい」といっ

た。
さて、化け物たちがやってきて、いう。

「クンボよ、わたしたちはいく。

いつも小屋にいるクンボよ、わたしたちはいく」

小屋にいる雌ヒツジがいう。

「クンボは、あそびにいった」

化け物たちは銀の糞をした。女は自分の土ナベを銀でいっぱいにしたとき。

そういうこと、女はそうにした。

お話はそこにある。わたしはここにいます。お話は、おしまい。

(一九六六年、語り手 デイジー、ガルアにて)

153 クンボと化け物(3)

ちいさなお話、ちいさなお話。ンジャンナ・タボーイエル。語り手の頭にある禿のどまんなか。

(娘のところに、ハイエナの化け物がやってきていう。)

「クンボよ、わたしたちがやってきた。

クンボよ、村長の娘よ、わたしたちがやってきた」

(そこにいた娘の保護者がいう。)

「バ・クルール、バータラーラ、おまえさんたちはきたのか。

クンボはねてしまった。

ジヨウエル・トウンデン」

(一九六五年五月 語り手 ある女)

154 女とゾウ

おまえさんは、ある男のしたことをしらないのか。男は二人の女と結婚した。男は一人をすいたが、もう一人は、きらいだった。そういうことだった。

きらわれた女はどんどんある林まであるいていった。女はいくと、小鳥がいた。小鳥がいたので、女はそこでたちどまった。女はたちどまった。女は雄ヒツジをひっぱってきた。女はそこでたちどまった。

さて、小鳥は女にいった。

「女よ、そこで道をそれなさい。道をそれなさい。キリンダン。

道をそれなくても、キリンダン。

わたしは小鳥、ダンバリエル・イリー・ララー」

女は道をそれた。小鳥が女にいった。

「女よ、そこで昼過ぎの礼拝をしなさい。昼過ぎの礼拝をしなさい。キリンダン。

昼過ぎの礼拝をしなくても、キリンダン。

わたしは小鳥、ダンバリエル・イリー・ララー」

女は昼過ぎの礼拝をした。小鳥が女にいった。

「女よ、そこで木をきりたおしなさい。木をきりたおしなさい。

い。キリンダン。

木をきりたおさなくても、キリンダン。

わたしは小鳥、ダンバリエル・イリー・ララー」

女は木をきりたおした。小鳥が女にいった。

「女よ、そこで小屋をたてなさい。小屋をたてなさい。キリンダン。」

小屋をたてなくても、キリンダン。

わたしは小鳥、ダンバリエル・イリー・ララー」

女は小屋をたておえた。女は小屋に草をかぶせて、ふいた。それでおわった。

さて、ゾウがやってきた。女は水をくみにいき、薪をとってきて、よこになった。

さて、ゾウがやってきて、女にいろいろなものを尻からだした。ゾウは女のためにどうしようもないほどたくさんの人や女奴隷をだしてやった。それでおわった。朝、目がさめると、女はおきた。女は女奴隷たちをみつけた。女奴隷たちはたくさんいた。女は女奴隷をつれて、かえる準備をした。いろいろなものがたくさんたまっていた。女はそれをまとめた。女はそれを女奴隷の頭にのせた。女は雌ヒツジをとると、ひっぱって、かえた。それでおわった。女はそこにあるいて、家にかえっていった。女はどんどんあるいていく。とうとう、女は家についた。家につくと、女のむこさんは女の

手をしっかりとつかんだ。むこさんが女の手をしっかりとつかむと、それでおしまいだ。

さて、女は家にかえって、おちついた。

さて、女のライバルがむこさんに、「わたしもいって、あの人が手にいれたようなものを手にいれる」といった。

さて、女はでかけていった。女は雄ヒツジをひっぱって、でかけていった。

さて、女はあるいていく。女がいくと、そこにいた小鳥が女にいった。

「女よ、そこで道をそれなさい。道をそれなさい。キリンダン。」

道をそれなくても、キリンダン。

わたしは小鳥、ダンバリエル・イリー・ララー」

女は道をそれた。小鳥が女にいった。

「女よ、そこで昼過ぎの礼拝をしなさい。昼過ぎの礼拝をしなさい。キリンダン。」

昼過ぎの礼拝をしなくても、キリンダン。

わたしは小鳥、ダンバリエル・イリー・ララー」

女は昼過ぎの礼拝をした。小鳥が女にいった。

「女よ、そこで木をきりたおしなさい。木をきりたおしなさい。キリンダン。」

木をきりたおさなくても、キリンタン。

わたしは小鳥、ダンパリイエル・イリー・ララー」

女は木をきりたおした。女は木をとって、家をたておわった。女は小屋に草をかぶせて、ふいた。女は草のうえから、縄をかけた。女は掃除をしおえた。女は薪をとりいった。水をくみにいった。女は小屋にかえつてきて、ねた。

さて、ゾウがやってきて、女のために非フルベ族の奴隷を二人とすこしばかりのものを尻からだしてやった。朝、目がさめると、女は家にかえつていった。これでおしまい。この女はもう一人の女のように、ものを手にいれられなかった。もう一人の女はたくさん手にいれたとき。

(一九六四年九月、語り手 ジャーファン氏族のもの、ガウンデレ地方、ヤルンパンのちかくのババ村にて)

155 娘と継母

ある娘がいた。娘は継母とすんでいる。

さて、継母はおきあがり、娘を使いにした。娘は山のむこうのべつの村にでかけていく。娘は山にいった。山のむこうには、おそろしい野原の動物たちがいる。娘はそこにいった。娘がそこにいくと、動物たちがいなかった。娘は小屋をみつけた。雨がふりだし

た。娘はどんどんはしっていくと、その小屋にちかづく。小屋はむこうにとんでいく。娘はどんどんはしっていく。小屋にはいりかけたとおもうと、小屋はむこうにとんでいく。

さて、娘はすわって、ないている。

さて、小屋はどんどん娘にちかづいてきた。

さて、娘は小屋にはいった。

さて、(ほんとうのこと小屋は精霊だった。)精霊は(娘からにげていき)どんどんもどつてくると、娘のそばにやってきて、すわった。娘は、精霊のなかにはいつていった。すると、そこに女がすわっていた。女は、「米粒を一つとり、それをたきなさい」といった。娘は米粒を一つとると、それをたいた。娘は、米粒をいれたナベを火にかけて。米粒はふえて、たくさんになった。娘は米をたいた。女は、「よろしい。いって、ごみ捨て場から骨をひろいなさい。いって、その骨をひろいなさい」といった。

よろしい。わかるな。さて、娘は骨をひらうと、やってきて、それをた。娘はそれをもつてきて、水にいれた。骨はそこらにないはどの肉になった。娘はその骨をた。娘と女はそれをたべた。それをたべると、娘はたちあがると、やってきて、すわった。

さて、娘は朝になるまでよこになった。女は娘に、あちらにある小屋にいき、ちいさなヒョウタンをとるようにという。ちいさなヒョウタンをみついたら、それをとるように、おおきなヒョウタン

はほっておくようにという。娘はちいさいのを三つとった。おおきなのを二つとった。あわせて、五つではないか。娘はヒヨウタンをとった。娘はどんどんあるいていく。野原のまんなかについた。娘が、「ヒヨウタンをつぶそうか」という。野原は娘に、「パサ・ムラ・バ（つぶしなさい。ヒヨウタンからでくるものをわけよう）」という。

さて、娘は、「ヒヨウタンをつぶそうか」という。野原は娘に、「つぶしなさい。ヒヨウタンからでくるものをわけよう」という。さて、娘はヒヨウタンをつぶすのをこばむ。娘は、「ヒヨウタンをつぶそうか」という。野原は娘に、「つぶしなさい。ヒヨウタンからでくるものをわけよう」という。娘は、「ヒヨウタンをつぶそうか」という。野原は娘に、「つぶしなさい。ヒヨウタンからでくるものをわけよう」という。娘はヒヨウタンをつぶそうとしない。野原でつぶしたのは、三つだけだった。娘はべつの野原についた。娘は、「ヒヨウタンをつぶそうか」という。野原は娘に、「つぶしなさい。ヒヨウタンからでくるものをわけよう」という。娘が（おおきな）ヒヨウタンをつぶすと、そのななか

ら野原の動物たちがでてきて、野原ににげていった。娘は、「ヒヨウタンをつぶそうか」という。野原は娘に、「つぶしなさい。ヒヨウタンからでくるものをわけよう」という。（娘がおおきなヒヨウタンをつぶすと）そのななかから野原の動物たちがでてきて、野原にはいつていった。

さて、娘は家についた。家にかえつてくると、金持ちになった。

さて、継母はそれを見ると、自分の子どももいくようにいって。継母は、「おまえは人がいつて、こんなことをするのを見る。おまえも、いつてあしなさい」という。娘は、「わかった。いい」といった。娘はでかけていった。娘は野原の動物たちのいるところに行った。娘はそこについた。娘は野原にある野原の動物のいるところに行った。継母は自分の娘を使いにした。娘は野原のまんなかに行った。いくと、小屋があった。小屋はにげていかなかった。娘は小屋にはいつて、すわった。（そこに女がいる。）女は娘に、「米粒を一つとり、それをたきなさい」という。娘は、「米粒一つなど、わたしがたいたことがあるというの。一粒をたきことなどできないね」といった。女は、「わたしのしったことではない」という。娘は、「たかない」といった。女は、「それでは、よろしい」といった。娘は、「それはよい」といった。女は、「ごみ捨て場から骨をひろって、もつてきなさい」という。娘は、「わたしが、ごみ捨て場から骨をひろってこい」というの。ごみ捨て場にはきたないものがある

るのに。わたしはいや」という。娘はそれこぼんだ。(しかたがないので、とうとう)娘はそれをひらつて、にた。女は、「よろしい」というと、娘に食べ物をわけてやり、娘がたべるよにする。女はその食べ物をわけるという。娘は、女の手が食べ物にふれるなど、とんでもないといった。娘はやつてくると、たくさんとった。娘は女にほんのすこしやった。娘はたくさんたべたけれども、満腹しなかった。女は娘より満腹した。女は娘に、「さて、いつて、ちいさなヒヨウタンを三つとりなさい。おっきいのを二つとりなさい。家にかえりなさい」といった。娘は、「よろしい」といった。娘はおおきなヒヨウタンをとった。(ちいさいのもとった)娘は、「おっきなヒヨウタンをみて、ちいさなのをとれというの。わたしはいや」といった。女は、「よろしい。それでよい。野原では、ちいさなヒヨウタンをつぶさないように。おっきなのをとつて、あちらの野原でつぶしなさい。野原がおまえさんに、「つぶしなさい」というとき、つぶさないように。野原が、おまえさんになにもいわないとき、つぶしなさい」といった。娘は、「わかった」といった。娘は野原についた。娘は、「つぶそうか」という。野原は娘に、「つぶしなさい。ヒヨウタンからでてくるものをわけよう」という。娘は、「ほんとうにつぶしてよいの」といった。野原は娘に返事をした。娘はおおきなヒヨウタンをつぶした。そのなから、野原の動物たちがでてきた。べつのおおきなヒヨウタンをつぶした。野原の動物

たちがでてきた。ちいさなヒヨウタンをつぶした。よいものがでてきて、野原の動物をころした。娘といものはあるいて、あちらまていった。娘は野原に、「つぶそうか」といった。野原は娘に、「つぶしなさい。ヒヨウタンからでてくるものをわけよう」といった。娘は、「つぶそうか」といった。野原は、「バサ・ドウ・カム(どれもつぶしなさい。ヒヨウタンからでてくるものをわけよう)」といった。娘はどれももちあげると、いっしょにして、つぶした。娘の味方のもや人びとがでてきた。野原の動物たちがでてきたけれども、娘の味方よりおおかたので、娘の味方をたべてしまった。娘もたべてしまった。娘の頭はのこしておいた。

さて、娘の母親がすわつて、お祈りをしようとしている。

さて、ハゲタカが娘の頭をはこんで、継母の屋敷のうえまでにげていった。継母は自分の娘が死んだことがわかったとき。

このお話は、おしまい。

(一九八三年一月二三日、語り手 アーマドウ・ルフアイ、ガウンデレにて。この話は、フルベ族の空手の先生からきいたという)

156 子どもたちと老女(1)

ちいさなお話、ちいさなお話。

さて、マイラマたちは、(おかずにするための)セサモイデスの葉をつみにでかけていった。

さて、子どもたちはセサモイデスの葉をつみにいった。子どもたちが、(葉をつんで)やってくると、老女がいた。

さて、老女は、「わたしの子どもたちよ、わたしにそのセサモイデスの葉っぱをすこしずつおくれ。娘さんたちよ」という。

さて、一人ずつ、葉っぱを手でつかむと、老女にわたす。

さて、一人の子どもは、「なんだって。くやしい。おまえさんみたいなみにくい人に、わたしの葉っぱをやれというのかい。どうして、いつて、わたしの母さんやわたしの父さんのべつのよめさんに葉っぱをあげられないの。あなたにあげるって。わたしはあげない」という。子どもはそこをとおりました。老女は、「わたしの子どもたちよ、おまえさんたちは、黒雲をみたら、道があるいて、あの岩のところにいき、そこですわりなさい。それで、黒雲がとおりすぎて、風がヒューとふいたら、おまえさんたちはたちあがりなさい」という。

さて、黒雲がでてきた。(子どもたちは岩のあるところに行った。)
さて、老女のいったとおり、風がとおっていった。風がヒューと

ふくと、子どもたちはたちあがった。(老女に葉をやらなかった子ども) お尻が岩にひつついてしまった。人びとがつきからつきへとやってきて、子どもをもちあげようとするが、子どもはもちあがらなかった。お尻は岩についたままだった。人びとはいくと、小屋をとり、子どもにかぶせた。人びとは子どものイヌをつれてきて、そこにつないでおいだ。母親たちは食べ物をつくって、(それをもつて) いった。母親たちはそこにいき、たちどまって、うたう。

「ダワールよ、わたしの子よ。

わたしのダワール・ペンドよ、わたしの子よ。

わたしのフエネフエネ・ジョーダよ、わたしの子よ。

おまえさんの小屋をもちあげて、うけとりなさい。

おまえさんがうけとるのだ。イヌがうけとるのではない」

子どもは小屋をもちあげて、(食べ物をうけとり) それをイヌといつしよにたべる。

さて、そのつぎの日もまた、子どもの父親のよめさんたちのうちの一人がやってくる。(子どもは食べ物をうけとる。) ハイエナはどん欲で、やってきて、たちどまり、うたう。

「ダワールよ、わたしの子よ。

わたしのダワール・ペンドよ、わたしの子よ。

わたしのフエネフエネ・ジョーダよ、わたしの子よ。

おまえさんの小屋をもちあげて、うけとりなさい。

おまえさんがうけとるのだ。イヌがうけとるのではない」

子どもは、「こん畜生め。わたしに母親の声がわからないとおもっているのか。父親のよめさんの声がわからないとでもいうのか」という。ハイエナは子どもをたべようとしていないだろうか。母親がやってきて、たちどまって、いう。

「ダワールよ、わたしの子よ。」

わたしのダワール・ペンドよ、わたしの子よ。

わたしのフェネフェネ・ジョーダよ、わたしの子よ。

おまえさんの小屋をもちあげて、うけとりなさい。

おまえさんがうけとるのだ。イヌがうけとるのではない」

子どもは、「母さん、ハイエナがここにやってきて、自分も母さんたちがうたうとおなじように、うたって、わたしをたべるといった」という。母親は、「わたしの子よ、アッラーがいらいしやる。でも、あす、わたしはこない。おまえの父さんのよめさんがやってくる」という。ほんとうのこと、父親のよめさんもこなかった。

さて、ハイエナは子どもの母親の声をきいて、自分の声をすつかりそれとおなじようにすると、やってきた。ハイエナはうたう。

「ダワールよ、わたしの子よ。」

わたしのダワール・ペンドよ、わたしの子よ。

わたしのフェネフェネ・ジョーダよ、わたしの子よ。

おまえさんの小屋をもちあげて、うけとりなさい。

おまえさんがうけとるのだ。イヌがうけとるのではない」

(子どもは、それを母親の声だとおもって、小屋をもちあげる。) ハイエナは小屋のなかに、すーっともぐりこんだ。

さて、ハイエナは子どもとイヌをたべてしまった。子どもの父親のよめさんたちのうちの一人がやってきた。母親はこなかった。子どもの父親のよめさんがうたう。

「ダワールよ、わたしの子よ。」

わたしのダワール・ペンドよ、わたしの子よ。

わたしのフェネフェネ・ジョーダよ、わたしの子よ。

おまえさんの小屋をもちあげて、うけとりなさい。

おまえさんがうけとるのだ。イヌがうけとるのではない」

なんの返事もない。女はもう一度うたう。

「ダワールよ、わたしの子よ。」

わたしのダワール・ペンドよ、わたしの子よ。

わたしのフェネフェネ・ジョーダよ、わたしの子よ。

おまえさんの小屋をもちあげて、うけとりなさい。

おまえさんがうけとるのだ。イヌがうけとるのではない」

なんの返事もない。女は村にいく道があるいていった。女はいつてしまった。女はいくと、子どもの母親たちをよんだ。母親たちがやってきた。母親はくりかえし、くりかえし、歌をうたった。そのよな歌はほかになかった。人びとは小屋をもちあげた。骨もなかっ

た。母親は小屋をおくと、そのままいつてしまった。母親は草むらのそばでたちどまり、うたう。

「ダワールよ、わたしの子よ。」

わたしのダワール・ペンドよ、わたしの子よ。

わたしのフエネフエネ・ジョーダよ、わたしの子よ。

おまえさんの小屋をもちあげて、うけとりなさい。

おまえさんがうけとるのだ。イヌがうけとるのではない」

さて、子どもの父親ははしっていき、そのままよこになつてしまった。母親がばけて、自分がたべられてしまうとおもつたからか。

ほら、その人はあそこにいる。ほら、わたしはここにいる。わたしが、話をしたのではない。切り株が話をした。

(一九八〇年九月三日、語り手 女性、レイ・ブーバにて。嶋田にかたつたもの)

157 子どもたちと老女(2)

お話、お話。

子どもたちは(おかずにするための)セサモイデスの葉をつみにいった。

さて、子どもたちは、(葉をつんだあと)かえってくる。

さて、ある老女が子どもたちに、「わたしに、セサモイデスの葉

っぱをおくれ。わたしの子どもたちよ」といった。子どもたちは、「はい。おばあさん」といった。

さて、子どもたちはみんな葉っぱをやった。一人の子どもだけは、老女にやらなかった。

さて、老女は、「おおきな風がふいてくると、おきあがらないように。ちいさな風がふいてくると、おきあがらない」といった。おおきな風がふいてくると、子どもたちはおきあがらなかった。ちいさな風がふいてくると、子どもたちはおきあがった。老女に葉っぱをやらなかった子どものお尻が岩にくっついてしまった。この子どもの母親たちがやってきて、(子どものいる)岩のうえに小屋をたててやった。子どもの兄さんたちは野原の動物をとって、子どもにもってきてやった。子どもはどこにやってくる人はいう。

「ナーナ・エ・ムラー。」

ナーナ・エ・ムラー。

ナーナよ、戸をあけておくれ。

…

(こうして、家族のものが子どもに食べ物をもってきてやるが、ハイエナがやってきて、家族のものの声をまねて、子どもに戸をあけさせ、小屋にはいつて、子どもをたべてしまう。)

おしまい。

(一九八〇年八月二五日、語り手 子ども、レイ・ブーバにて。

嶋田にかたつたもの)

158 子どもたちと老女(3)

お話、お話。はやくやりなさい。聞き手と語り手のおばあさんの頭のうえの禿。

ある男はよめさんを十人めとつた。男はよめさんを十人めとると、十人のよめさんたちはみんな子どもをうんだ。どのよめさんも、娘ばかりをうんだ。

さて、娘たちは豆の葉っぱをつみにいった。娘たちがいくと、老女が豆の葉っぱをつんでいた。老女は娘たちに、「おまえさんたちはみんな、豆の葉っぱをつんだら、わたしに一掴みおくれ」といった。娘たちはみんな豆の葉っぱを手にいれた。みんな、老女に一掴みずつ、やった。でも、一人の娘はやろうとしなかった。一人の娘がやろうとしなかったので、老女は、「おまえさんは、わたしに豆の葉っぱをくれようとしなのだね。よろしい」といった。

さて、娘たちはあるいていった。娘たちはあるいていくと、おおきな岩のしたにすわった。娘たちはあるいていくと、おおきな岩のしたにすわった。娘たちはそこで、やすんだ。娘たちはあるきかけた。娘たちはたちあがり、あるいていった。豆の葉っぱをやろうとしなかった娘は、お尻が岩にひつついてしまつて、たちあがれなくな

なつた。

さて、娘のお尻に根っこがはえてきた。娘はそこにすわったままになつた。

さて、人びとは屋根をつくつて、やってくると、その屋根を娘のうえにかぶせた。人びがやってきて、屋根を娘のうえにかぶせると、一人の姉さんは妹のために、食べ物をもってくる。いつも、妹のために食べ物をもってくる。姉さんは、食べ物をもってくるとうたう。

「アル・バーリよ、妹よ、

バーリ・ペンドよ、妹よ。

ほどよい色をした妹よ、よこになつても、つらい。

ほどよい色をした妹よ、すわつても、つらい。

ひよつとしたら、その葉っぱのおかげでこうなっている。

ひよつとしたら、このカタガユのおかげでこうなっている。

イヌをよこしなさい。イヌが食べ物をうけると」

人びとは娘といっしょにイヌを小屋のなかにおらせた。

さて、イヌはでてくると、やってきて、その食べ物をうけとり、娘にもつていつてやる。娘はそれをたべる。姉さんは食べ物のほいつていた半截ヒヨウタンをうけとつて、家にかえていく。いつも、このようにする。

さて、ハイエナはずつと耳をそばだて、娘の姉さんの歌をきいて

いる。ある日、ハイエナがやってきて、うたう。

「アル・バーリよ、妹よ、

バーリ・ペンドよ、妹よ。

ほどよい色をした妹よ、よこになっても、つらい。

ほどよい色をした妹よ、すわっても、つらい。

ひよつとしたら、その葉っぱのおかげでこうなっている。

ひよつとしたら、このカタガユのおかげでこうなっている。

イヌをよこしなさい。イヌが食べ物をうけとる」

さて、娘は、「イヌよ、いかないでおくれ。あれは姉さんの声ではない。けつしていかないで」といった。

さて、イヌはそこにいる。ずっと、ハイエナは娘の姉さんのような声をだせなかった。

さて、ある日、姉さんがやってきた。姉さんがうたう。

「アル・バーリよ、妹よ、

バーリ・ペンドよ、妹よ。

ほどよい色をした妹よ、よこになっても、つらい。

ほどよい色をした妹よ、すわっても、つらい。

ひよつとしたら、その葉っぱのおかげでこうなっている。

ひよつとしたら、このカタガユのおかげでこうなっている。

イヌをよこしなさい。イヌが食べ物をうけとる」

娘は、「いって、食べ物をうけとりなさい。あれは姉さんだ」とい

った。

さて、イヌはでていき、食べ物をうけとる。娘とイヌはそれをたべる。

さて、娘とイヌはそれをたべる。ハイエナは鍛冶屋のところにいき、「友よ、鍛冶屋よ、わたしの声をよくしておくれ。わたしはでかけていくのだ。わたしはあそこで獲物を手にいれた。わたしはその獲物をたべたいが、たべられないでいる」といった。

さて、鍛冶屋はハイエナの声をきれいにしつてやった。鍛冶屋はハイエナに、「なにかいいなさい。わたしがきいてみる」といった。ハイエナがいう。

「アル・バーリよ、妹よ、

バーリ・ペンドよ、妹よ。

ほどよい色をした妹よ、よこになっても、つらい。

ほどよい色をした妹よ、すわっても、つらい。

ひよつとしたら、その葉っぱのおかげでこうなっている。

ひよつとしたら、このカタガユのおかげでこうなっている。

イヌをよこしなさい。イヌが食べ物をうけとるのだ」

鍛冶屋はハイエナに、「よろしい。いくがよい。おまえさんの声はよくなった」といった。

さて、ハイエナはでかけていった。ハイエナはどんどんあるいていく。

さて、ハイエナがいくと、道に昆虫がいた。道で昆虫をみつけたので、ハイエナは、「友よ、昆虫よ、おまえさんは元気か」という。昆虫は、「うん」という。

さて、ハイエナは昆虫を一口でのみこんでしまった。ハイエナが娘のいるところにつくと、また声がもとのようにわるくなっていた。

「アル・バーリよ、妹よ、

バーリ・ベンドよ、妹よ。

ほどよい色をした妹よ、よこになっても、つらい。

ほどよい色をした妹よ、すわっても、つらい。

ひよっとしたら、その葉っぱのおかげでこうなっている。

ひよっとしたら、このカタガユのおかげでこうなっている。

イヌをよこしなさい。イヌが食べ物をうけとるのだ」

娘はイヌに、「いつてはだめ。あれは、姉さんの声ではない。けっしていかないように」という。

さて、ハイエナはもどつていき、「鍛冶屋のところにいこう。鍛冶屋に声をよくしてもらおう」といった。

さて、ハイエナは、「友よ、鍛冶屋よ、わたしの声がもとのようにわるくなった」という。鍛冶屋は、「それは、おまえさんが道でなにかをたべたためだ」といった。ハイエナは、「わたしは、昆虫をみつめて、その昆虫に挨拶をし、その昆虫を一口でたべてしまっ

た」といった。鍛冶屋は、「これから、なにも口にいれるな」といった。ハイエナは、「うん」といった。鍛冶屋はハイエナの声をよくした。ハイエナは歌をうたった。ハイエナの声は娘の姉さんの声のようになった。

さて、鍛冶屋は、「今度は、道でなにも口にいれるな」といった。ハイエナは、「よろしい」といった。ハイエナはあるいていった。ハイエナは道すがらなにも口にいれなかった。とうとう、ハイエナは娘のところにいきついた。ハイエナはうたう。

「アル・バーリよ、妹よ、

バーリ・ベンドよ、妹よ。

ほどよい色をした妹よ、よこになっても、つらい。

ほどよい色をした妹よ、すわっても、つらい。

ひよっとしたら、その葉っぱのおかげでこうなっている。

ひよっとしたら、このカタガユのおかげでこうなっている。

イヌをよこしなさい。イヌが食べ物をうけとるのだ」

さて、イヌはその声は娘の姉さんの声だとおもって、そとにでた。でると、そこにハイエナがいた。ハイエナはイヌを一口でたべてしまった。ハイエナがそとから、小屋のなかにはいつていくと、娘がいた。ハイエナは娘をたべてしまった。娘の骨だけがのこった。

さて、ハイエナはでていつてしまった。娘の姉さんがやってき

て、うたう。

「アル・バーリよ、妹よ、

バーリ・ペンドよ、妹よ。

ほどよい色をした妹よ、よこになっても、つらい。

ほどよい色をした妹よ、すわっても、つらい。

ひよつとしたら、その葉っぱのおかげでこうなっている。

ひよつとしたら、このカタガユのおかげでこうなっている。

イヌをよこしなさい。イヌが食べ物を受けとるのだ」

なんの音もしなかった。イヌがでてこなかった。姉さんは小屋にちかづき、小屋の入り口についた。姉さんはうたう。

「アル・バーリよ、妹よ、

バーリ・ペンドよ、妹よ。

ほどよい色をした妹よ、よこになっても、つらい。

ほどよい色をした妹よ、すわっても、つらい。

ひよつとしたら、その葉っぱのおかげでこうなっている。

ひよつとしたら、このカタガユのおかげでこうなっている。

イヌをよこしなさい。イヌが食べ物を受けとるのだ」

なんの音もしなかった。姉さんが小屋のなかをみると、骨がのこっているだけだった。娘の骨がのこっているだけだった。

さて、姉さんはその骨をとり、つないでいった。骨はつながらなかった。

さて、姉さんは骨をみんなあつめて、そばにおいておいた。姉さんは、「アッラーよ、この小屋のそばがみんな川になるように」といった。

さて、小屋のそばがみんな川になった。アッラーはこの川をみんなあつめて、一つの池になさった。

さて、ハイエナたちが水をのみにくる。姉さんは池の入り口にふとい針をさしておいた。ハイエナがやってきて、水をのもうとする。姉さんは、「おまえさんがたべたものをはきださないと、水のはいけな」といった。ハイエナがつきからつきへとやってきて、はきだすけれども、妹の肉はなかった。

さて、姉さんは、妹の肉をはきださなかったハイエナに、「いつて、水をのみなさい。どっかにいつてしまえ」といった。ハイエナは水をのみ、針のささらない安全なところからでてくる。つきからつきへと、ハイエナがやってきて、どこかにいつてしまう。とうとう、娘をたべたハイエナがやってきた。このハイエナは自分の子どもたちに自分のたべたものをやる。ある子どもには、爪をやり、ある子どもには、足の肉をやる。子どもの母親には頭の肉をやる。そういうわけだ。

さて、父親のハイエナがやってきた。ハイエナは子どもたちとよめさんといっしょにやってきた。ハイエナはやってきて、水をのもうとする、娘の姉さんが、「おまえさんたちがたべたものをみんな

なはきださないと、水はのめない」といった。ハイエナは、「わたしたちはただの肉しかたべていない。昆虫だけしかたべていない」といった。姉さんは、「はきだしてみなさい。みてる」といった。さて、一匹の子どもが、「わたしは爪をもらった」といった。姉さんは、「それでは、その爪をはきだしなさい」といった。子どもは、爪をはきだした。母親は頭の肉をはきだした。父親は自分のたべた肉をみんなどんどんはきだしていった。

さて、姉さんは、「わたしの妹の骨と肉をひっつけておくれ。ひっつけてくれないと、わたしはおまえさんたちをころす」といった。ハイエナと子どもたちとよめさんは、骨と肉をつけていく。骨がばらばらになる。ひっつけようとするが、ひっつかない。姉さんは、「それでは、水をのみにいきなさい。わたしはしらないよ」といった。父親は水にはいつて、水からでようとする、お腹がやぶれて、そこで死んでしまった。母親が水にはいつて、水からでようすると、お腹がやぶれた。母親は死んでしまった。

さて、姉さんは妹の骨をとって、雌ヒツジのところにもつていった。姉さんは、「雌ヒツジよ、おねがい、おねがい。ここに妹がいる。まえの姿にもどるように妹をなめておくれ」といった。雌ヒツジは、「うん」といった。

さて、雌ヒツジは骨をうけとり、それをみんななめた。雌ヒツジはいう。

「ムブラー、わたしはきれいな足をなめる。

ムブラー、わたしはきれいな手をなめる。

ムブラー、わたしはきれいな目をなめる。

ムブラー、わたしはきれいな耳をなめる。

ムブラー、わたしはきれいな足をなめる」

雌ヒツジは、娘の体をみんななめて、娘の体をまえよりずっときれいな黄金のような体にした。

さて、娘は家にかえつていった。腹違いの娘が、それをみて、「なんだって。あの子はなんという姿になったことか。ハイエナにたべられ、ただの骨だけになったのに、みてみなさい、なんという姿になったことか。わたしはたべられていないから、あれよりきれいな姿になるにちがいない。わたしもいくことにする。わたしはいく」といった。

さて、娘の母親はその娘をつれていき、「おまえもいくのだ、娘よ」といった。母親は娘をつれていき、娘を何度もウスでつき、赤ちゃんこにしてしまった。ウスでつくと、キネが娘を一度つくと、娘は、「母さん、なぜつくの」という。母親は、「おまえの腹違いの姉妹のように、きれいになるためさ」という。母親はまたしても、ウスでつく。娘は、「母さん、なにをするの」という。母親は、「おまえが、きれいになるためさ」という。

さて、女は娘を赤ちゃんこにしてしまった。女は赤ちゃんこにし

た娘を雌ヒツジのところにもっていった。雌ヒツジはいった。

「ムブラー、わたしは片手をなめる。

ムブラー、わたしは片目をなめる。

ムブラー、わたしは片一方の耳をなめる」

雌ヒツジはすべて、片方だけをなめていった。

さて、雌ヒツジは娘を母親にかえした。母親は自分の娘の姿をみて、ないた。それ以上なくなると、片端になった娘をはこんでいったとさ。

(語り手 不明)

159 自分の名前がわかった女と結婚した男(1)

ちいさなお話、ちいさなお話。

ある村には女ばかりがすんでいる。男が一人もいなかった。

さて、男がべつの村からやってきた。男はやってくると、小屋をたてた。小屋には戸がなかった。男はそのなかにはいつて、すんだ。男がそのなかにはいつて、すむと、だれでも、わたしの名前がわかった娘はわたしのよめさんになるといふ。

さて、女たちはきかざつて、男のところにてかけていく。

さて、男の母親はただの女の姿になった。人はこの女をみるのがいやだった。女はだれでもよこをとおりすぎる娘に、「わたしの

背中をこすつておくれ」といふ。娘は、「なんだつて。わたしは若者のところに行く。わたしにおまえさんの背中をこすれといふのかい。おまえさんはどうしようもない婆さんなのに、背中をこすれといふのかい」といふ。

さて、娘たちはどんどんあるいていく。タツタワという名前の娘がやってきて、女の背中をこすつてやった。

さて、女の背中に穴があいた。女は、「そのなかになにがある」といふ。娘は、「卵がある」といふ。女は、「卵をとりなさい」といふ。娘は卵をとった。女は、「それをつぶしなさい」といふ。娘は卵をつぶした。卵のなかに体をかざるものがたくさんはいつていた。女は、「それを身につけて、かざりなさい」といふ。娘はそれを身につけてかざった。女は、「おまえさんは、どこにいくのか」といふ。娘は、「若者のところに行く」といふ。女は、「よろしい。若者はわたしの息子だよ。あの子の名前は、ダスキン・ダリーディ」といふ。娘は、「わかった」といふ。

さて、娘はたちあがつた。娘はどんどんあるいていく。娘は若者のところについた。

さて、トウモロコシという娘が若者のところにつて、挨拶をした。

「平安、なんじらにあれ、若者よ。

平安、なんじらにあれ、若者よ」

若者はいう。

「おまえさんはだれか、娘よ」

娘はいう。

「わたしはあなたのよめさんよ、若者よ。」

わたしはあなたのよめさんよ、若者よ」

若者はいう。

「おまえさんの名前をいっておくれ、娘よ。」

おまえさんの名前をいっておくれ、娘よ」

娘はいう。

「わたしの名前は、おいしいトウモロコシ、若者よ。」

わたしの名前は、おいしいカタガユ、若者よ。」

わたしの名前は、おいしいおかず、若者よ」

若者はいう。

「わたしはおまえさんの名前をきいた、娘よ。」

わたしはわたしの名前がききたい、娘よ」

娘はいう。

「わたしはしらない、若者よ。」

わたしはしらない、若者よ」

若者はいう。

「もどつていき、なくがよい。」

もどつていき、なくがよい」

若者は、「よろしい。わたしの名前がわからないなら、もどつてい

き、なくがよい」といった。

さて、娘はもどつていき、なっている。モロコシという名前の娘

がいくと、いう。

「平安、なんじらにあれ、若者よ。」

平安、なんじらにあれ、若者よ」

若者はいう。

「おまえさんはだれか、娘よ」

娘はいう。

「わたしはあなたのよめさんよ、若者よ」

若者はいう。

「おまえさんはわたしのことをしっているか、娘よ」

娘はいう。

「わたしはしらない、若者よ」

若者はいう。

「もどつていき、なくがよい。」

もどつていき、なくがよい」

娘はもどつていった。娘はなっている。糠という名前の娘がいき、

若者にいう。

「平安、なんじらにあれ、若者よ。」

平安、なんじらにあれ、若者よ」

若者はいう。

「おまえさんはだれか、娘よ」

娘はいう。

「わたしはあなたのよめさんよ、若者よ」

若者はいう。

「おまえさんはわたしのことをしっているか、娘よ」

娘はいう。

「わたしは知らない、若者よ」

若者はいう。

「もどつていき、なくがよい。」

「もどつていき、なくがよい」

娘はもどつていった。娘もなっている。

さて、ダッダワがいき、いう。

「平安、なんじらにあれ、若者よ。」

「平安、なんじらにあれ、若者よ」

若者はいう。

「おまえさんはだれか、娘よ」

娘はいう。

「わたしはあなたのよめさんよ、若者よ」

若者はいう。

「わたしはおまえさんの名前をききたい、娘よ。」

わたしはおまえさんの名前をききたい、娘よ」

娘はいう。

「わたしの名前はダッダワという、若者よ。」

わたしの名前はダッダワという、若者よ」

若者はいう。

「わたしはおまえさんの名前をきいた、娘よ。」

わたしはわたしの名前をききたい、娘よ」

娘はいう。

「あなたの名前は、ダスキン・ダリー・デイ、若者よ。」

あなたの名前は、ダスキン・ダリー・デイ、若者よ」

若者はいう。

「入り口をあけて、はいつてきなさい、娘よ。」

入り口をあけて、はいつてきなさい、娘よ」

さて、入り口がひらいた。娘はなかにはいった。この娘は男と結

婚したとき。

お話はみじかく、わたしの命はながい。お話は、おしまい。ニワ

トリの糞の蒸し焼きができた。ひよっとしたら、ウサギはやせて、

わたしはふとる。草の茎はうずまる。わたしはそとにでる。

(一九八三年一月二五日、語り手 ハッジャ・デッボ・マンガ、
ガウンデレにて)

160 自分の名前がわかった女と結婚した男(2)

ちいさなお話、ちいさなお話。モロコシのちいさな茎、モロコシのちいさな茎。ヒナ族の母さんの頭にある禿のまんなか。デージーヤトウの禿のまんなか。

おまえさんに、マーローリ(マーローリはコメという意味)とチャカラリ(チャカラリとは雨期のしろいモロコシの意味)とムスクワリ(ムスクワリとは乾期のモロコシの意味)とンジガリ(ンジガリとは雨期のあかいモロコシの意味)がいた。これはどれも、女たちの名前だよ。女たちはむこさんをさがしにくところだ。女たちの村では、男が手にはいらなかった。女たちはむこさんをさがしにく。

さて、女たちがいくと、老女が川で水浴びをしている。男はたった一人で小屋のなかにとじこもっている。このような男はこの地方のどこにいてもいなかった。男は小屋にとじこもっている。男は自分の名前がわからないものとは結婚しないといった。わからなければ、ここで死ねばよいといった。女たちはでかけていった。

さて、一人の女がいくと、そこに老女がいた。老女が、「おいで、わたしの背中をこすっておくれ」といった。女は、「なんだって、わたしは若者をさがしているのに、おまえさんの背中をこすれというの」という。そこに一人の娘がやってきた。娘は、「わたしはこ

すってあげる。それをちょうだい」という。すなわち、いちばんあとからやってきたンジガリが、「わたしはこすってあげる。それをちょうだい」という。ンジガリが老女の背中をこすっていると、背中に穴があいた。穴のなかに布地や足輪や腕輪などないものがなかった。老女は娘に、「それを取りなさい」といった。娘は、それをどんどんとて、スカーフにいれてしばった。老女は、「いったら、おまえさんがたずねられるまで、ほかの娘たちをほっておきなさい。あの娘たちのあとになればよい。あの男の名前はガスキン・ダリーデイという」といった。娘は老女に、「よろしい」といった。そういうことで、シンカーファ(ハウサ語でコメという意味、フルフルデ語ではマーローリ)が男のところに最初についた。女はいう。

「平安、なんじらにあれ。

若者よ。

平安、なんじらにあれ」

男がいう。

「おまえさんはだれか、

娘よ。おまえさんはだれか」

女がいう。

「わたしは、シンカーファ。

若者よ、わたしはシンカーファ」

男がいう。

「わたしはおまえさんの名前をきいた。

おまえさんは、シンカーファ。

わたしの名前をいいなさい」

女がいう。

「わたしはわからない。

若者よ、わたしはわからない」

男がいう。

「おまえさんはわたしをしらない。いきなさい。娘よ。

もどつていきなさい」

シンカーファはもどつていった。

さて、ムスクワリがやつてきた。女はいう。

「平安、なんじらにあれ。若者よ。

平安、なんじらにあれ」

男がいう。

「おまえさんはだれか、

娘よ。おまえさんはだれか」

女がいう。

「わたしは、ムスクワリ。

若者よ、わたしはムスクワリ」

男がいう。

「わたしはおまえさんの名前をきいた。

おまえさんは、ムスクワリ。

わたしの名前をいいなさい」

女がいう。

「わたしはわからない。

若者よ、わたしはわからない」

男がいう。

「おまえさんはわたしをしらない。いきなさい。娘よ。

もどつていきなさい」

ムスクワリはもどつていった。

さて、ムバイエリがやつてきた。女がいう。

「平安、なんじらにあれ。若者よ。

平安、なんじらにあれ」

男がいう。

「おまえさんはだれか、

娘よ。おまえさんはだれか」

女がいう。

「わたしは、ムバイエリ。

若者よ、わたしはムバイエリ」

男がいう。

「わたしはおまえさんの名前をきいた。

おまえさんは、ムバイエーリ。

わたしの名前をいいなさい」

女がいう。

「わたしはわからない。

若者よ、わたしはわからない」

男がいう。

「おまえさんはわたしをしらない。いきなさい。娘よ。

もどつていきなさい」

ムバイエーリはもどつていった。

さて、ンジガーリがやつてきた。女がいう。

「平安、なんじらにあれ。若者よ。

平安、なんじらにあれ」

男がいう。

「おまえさんはだれか、

娘よ。おまえさんはだれか」

女がいう。

「わたしは、ンジガーリ。

若者よ、わたしはンジガーリ」

男がいう。

「わたしはおまえさんの名前をきいた。

おまえさんは、ンジガーリ。

わたしの名前をいいなさい」

女がいう。

「あなたの名前はガスキン・ダリーディ」

男がいう。

「小屋をあけて、なかにはいりなさい。娘よ。

小屋をあけて、なかにはいりなさい」

さて、お話はおしまい。ニワトリの糞の蒸し焼きができた。

男はンジガーリと結婚したとき。

(一九六五年五月、語り手 セーフ・ハーミドゥの妹、アーダマ、
マーヨ・ルウェにて)

161 自分の名前がわかった女と結婚した男 (3)

お話、お話。

わかい女がいた。女は男の子をうんだ。男の子はどうしようもないほどきれいだった。息子がたいそううつくしかったので、母親は息子を野原につれていった。母親は息子を一人そこにおいておいた。村の娘たちはみんなこの男の子が死ぬほど好きだった。

さて、娘たちはこの男の子の名前をしらなかった。

さて、娘たちはたちあがり、「きょう、男の子のところにいく。男の子は自分たちのうちからいいものをえらび、結婚するがよい」

といった。

さて、娘たちはたちあがり、あるいていく。一人ずつ、自分の名前をいった。「わたしの名前はコメ」、「わたしの名前はモロコシ」、「わたしの名前はトウジンビエ」、「わたしの名前はこういう」。

さて、娘たちのなかで一番みにくい娘は、自分の名前はブルグだという。ブルグとは一番みにくいモロコシのことだ。娘はみにくかった。娘の名前はブルグという。

さて、娘たちはたちあがり、でかけていく。

さて、娘たちはブルグをいじめ、「おまえにあの男の子が手にいれられたら、わたしはおまえさんの畑になってやる」、「わたしはおまえのあれになってやる」などという。

さて、ブルグは娘たちのあとからあるいていく。娘たちはどんどんあるいていき、ブルグよりずっとさきについてしまった。

さて、ブルグがやってきて、川をわたっている。

さて、川をわたっていると、老女が水浴びをしている。老女は、「きて、わたしの背中をこすっておくれ」といった。娘はやってくと、老女の背中をこすってやっていく。

さて、老女の背中がぼっかりとひらいた。

さて、そのなかから、黄金がでてきた。

さて、老女は娘に、「まちなさい」といった。老女は娘をつかんだ。娘は水浴びをした。老女は娘に黄金の飾りをつけた。老女は、

「おまえさんがいき、自分の名前はなにかときかれたら、その男の子の名前はダスキン・タリーデイだといいなさい」といった。娘は老女に、「わかった」といった。

さて、娘はたちあがった。娘たちは男の子のところに行った。娘たちは男の子のところについた。コメはだれよりもさきについて、挨拶をした。

「平安、平安あれ、男の子よ、平安、平安あれ」
男の子はいう。

「だれがわたしに、平安あれといっているのか」
娘はいう。

「わたしは、コメ。わたしが、平安あれといっている。

わたしは、おかずによい。

わたしは、カユにもよい」

男の子がいう。

「わたしの名前をいいなさい、娘よ。

わたしの名前をいいなさい」

娘がいう。

「わたしはあなたの名前をしらない、男の子よ。

わたしはあなたの名前をしらない」

男の子がいう。

「うしろにもどっていきなさい、娘よ。

うしろにもどっていつて、なきなさい」

この娘はうしろにもどっていつた。もう一人もやってきた。娘は、「平安、なんじらにあれ」といつた。男の子は娘に、「よろしい。おまえさんの名前はなんというのか。おまえさんはだれだ」といつた。娘は、「わたしはモロコシ」といつた。男の子は、「わたしの名前はなんというのか」といつた。娘は、「わたしはあなたの名前を知らない」といつた。男の子は、「それでは、うしろにもどりなさい」といつた。もう一人がやってきた。男の子は娘に、「よろしい。おまえさんの名前はなんというのか」といつた。娘は、「わたしはトウジンビエ」といつた。男の子は、「わたしの名前はなんというのか」といつた。娘は、「わたしはあなたの名前を知らない」といつた。男の子は、「それでは、うしろにもどりなさい」といつた。この娘はうしろにもどっていつた。ブルグがやってきた。男の子は「よろしい。おまえさんの名前はなんというのか」といつた。娘は、「わたしはブルグ」といつた。男の子は娘に、「わたしの名前はなんというのか」といつた。娘は、「あなたの名前はダスキン・ダリーデイ」といつた。男の子は、「それでは、小屋にはいりなさい」といつた。ほかの娘たちはみんなそこをはなれ、よこになって、ないてゐる。みにくい娘は男の子を手にいれた。

さて、みにくい娘は男の子の小屋にはいつた。二人は小屋のなかにいる。ほかの娘たちはたちあがり、ないてゐる。みにくい娘の炉

になるといつた娘は炉になった。みにくい娘がそのうえにすわり、水浴びをする石になるといつた娘はその石になった。薪になるといつた娘は薪になった。なにかになるといつていたものは、そのとおりになった。娘たちはみんななるといつていたものになったとさ。それでおしまい。

(一九八三年一月二日、語り手 ハディージャ、ガウンデレにて)

162 自分の名前がわかった女と結婚した男(4)

ちいさなお話、ちいさなお話。

こういうことだ。ある村があつた。野原もひろかつた。人びとがあつまつた。

さて、ある男の子がいた。この若者はうつくしかつた。すなわち、この村にはこの若者のほか男がいなかつた。若者はたいへんうつくしかつた。人びとはいっしょにすんでいた。人びとはそこにいた。

さて、若者は結婚しなかつた。若者は結婚してよい年頃になつた。若者はよめさんがほしかつた。

さて、人びとはこの若者を野原につれていつた。

さて、若者はいくと、野原にたてた小屋のなかにひきこもつてし

まった。若者は村にすんでいる娘たちがみんなそろって、そこにくるようにといった。娘たちはそろって、そこにでかけていった。娘たちはでかけていった。娘たちは着飾ってでかけていった。その娘たちのなかに、なにももっていないみにくい娘がいた。その娘は貧乏だった。娘にはなにもなかった。娘がいく。ほかの娘たちはこの娘をおいはらう。娘たちはこの娘をおいはらう。娘はみんなのあとをあるいていくといった。

さて、娘たちは川についた。そこに一人の老女がいた。老女は娘たちにきて、自分の背中をこするようといった。

さて、娘たちは、「わたしたちはきれいな若者のところにいくところなの。おまえさんは、自分の背中をこすれというの。なんだつて」といった。娘たちはそこをとりすぎいった。

さて、みにくい娘がやってきて、そこをとりかかる。老女は、「わたしの娘よ、きて、わたしの背中をこすっておくれ」といった。娘は、「はい」といった。娘はタワシ（木の繊維でできている）と石鹸をとり、老女の背中をこするうとする。

そうすると、老女の背中に穴があいた。娘は大声をあげて、「ああ、ああ、あなたの背中に穴があいた」という。老女は、「そのなかになにがあるか」といった。娘は、「卵が二つある」という。老女は、「その卵はどうなっているか」という。娘は、「おおきな卵と小さいな卵」といった。老女は娘に、「おおきいのをそこにおいて

おきなさい。おまえさんは、小さいな卵をとるのだ」といった。娘は小さいな卵をとった。娘はその卵をもって、野原にいった。

さて、娘たちは若者のすむ敷地の入り口についた。娘たちはそこについた。そこには囲いがしてあった。小屋は敷地のまんなかにあった。娘たちがやってくると、若者は小屋の戸をしめていた。そこにやってきた娘はみんな戸のところであちどまった。娘はいう。

「平安、なんじらにあれ、若者よ。」

平安、なんじらにあれ」

さて、娘は、「平安、なんじらにあれ、若者よ。平安、なんじらにあれ」といった。娘が若者にこのようにいったな。そうすると、若者は、「だが、『平安、なんじらにあれ』と挨拶をしているのか」といった。

さて、娘たちは、「わたしたちは娘。わたしたちが『平安、なんじらにあれ』と挨拶をしているの」という。若者は、「よろしい。わたしの名前をいっておくれ」という。娘は答えがでてこない。若者は、「それでは、そこにいるものたちをもときたところにかえしなさい。おまえさんはなくがよい。なきながら、もともどらせなさい」という。娘はもどっていく。みにくい娘は卵をつぶしてなかつた。みにくい娘はあるいていった。みにくい娘は卵をつぶした。（卵のなかから、さまざまものがでてきた。）娘はそれで着飾って、きれいになった。娘は若者のところにいった。娘はそこにつく

と、いった。

「平安、なんじらにあれ、若者よ。」

平安、なんじらにあれ」

若者は、「だれが、『平安、なんじらにあれ』と挨拶をしているのか」という。娘はこたえる。

「わたしは、バランティ（琺瑯引きの盆のこと）という名前なの。わたしが、『平安、なんじらにあれ』と挨拶をしているの」

さて、若者はいった。

「わたしはおまえさんの名前をきいた。わたしの名前をいっておくれ」

さて、娘は若者にいった。

「おまえさんの名前はダスキン・ダリーディ。若者よ。おまえさんの名前はダスキン・ダリーディ」

さて、若者は、「ブーデー・キ・シ・ゴ。キ・シャー・ダーディ」といった。すなわち、「戸をあけて、はいりなさい。おまえさんはよい目をすればよい」といった。そこで、娘は戸をあけて小屋にはいった。

さて、みにくい娘がそのあとをつけていた娘たちはみんな、娘にむかって、「わたしたちはあなたの琺瑯引きの盆になる。わたしたちはおまえさんの琺瑯引きの食器になる。わたしたちはおまえさんのなになになる」などと、いったとき。

さて、このお話もおしまい。

（一九八三年一月二三日、語り手 アーマドゥ・ルファイー、ガウンデレにて。この話はガルアでフルベ族のディージャトゥウから聞いたという）

163 二人のクンボと瘤

クンボには、夫とともにするライバルがいた。二人はいっしょにいた。クンボには、瘤があった。おまえさんは、瘤とはなにかしているかい。ウシの背中にある突起のようなものだ。瘤は人の背中にできる。女には瘤があった。女のライバルにも、瘤があった。

さて、ある日、女は木のしたにすわっていた。女は真昼に糸をつむいでいる。

さて、女は雷の音をきいた。雷の音だ。女は雷の音をきいた。女は、「なんの音なのか。どうして、雷なのか」といった。女がうえをみた。

さて、女がみると、木のうえに老女がすわっていた。老女の髪の毛はまっしろだった。頭の毛はまるで、綿のようにしろかった。

さて、老女は女に、「クンボよ、おそれるな。すわっていなさい。けっしてにげないように」という。

さて、老女は木からおりた。老女は、木からおりると、クンボの

そばにすわった。

さて、老女はクンボに、「わたしがどうしてきたか知っているか」という。クンボは、「わからない」といった。

さて、クンボは老女に、「まず、挨拶をかわしましょう。あなたは、元氣」という。老女は、「元氣だよ。よろしい。わたしがどうしてきたか知っているか」という。クンボは、「わからない」といった。老女は、「わたしがどうしてきたか」というと、おまえさんの心がきれいだからだ。おまえさんはわるくない。よろしい。わたしは、おまえさんが瘤をもっているのをみている。おまえさんの瘤がたいへんおもしろいということも知っている。おまえさんには、それをとりのぞく力がない。だから、わたしは、きょうおまえさんのところにやってきた。わたしはおまえさんにどうしたら、その瘤がとれるかおしえてあげよう」という。

さて、女は、「よろしい。おばあさん。あなたが瘤をとつてくれるなら、それにこしたことはない。あなたが瘤をとってくれるまえに、お礼をいっておきます」という。老女は女に、「よろしい。あすの朝、元氣ならば、朝早く、一番鶏がなくなるとき、おまえさんは、おまえさんたちが水汲みにいく山にはしつていきなさい。山のそばに川がある。その山にいくのだ。そこにいくと、娘たちがあつまつて、おどっているだろう。娘たちがおどっているのをみついたら、おまえさんもその踊りのなかにはいつていくのだ。おまえさんはそ

の娘たちとおどるのだ。おまえさんがやってきて、その踊りのなかにはいると、おまえのそばにいる娘に、はい、わたしの背中に子どもがいる。あずかっておくれ、わたしもおどれるようにといいなさい」という。女は、「わかった。よろしい」といった。老女は、「おまえさんが、背中をその娘のほうにむけ、その娘がおまえさんの瘤にふれ、瘤をとつてしまうと、おまえさんははしりなさい。とまってはならない。家につくまで、うしろをふりかえつてはならない」という。

さて、女は、「よろしい。ありがとう、おばあさん」という。

さて、老女は、「でも、わすれてはならない。(いくときをわすれて) けつしてねこんではならない」という。女は、「今晚はねない」といった。老女はどこかにいつてしまった。そのあくる日、明け方、一番鶏がなくなのをきくと、女は、はしつていった。女はむこさんについてくるといわなかった。むこさんは、もう一人のよめさんの小屋にいる。

さて、女ははしつて、山のしたまでいった。女がいくと、太鼓がさかんになっている。娘たちがおどっている。

さて、女はやってくると、娘たちのなかにはいった。

さて、女は自分の隣にいる娘に、「ほら、この子どもをうけとっておくれ。わたしもおどるから」という。

さて、娘は、「よろしい」といい、手をさしのべて、女の瘤にさ

わって、腰をおり、瘤を体にのせた。瘤は娘の背中についた。

さて、女はにげていった。女はたちどまらなかった。女ははしっている。女はふりかえらなかった。女はどんなはしっていくき、とうとう、家についた。

さて、家につくと、小屋をあけて、小屋にはいった。女はよこになった。女は戸をしめた。とうとう、夜があけて、朝になった。

さて、あたりがあかるくなると、女はおきあがり、戸口を掃除した。戸口を掃除すると、女はいつて、腰をおり、井戸で水をくんでいる。

さて、女のライバルは小屋の戸をあけて、むこさんとでてくる。むこさんがライバルよりさきに戸をあけてでてきた。むこさんがでてきた。

さて、むこさんは女が井戸で水をくんでいるのをみた。女が井戸で水をくんでいるのをみて、男は、「クンボよ」といった。女がそれにこたえた。男が、「おまえか」という。女は、「そう、わたしよ」という。男が、「おまえの瘤はどこにあるのか。それとも、わしは夢をみているのか」といった。男は何度も目をこすった。男は夢をみているのだとおもった。

さて、女が、「わたしよ」といった。男が、「おまえの瘤はどこにある」という。女は、「わたしの瘤はもうない。わたしの瘤はとれた」といった。男が、「おまえの瘤がとれたって」という。

さて、男は小屋のなかにもどっていく、「わしは、戸をあけた。わしは不思議なものにであつた」といった。クンボのライバルは男に、「なんなの」という。

さて、男はよめさんに、「さきほど、小屋からでた。わしはおまえのライバルが井戸で水をくんでいるのをみた。ところが、瘤がみあたらないのだ。わしは、夢をみているのだとおもった。わしは目をこすつては、みなおした。目をこすつては、みなおした。みてみると、瘤がなかった。わしはたずねた。クンボは瘤がとれたといった」という。男はよめさんにその話をきかすと、「きて、みてみなさい」といった。クンボのライバルがでてきて、女を見ると、瘤がとれていた。クンボのライバルにも、瘤がある。

さて、クンボのライバルはとびあがり、地面にたおれた。にくらしかつたので、ないた。クンボがやつてきた。

さて、クンボがやつてきた。男とクンボはやつてくると、ちいさな子どもにするように、女をなぐさめた。二人は女に水をかけてやった。女は正気をとりのどした。二人は女を小屋のなかにはこんでいった。

さて、女は正気をとりのどした。

さて、クンボは、「瘤をとつてもらうのはむつかしくない。なくほどのことはない。それはたやすい。おしえてあげる。きのう、わたしはその木のしたにすわって、糸をつむいでいた。さて、わたし

はおおきな音をきいて、木のうえをみた。すると、木のうえに老女がいた。女は年をとっていた。頭は、まるで綿のようにしろかった。さて、老女はわたしをみて、わたしにこわがるな、すわっていなさいといった。こういうことで、やつてきたといった。老女は

やつてきて、わたしの瘤がとれるには、こうしなければならぬといった。よろしい、そういうこと。おまえさんにも、おしえてあげる。あすの朝、元気なら、おまえさんは山のしたの、おまえさんのしっているわたしたちが水汲みをする川のそばにいきなさい。いと、そこで娘たちがおどっているだろう。おどっているのを見ると、おまえさんはそこにいき、おまえさんの隣にいる娘に、ほら、わたしの背中に子どもがいる、子どもをあずかっておくれ、わたしもおどるといいなさい。娘が両手をさしだし、おまえさんの瘤をさわると、おまえさんははしるのだ。家にかえってくるまで、ふりかえってはいけない」という。クンボのライバルは、「よろしい」という。クンボのライバルは夜があけて、でかけていくのがまぢどおしかった。女は一晚中ねなかった。とうとう、一番鶏がなくのをきくと、はしって、山のしたまでいった。女がいくと、娘たちがおどっている。太鼓がさかんになっている。娘たちは一晚中おどっている。

さて、女は隣にいる娘に、「はい、わたしの背中に子どもがいる。あずかっておくれ、わたしもおどる」という。

さて、娘はふりかえると、女に、「ほら、わたしの背中には子どもがいる。あずかっておくれ」といった。ほんとうのこと、その瘤はクンボからもらったものだ。そういうことで、娘はこのようにいったのだ。

さて、娘がやつてきた。娘は自分の背中にっている瘤をとると、それをクンボのライバルの背におしつけた。瘤は娘の背中から、女の背中にうつてきた。

さて、娘たちはどこかにいつてしまった。太鼓をたたく人たちはにげていった。娘たちはクンボのライバルをそこにのこした。女はたつて、ないている。

さて、女はたちあがると、おおきな瘤を二つ背にもったまま、むこさんのいる家にかえられるわけがない、家にはかえらないといった。女はたちあがると、道があるいていった。女はどんどんあるいていく。

さて、女はいくと、川にとびこんだ。女は一思いに死んでしまうといった。女はいくと、川にとびこんだ。川は女をこぼんで、はきだして、すてたとさ。

わたしの話は、おしまい。

(一九八三年一月二二日、語り手 マータ・アルハジ・ベッロ・イーサ、ガウンデレにて。この話は父方のおばからきいたという)

164
母親と娘たち (1)

ちいさなお話、ちいさなお話。

ある女に子どもがなかった。とうとう、女は年をとった。アッラーがあたえたまい、女は子どもを四人うんだ。一人はラーティティ・ギルディ（蛆虫になってしまった）という意味。一人は、タティ・ビンダ（三人を書く）という意味。一人は、ンジャージルマ（「ミミズ」という意味）。一人は、ンジャーレーンディ（「砂」という意味）。女は四人の娘たちをつれて、娘たちが人にみられないように、よめさんにとられないように、木の洞のなかにかくした。女はでかけていくと、食べ物をつくる。女は食べ物をもつてくる。女は水をくみ、水をもつてきて、木のしたにたち、いう。

「タティ・ビンダよ、子どもたちはいるか。」

ラーティティ・ギルディよ、子どもたちはいるか。

ンジャーレーンディよ、子どもたちはいるか。

ンジャージルマよ、きて、うけとりなさい」

ンジャージルマがそとにでる。娘たちはやってきて、母親がもってきたものをうけとる。娘たちはそれをたべ、のみ、食べ物や飲み物がはいっていた容器を母親にかえす。母親は家にかえていく。日暮れどき、母親はいくと、食べ物をつくって、木のしたにやってきます。いう。

「タティ・ビンダよ、子どもたちはいるか。」

ラーティティ・ギルディよ、子どもたちはいるか。

ンジャージルマよ、子どもたちはいるか。

ンジャーレーンディよ、きて、うけとりなさい」

ンジャージルマがそとにでてきて、母親がもってきたものをうけとる。娘たちは母親がもってきたものをうけとる。娘たちは食べ物や飲み物がはいっていた容器を母親にかえす。母親は家にかえていく。そのうちに、子どもたちはその木のなかで、おおきくなった。

さて、王さまの奴隷がウマにくわせるための草をかつている。

さて、奴隷は娘たちの母親がやってくるのにでくわした。母親がいう。

「タティ・ビンダよ、子どもたちはいるか。」

ラーティティ・ギルディよ、子どもたちはいるか。

ンジャーレーンディよ、子どもたちはいるか。

ンジャージルマよ、きて、うけとりなさい」

さて、ンジャージルマがそとにでてきて、母親がもってきたものをうけとった。

さて、母親が歌をうたうと、娘たちはでてきて、母親がもってきたものをうけとった。王さまの奴隷はかえていった。奴隷はいくと、王さまに、「どこそこという場所のこのような木に娘たちがいます」といった。王さまは、「あす、いっしょにいこう」といった。

奴隸は草をかりに行く。奴隸は娘たちの母親がいくところをしらべておいた。奴隸はそこをとりすぎた。奴隸は娘たちの母親がいくところをしらべておいた。奴隸はいっしょにいこうといった。王さまはウマにのった。母親がいう。

「タティ・ビンダよ、子どもたちはいるか。」

ラーティティ・ギルデイよ、子どもたちはいるか。

ンジャーレーンデイよ、子どもたちはいるか。

ンジャージルマよ、きて、うけとりなさい」

さて、ンジャージルマがそとにでてきて、母親がもってきたものをうけとった。娘たちは母親がもってきたものをたべて、のんだ。娘たちは母親がもってきたものをたべて、のんだ。娘たちは母親に琺瑯引きの食器をかえた。母親がいつてしまった。

さて、王さまがやってきて、たちどまった。王さまがいう。

「タティ・ビンダよ、子どもたちはいるか。」

ラーティティ・ギルデイよ、子どもたちはいるか。

ンジャーレーンデイよ、子どもたちはいるか。

ンジャージルマよ、きて、うけとりなさい」

ンジャージルマがそとにでてきた。王さまはンジャージルマをもちあげ、ウマにのせて、かえっていった。ンジャージルマはいつてしまった。

さて、そのつぎの日、朝はやく、大臣がやってきた。

さて、大臣はやってくると、たちどまり、いう。

「タティ・ビンダよ、子どもたちはいるか。」

ラーティティ・ギルデイよ、子どもたちはいるか。

ンジャーレーンデイよ、子どもたちはいるか。

ンジャージルマよ、きて、うけとりなさい」

タティ・ビンダがでてきた。大臣たちはタティ・ビンダをつれていった。娘たちの母親がやってきて、いう。

「タティ・ビンダよ、子どもたちはいるか。」

ラーティティ・ギルデイよ、子どもたちはいるか。

ンジャーレーンデイよ、子どもたちはいるか。

ンジャージルマよ、きて、うけとりなさい」

娘が一人でできた。娘たちは母親がもってきたものをうけとった。母親は、「それで、タティ・ビンダはどこにいるの。それで、ンジャージルマはどこにいるの」といった。娘は、「体の調子がわるいので、ねている」という。母親は、「それでは、よろしくいつておいて」という。王さまの大使がやってきて、娘を一人つれていった。母親がやってきていう。

「タティ・ビンダよ、子どもたちはいるか。」

ラーティティ・ギルデイよ、子どもたちはいるか。

ンジャーレーンデイよ、子どもたちはいるか。

ンジャージルマよ、きて、うけとりなさい」

ンジャーレーンディだけができた。

さて、ンジャーレーンディがたちあがり、やってくると、母親がもってきたものをうけとった。娘は母親がもってきたものをべつの容器にいれて、おいた。母親が、「きょう、みんなはどこにいるのか」といった。娘は、「ねている」といった。母親は、「それでは、よろしくいっておいで」という。娘は、「はい」といった。娘は食べ物や飲み物はいっていた容器を母親にかえた。母親は家にかえっていった。家来の長がやってきて、娘を一人つれていった。これで、娘はおわってしまったではないか。そのつぎの日、母親がやってきていう。

「タティ・ビンダよ、子どもたちはいるか。」

ラーティティ・ギルディよ、子どもたちはいるか。

ンジャーレーンディよ、子どもたちはいるか。

ンジャージルマよ、きて、うけとりなさい」

なんの返事もなかった。母親はいう。

「タティ・ビンダよ、子どもたちはいるか。」

ラーティティ・ギルディよ、子どもたちはいるか。

ンジャーレーンディよ、子どもたちはいるか。

ンジャージルマよ、きて、うけとりなさい」

なんの返事もなかった。娘たちはどこかにいってしまった。母親は食べ物をもって、村むらをまわる。村につくと、母親はたちど

まって、いう。

「タティ・ビンダよ、子どもたちはいるか。」

ラーティティ・ギルディよ、子どもたちはいるか。

ンジャーレーンディよ、子どもたちはいるか。

ンジャージルマよ、きて、うけとりなさい」

村人は女に、「さきにいきなさい」という。女はそこをとりすぎて、さきにいく。村があると、そこでまたしてもたちどまって、いう。

「タティ・ビンダよ、子どもたちはいるか。」

ラーティティ・ギルディよ、子どもたちはいるか。

ンジャーレーンディよ、子どもたちはいるか。

ンジャージルマよ、きて、うけとりなさい」

女はそこをとりすぎて、またさきにいく。女はそこからまたさきにいく。とうとう、女は娘たちのいるところについた。娘たちはおなじ村にいる。女はいくと、まずはじめに、タティ・ビンダのところにいった。女はいった。

「タティ・ビンダよ、子どもたちはいるか。」

ラーティティ・ギルディよ、子どもたちはいるか。

ンジャーレーンディよ、子どもたちはいるか。

ンジャージルマよ、きて、うけとりなさい」

タティ・ビンダはむこさんといったが、母親をおいはらった。母親

は、「なんということか」といった。母親はそこをとりすぎて、いう。

「タティ・ビンダよ、子どもたちはいるか。」

ラーティティ・ギルディよ、子どもたちはいるか。

ンジャーレーンディよ、子どもたちはいるか。

ンジャーシルマよ、きて、うけとりなさい。」

ラーティティ・ギルディはカタガユをこねていたが、捏ね棒をカタガユからぬきとり、自分の母親の額をたたいた。ラーティティ・ギルディは、「くさい、おいほれはだれの老女か。ここをとりすぎて、わたしからはなれておくれ」という。母親はそこをとりすぎて、いった。母親はいう。

「タティ・ビンダよ、子どもたちはいるか。」

ラーティティ・ギルディよ、子どもたちはいるか。

ンジャーレーンディよ、子どもたちはいるか。

ンジャーシルマよ、きて、うけとりなさい。」

ンジャーレーンディは掃除をしていたが、小石をあつめて、母親になげつけた。母親はそこをとりすぎた。母親は末娘のところに行った。末娘はモロコシについている。母親はいう。

「タティ・ビンダよ、子どもたちはいるか。」

ラーティティ・ギルディよ、子どもたちはいるか。

ンジャーレーンディよ、子どもたちはいるか。

ンジャーシルマよ、きて、うけとりなさい。」

さて、末娘は、「あれは、母さんだ。いつて、母さんをつれてきておくれ」といった。家のものたちはいくと、末娘の母親をつれてきた。末娘の母親を屋敷のなかにつれてきた。末娘は女奴隷を使いだし、「そこにいる王さまにくるようにいつておくれ」という。（王さまがやつてくる。）末娘は王さまに、「ここにいるのは、わたしの母親です」といった。王さまが、「おまえの母親か」といった。よめさんは、「はい」という。

さて、末娘は母親のためにべつの部屋に寝具を用意した。女たちはカユをつくった。食べ物をつくつて、娘の母親のところにもつていった。

さて、娘たちはみんなお腹がおおきくなった。娘たちは母親のところにかえつてきた。娘たちは母親のところをやつてきて、子どもをうんだ。ンジャーシルマは女の子をうんだ。残りの三人は男の子をうんだ。一週間がすぎた。人びとは子どもたちに名前をつけた。娘たちは川にいった。母親は自分の土ナベをきれいにあらひ、水をいれ、火をもやし、土ナベを火にかけた。湯がわいた。母親はいくと、タティ・ビンダの子どもをもつてきて、ナベのなかになげこんだ。母親はラーティティ・ギルディの子どもをもつてきて、ナベのなかになげこんだ。母親はンジャーレーンディの子どもをもつてきて、ナベのなかになげこんだ。母親はンジャーシルマの子どもを

165 母親と娘たち (2)

ちいさなお話、ちいさなお話。

ある女は、五人の娘をうんだ。一人は、ナンドウ・バ・コサム（まるで、乳のよう」という意味）。一人は、ナンドウ・バ・ンデイヤム（まるで、水のよう」という意味）。一人は、タンニ・ダラ

そのままにしておいた。子どもたちはにえてきて、まっかになった。母親はローゼレの葉をもつてきて、落花生といっしょにナベにいれ、よくかき混ぜた。母親は、「娘たちよ、かえってきたの」という。娘たちは、「かてえってきた。子どもたちに乳をすわす」という。母親は、「まず、たべないで、子どもたちに乳をすわすのか」という。娘たちは、「おかずをたべ」 「ああ、母さん、このローゼレのおかずはおいしい」という。母親は、「娘たちよ、たべなさい」という。娘たちは食べ物をつたべ、食器の底までさらえてしまった。母親は、「おまえたちは子どもをみんなたべてしまった。よろしい。それがおいしいか、まずいか、みてちょうだい。わたしに意地悪をした三人はわたしのところにもうこなくてよろしい」という。

そこに、お話があり、わたしはここにいます。

（一九六六ころ、語り手 マイリ・アッダ・ペーテル、マヨ・ルウエにて）

（「ナツメヤシ」という意味）。一人は、ブッキ・ダサ（「房がひきずる」という意味）。一人は、「シーシエル・ホッコラム・ンディヤム・ミ・ヤラ（「五フランよ、わたしに水をおくれ、のむ」という意味）。女は野原にはいった。女は野原にいくと、木の洞のなかにすんだ。とうとう、娘たちはおおきくなった。みんな娘たちだった。

さて、娘たちはみんな一人前になった。娘たちは空をみたことがなかった。女は野原にいき、食べ物をもつてかえってきた、娘たちにやる。

さて、ある日、母親がでかけていった。末娘が姉妹に、「おねがい。いつて、空をみよう」という。

さて、娘たちは洞のそとにでた。娘たちはみんな空をみて、不思議におもった。娘たちはうえをみる。娘たちはあっちこちをみる。じつは、狩人が娘たちをみている。狩人ははして王さまのところにいくと、「わたしは野原にいった。王さまにあいたい」といった。王さまがでてきた。狩人は、「アッラーがあなたをよろこばれますように」といった。王さまは、「どうも」といった。狩人は、「わたしは野原でみたような女をみたことがあります。あなたのようにめいさんたちにも、あんな女たちはいません。まして、村にいる女などとうていあの女たちにおよびません」という。王さまは、「なんということか。この男をつかまえて、ころせ」といった。王

さまの家のものたちは狩人をつかまえて、ころした。そのつぎの日、べつの狩人が野原にいき、木にのぼった。娘たちの母親がかえってきて、「娘たちよ、そとにでてはいけない」といった。娘たちは、「母さん、そとにはでない」といった。

さて、母親がでかけていった。娘たちはそとにでた。末娘が、「いって、きのうのように、空をみよう」という。娘たちは末娘に、「いこう」といった。娘たちはでていき、あっちこちをみている。木にのぼっていた狩人が娘たちをみて、木からおりて、王さまのところにしっていった。この狩人は、「アッラーがあなたをよろこばれますように」といった。王さまは、「どうも」といった。狩人は、「あの狩人のいっていたことはほんとうです」といった。王さまは、「いって、太鼓をたたけ」といった。人びとは太鼓をたたいた。人びとはウマにのった。人びとはやってきた。人びとはみんな木にのぼった。娘たちがでてきた。娘たちはあっちこちをみている。王さまが大声をあげた。人びとはすぐに娘たちを五人ともつかまえた。人びとはやってきて、娘たちをつかまえた。母親は娘たちがたべるものをさがしにいつている。

さて、王さまが、「娘たちをつれていけ」といった。王子は娘を一人とった。裁判をする人が一人とった。家来の長が一人とった。家来たちは王さまに末娘をとっておいだ。王さまは末娘と結婚した。人びとは村にかえってきた。どの娘も、結婚して、自分の小屋

にいる。母親がかえってきても、娘たちはいなかった。母親は一日中なき、一晚中ないた。母親は毎日ないていた。母親はなにもたべず、なにもまなかつた。とうとう、母親は鳥のようになってしまった。娘たちは結婚して、それぞれの小屋にいる。母親はたちあがり、自分の娘たちをよんだ。母親はとんでいき、長女の小屋のうえにとまった。母親はいった。

「ナンドウ・バ・コサムよ、いるかい。」

ナンドウ・バ・ンディヤムよ、いるかい。

タンニ・ダラよ、いるかい。

ブッキ・ダサよ、いるかい。

シーシイエル・ホツコラム・ンディヤム・ミ・ヤラよ」

さて、娘がでてきて、「その鳥はなんという鳥か」という。娘は鳥をおいはらった。またしても、鳥はとんでいった。鳥はいくと、二番目の娘の小屋のうえにとまった。鳥はいった。

「ナンドウ・バ・コサムよ、いるかい。」

ナンドウ・バ・ンディヤムよ、いるかい。

タンニ・ダラよ、いるかい。

ブッキ・ダサよ、いるかい。

シーシイエル・ホツコラム・ンディヤム・ミ・ヤラよ」

こうして、鳥は娘たちのところをすべてまわり、最後に末娘の小屋にいった。王さまは家来たちのところにいる。シーシイエルは通

り抜けのできる小屋によこになっている。女奴隷たちがモロコシをついている。シーシエルのとも妻たち（夫とともにする女、ライバル）がついている。鳥はやつてくると、娘の小屋のうえにとまった。鳥はいう。

「ナンドウ・バ・コサムよ、いるかい。」

ナンドウ・バ・ンディヤムよ、いるかい。

タンニ・ダラよ、いるかい。

ブッキ・ダサよ、いるかい。

シーシエル・ホッコラム・ンディヤム・ミ・ヤラよ」

シーシエルは鳥のことをきくと、便所にいくようにして、おきあがり、自分の小屋のうえにいる鳥をみた。鳥はいった。

「ナンドウ・バ・コサムよ、いるかい。」

ナンドウ・バ・ンディヤムよ、いるかい。

タンニ・ダラよ、いるかい。

ブッキ・ダサよ、いるかい。

シーシエル・ホッコラム・ンディヤム・ミ・ヤラよ」

シーシエルは小屋にたくさんさんの布をおき、手をのばし、母親をもちあげた。女奴隷たちは湯をわかった。娘は母親をあらってやった。こちらでは、食べ物をつくっている。こちらでは、母親をあらっている。娘は母親をそってやった。娘は食べ物をつくりあげると、王さまをよんだ。王さまが家来たちのところから、かえってきた。

た。娘は、「母さんがきた」といった。王さまが、「いつきたのか」といった。娘は、「さきほどきた」という。王さまは、「よろしい」といった。王さまは屋敷の一部を母親にわけてやった。娘は母親といっしょにいる。

さて、娘は、「母さん、姉さんたちもみんなお腹がおおきくなつた。わたしたち、五人みんなもごつた」といった。姉さんたちはみんな子どもをうむために、母親のところかえってきた。

さて、シーシエルは母親の家に子どもをうみにいった。娘たちはみんなごもつて王さまの屋敷にいる。娘たちは母親の家にいる。王さまはよめさんの母親に屋敷の一部をわけてやった。娘たちは女の子をうんだ。シーシエルは男の子をうんだ。母親は、「娘たちよ、水浴びにいき、食器をあらっておいで。かえつてきて、子どもに乳をのませなさい」という。娘たちはみんな水浴びにいった。母親はナベに湯をわかった。母親は四人の娘たちの子どもをみんなナベのなかにいれた。シーシエルの子どもは、もちあけると、小屋にねかせた。母親はシーシエルの子どもをねかせた。娘たちは洗濯からかえつてきた。娘たちは乳首からみんな乳がしみだしている。娘は、「母さん、子どもはどこにいるの」という。母親は、「娘たちよ、たべなさい。まず、たべなさい。シーシエルよ、この子たちといっしょにいと、おまえはうまくたべられない。おまえは、ちいさい。あちらにいったたべなさい。おまえの分はべつ

につくつてある」という。シーシエルがいくと、小屋で自分の子どもがねていた。シーシエルは食べ物をとって、たべている。子どもは乳をのんでいる。ほかの娘たちは、「母さん、わたしの子どもはどこにいる」といった。母親は、「まずはたべなさい、娘よ」という。母親は食べ物と食器にいった。娘たちは食べ物をたべている。娘が自分の子どもの指をつかんで、「ああ、母さん、ああ、母さん」となきだした。母親は、「つらいだろう。おまえたちはわたしをつかれさせ、一人前になったということをしらないのだね。わたしがやってきて、おまえたちの小屋のうえにとまると、おまえたちはわたしのことを鳥という。なんだって。かえりたかったら、おまえたちの家にこえりなさい。いたかったら、ここにいなさい」といったとさ。

この話はこのようなもの。

お話は、あそこで、わたしはここにいます。

(一九六五年五月、語り手 ギタール出身解放女奴隷ゴッゴ・アスタ、マヨ・ルウエにて)

166 母親と娘たち (3)

お話、お話。

女がいた。女は三人の娘をうんだ。一人はバルバレル・ニャー

レルという。もう一人は、クンボ・ジャーパージという。もう一人は、ローシ・ビンディルデイという。娘たちはだれにもまけないほどきれいだった。

さて、娘たちは、ある日、野原にいった。娘たちは薪をとりにつた。

さて、王さまのウマの世話をする召使いが娘たちをみた。

さて、王さまのウマの世話をする召使いは王さまに、「こうして、わたしは三人の娘をみました。娘たちはたいへんきれいです」といった。王さまは、「なんとかして、そのうちの一人は手にいれてくれ」といった。

さて、王さまのウマの世話をする召使いたちは娘の母親のところにイヌをやらせた。イヌはやってくると、前足をたててすわった。娘たちが小屋の戸をひらくと、そこにイヌがいた。娘たちは食べ物をつくって、たべている。娘たちがカタガユをつかんで、一切れイヌにながてやった。イヌはそれをたべようとしなかった。

さて、娘の母親はイヌにいった。

「わたしはわたしのクンボ・ジャーパージをやらない。

わたしはわたしのバルバレル・ニャーレルをやらない。

わたしはわたしのローシ・ビンディルデイをやらない」

さて、母親はクンボ・ジャーパージをほうりだした。イヌはクンボ・ジャーパージを王さまのところにつれていった。そのつぎの

日、イヌは朝はやくからやってきた。娘の母親はイヌにいった。

「わたしはわたしのクンボ・ジャーボージをやらない。

わたしはわたしのバルバレル・ニャーレルをやらない。

わたしはわたしのローシ・ビンディルディをやらない」

母親はバルバレル・ニャーレルをほうりだした。そのつぎの日、イヌは朝はやくからやってきた。娘の母親はいう。

「わたしはわたしのクンボ・ジャーボージをやらない。

わたしはわたしのバルバレル・ニャーレルをやらない。

わたしはわたしのローシ・ビンディルディをやらない」

母親は三人目の娘をほうりだした。

さて、娘の母親は一人ですんでいた。娘たちはそれぞれのところにくと、おおきくなった。母親は娘たち三人をみんな結婚させた。

さて、娘たちはお腹がおおきくなった。娘の母親はだんだん年をとっていき、ハゲタカになってしまった。

さて、ある日、母親はたちあがり、とんでいき、クンボ・ジャーボージの小屋のうえにとまった。小屋のうえにとまると、クンボ・ジャーボージの家のものたちは力をいれて、モロコシをついている。

さて、母親はクンボ・ジャーボージの小屋のうえにとまると、いった。

「わたしはわたしのクンボ・ジャーボージをやらない。

わたしはわたしのバルバレル・ニャーレルをやらない。

わたしはわたしのローシ・ビンディルディをやらない」

さて、娘が、「話をする鳥はなんという鳥なの。おいはいなさい」といった。

さて、娘の家のものたちは母親をおいはらった。

さて、母親はとんでいくと、もう一人の娘の小屋のうえにとまった。母親はいう。

「わたしはわたしのクンボ・ジャーボージをやらない。

わたしはわたしのバルバレル・ニャーレルをやらない。

わたしはわたしのローシ・ビンディルディをやらない」

さて、ローシ・ビンディルディは、「話をする鳥はなんという鳥なの。おいはいなさい」といった。娘の家のものたちは母親をおいはらった。

さて、母親はバルバレル・ニャーレルの小屋のうえにとまると、いう。

「わたしはわたしのクンボ・ジャーボージをやらない。

わたしはわたしのバルバレル・ニャーレルをやらない。

わたしはわたしのローシ・ビンディルディをやらない」

さて、娘は、「なんだって、まちなさい。あの鳥をおろしておくれ。あれは、母さんだ」といった。

さて、娘の家のものたちは母親をおろした。

さて、娘は母親を小屋につれていき、小屋のなかにある壁の内側にいた。娘は母親の爪をきった。娘は湯をわかった。娘は母親の体についている羽根をむしりとった。

さて、母親は人の姿にもどった。

さて、残りの二人の娘たちも、話をきいて、やってきた。

さて、母親は作り声で、この娘たちをむかえた。娘たちは、「母さん、きたの」という。母親は、「うん」という。娘たちは、「母さん、きたの」という。母親は、「うん」という。

さて、母親は娘たちをすべて、バルバレル・ニャーレルの小屋にあつめた。娘たちはやってくると、そこで子どもをうんだ。娘たちが元気になると、母親は、「わたしの洗濯物をすべてあつめて、川にいき、あらっておくれ」といった。娘は、「それで、わたしたちの赤ん坊はどうするの。それで、わたしたちの赤ん坊はどうするの」という。母親は、「バルバレル・ニャーレルが赤ん坊に乳をやればよい」といった。

さて、バルバレル・ニャーレルは赤ん坊をあずかった。赤ん坊は乳をのんでいる。娘は川に母親の着物をあらいにいった。母親はクンボ・ジャーボージとローシ・ビンデルデイの子どもたちをとると、きりきざみ、にた。母親は子どもたちの頭をとり、それを灰のなかにうずめた。

さて、娘たちが川からかえってきた。

さて、母親は、「きて、たべなさい」といった。

さて、娘が、「赤ん坊はどこにいるの。乳をのませる」といった。

さて、母親は、「赤ん坊は小屋のなかにある壁の内側でねている」といった。

さて、娘たちは食べ物をとり、たべている。

さて、娘たちがうしろをみると、ニワトリが自分たちの子どもの頭をほりだしているのを見た。

さて、娘たちは手を頭にのせて、なく。とうとう、娘たちはかえっていったとき。

お話はみじかく、わたしの命はながい。

(一九八三年一月二一日、語り手 ハディージャ、ガウンデレにて。ハディージャはジジ・イーサの交差従姉妹)

167 ジュバーニ

お話、お話。

娘がいた。娘は自分の子どもをうんだ。その子どもの名前はジュバーニという。

さて、娘は子どもを自分のむこさんの屋敷でうんだ。

さて、娘はおきあがり、自分の母親のところに行く。父親の屋敷

はとおかつた。娘はたちあがり、あるいていく。

さて、娘はハイエナにであつた。

さて、ハイエナは娘にいった。

「ジュバーニの母親よ、わたしにジュバーニをおくれ。

わたしはジュバーニをあやし、おまえさんにおいつく」

娘はハイエナに子どもをわたした。ハイエナは子どもをあやし、娘においついた。娘はあるいていくと、ヒヨウにであつた。ヒヨウは娘にいった。

「ジュバーニの母親よ、わたしにジュバーニをおくれ。

わたしはジュバーニをあやし、おまえさんにおいつく」

ヒヨウは子どもをあやし、娘においついた。娘はライオンにであつた。ライオンは娘にいった。

「ジュバーニの母親よ、わたしにジュバーニをおくれ。

わたしはジュバーニをあやし、おまえさんにおいつく」

娘はそこをとおすぎると、雌ヤギにであつた。雌ヤギも、娘になじようにいった。娘はニワトリにであつた。ニワトリは娘におなじようにいった。とうとう、娘は母親のところについた。

さて、父親の屋敷に年をとつた母親がいた。

さて、母親は娘に、「ここにわたしの着物がある。これを取り、あらつておくれ。わたしの着物を取り、川にいつて、あらつておくれ」といった。娘は母親の着物をとると、あらいにいった。

さて、母親は孫の子どもをウスにいれると、娘のおじさんに、やつてきて、子どもをウスでつくようにといった。娘のおじさんは、キネをもちあげ、子どもをつこうとしたが、「母さんこそ、さきについておくれ」といった。母親がキネをもちあげて、つこうすると、ウスのなかの子どもがわらう。

さて、母親はキネをもとにもどす。母親がキネをもちあげて、つこうとすると、ウスのなかの子どもがわらう。

さて、母親は目のみえない娘のおじさんをよんで、「ウスをついておくれ。きて、このウスのなかにあるものをついておくれ」といった。

さて、おじさんがキネをもちあげると、子どもはわらうが、おじさんは子どもをキネでついてしまった。

さて、おじさんは子どもをついた。

さて、おじさんは子どもをついた。子どもはすっかりべっちゃんこになつてしまった。

さて、母親は子どもの肉をとると、それを料理した。

さて、娘がかえつてきた。

さて、娘は母親に、「わたしの子どもはどこにいるのか」といった。母親は娘に、「おまえの子どもは、ねている」といった。

さて、母親はおかずを食器にいれた。母親は娘にきて、たべるようにといった。

さて、娘はたべているとき、子どもの指をみつけた。娘は母親

に、「どうしたのか、これはわたしの子どもの指ににている」といった。母親は、「いやいや、それはカモシカの肉だよ。それはカモシカの肉さ」といった。娘はそれをすっかりたべてしまった。

さて、母親は娘に、「わたしはおまえの子どものウスでついた」といったとき。

さて、お話はみじかく、わたしの命はながい。

(一九八三年二月二〇日、語り手 ディージャ・プーバ、ガウン
デレにて)

168 二人のバノ (1)

お話、お話。ンジャンナ・タボーイエル。この話をしてくれた人の名前はネンネ・アイサトゥ・ディラウ。

あるところに娘がいた。娘は子どもをうんだ。この娘の夫は二人のよめさんをもっていた。一人の女は一人の子ともうんだ。もう一人の女も子どもをうんだ。子どもたちはたいへんよくにっていた。というのは、父親がおなじだったからだ。

さて、ある日、一人の子どもの母親が死んでしまった。

さて、母親に死なれた子どもには、継母がのこった。

さて、継母はどれが自分の子どもか、どれがとも妻の子どもなの

かわからなかった。

さて、ある日、女はたちあがり、老女のところにいき、老女に、「どうしたらわたしの子どもたちのうち、どちらがわたしのうんだ子どもで、どちらがわたしのとも妻の子どもかわかるのでしょうか」といった。老女は女に、「いって、トウジンビエをあらひ、日向にかわかしおきなさい。子どもたちはやってきて、トウジンビエをすくいあげ、たべるだろう。おまえさんがしかると、一人はあらずさりする。もう一人はトウジンビエのところまでやってきて、すくいあげる。やってきて、すくいあげるのがおまえさんの子どもだ。あらずさりするのは、おまえさんの子どもではない」といった。女は老女に、「わかった」といった。女は家にかえっていった。さて、女はトウジンビエをとり、あらって、日向にかわかしおいた。

さて、子どもたちははしつてきて、トウジンビエをすくいあげ、たべようとする。

さて、女はしかった。

さて、一人はあらずさりした。

さて、一人はやってきて、すくいあげた。

さて、女はトウジンビエをすくいあげた子どもの腕に紐をつけた。女はその子どもが自分の子どもで、あらずさりしたのは、自分の子どもでないということがわかった。女は野原におおきな穴をほ

った。

さて、女は継子をその穴のなかになげこんだ。

さて、ある日のことだった。

さて、女は石をもってきて、その穴をふさいだ。

さて、夕方になった。

さて、腹違いの子はいくのをずっと我慢していたが、穴になげ込まれた子どものところにいった。

さて、腹違いの子は穴の入り口のところでたちどまって、いう。

「わたしのバノよ、盆をあむための草がみのつた。

わたしのバノよ、おかずにする草はまだつんでいない。

わたしのバノよ。

わたしのバノよ、盆をあむための草がみのつた。

わたしのバノよ、おかずにする草はまだつんでいない。

わたしのバノよ、水はまだくんでいない。

わたしのバノよ」

さて、それをうけて、穴のなかにいる子どもがいう。

「わたしのバノよ、あなたの母親はわるい人。

わたしのバノよ、あなたの母親はたいへんわるい人。

わたしのバノよ、あなたの母親はわるい人。

わたしのバノよ、あなたの母親はたいへんわるい人」

穴のそとにいる子どもがあとんどりし、たちどまる。穴のなかにい

る子どもがいう。

「わたしのバノよ、あなたの母親はわるい人。

わたしのバノよ、あなたの母親はたいへんわるい人。

わたしのバノよ」

穴のそとにいる子どもがいう。

「わたしのバノよ、盆をあむための草がみのつた。

わたしのバノよ、おかずにする草はまだつんでいない。

わたしのバノよ、水はまだくんでいない。

わたしのバノよ」

子どもたちはずっとこのようにうたっている。とうとう人びとがやってきて、そこをとおりがかり、子どもたちの声をきいた。人びとがやってくると、子どもが穴のそとにたち大声をあげていた。

さて、人びとは子どもに、「どうしたのか。子どもよ」といった。子どもは、「こういうことなの。わたしの母さんが妹を穴のなかになげこんでしまったの」といった。

さて、人びとは穴のなかにはいつて、子どもを穴からそとにだした。

さて、人びとは子どもを家につれてかえった。

さて、人びとは継母の首をつかみ、ころしてしまった。

さて、人びとは子どもたちをそのままにしておいた。子どもたちはそこにすんだとき。

お話はみじかく、わたしの命はながびく。

(一九八三年一月二七日、語り手 ハディージャ・ブーバ、ガウ
ンデレにて)

169 二人のパノ(2)

お話、お話。

ある男によめさんが二人いた。よめさんたちはそれぞれ娘をうんだ。

さて、一人の娘の母親が死んでしまい、そのあとに娘をのこした。この女には、子どもが一人しかいなかった。女は、ほかの子どもをうんでいなかった。この女の子もはパノという。もう一人の娘も、パノという。

さて、女とパノたちがいる。いつも、女は母親をなくした娘に仕事をやらせる。一人のパノは仕事をするが、もう一人のパノは仕事をしなかった。

さて、もう一人のパノは水浴びをして、よこになる。パノたちはいつも、シユロの葉をあんで盆にする。パノたちは野原にいつて、シユロの葉をとってきて、あんで盆にする。いつも、そうするのだった。

さて、この村に略奪戦争をする人たちがやってくる。

さて、こうしてこの村に略奪戦争をする人たちがやってくる。

さて、もう一人のパノの母親はふかい穴をほり、自分のうんでいないパノをその穴のなかになげこんで、土でその穴をふさいだ。石をもつてきて、そのうえにおいた。

さて、女は自分の娘に、「いつてしまおう。いつてしまおう」という。娘は、「なにをいうの、わたしはわたしの姉妹をみていない。わたしはどこにもいかない」といった。母親は、「いこう。いこう」という。娘は、「なにをいうの、わたしはどこにもいかない」といった。

さて、娘は、「わたしはわたしの姉妹をみるまで、どこにもいかない」といった。

さて、女は、「よろしい」といった。

さて、娘はいくとき、いう。

「わたしのパノよ、でておいで。いこう、わたしのパノよ」

さて、穴のなかにいるパノがそれをうけて、いった。

「わたしのパノよ、わたしはいまいく。」

わたしのパノよ、わたしは石でおさえられている。

わたしのパノよ、穴はふかい。

わたしのパノよ、わたしは岩でおさえられている。

わたしのパノよ、あなたの母親はわるい人。

わたしのパノよ、あなたの母親はおそろしくわるい人」

穴のなかにいる娘はこのようにいう。穴のそとにいるバノはずっとなきながら、姉妹のいるところをさがしている。バノはずっとなきながら、姉妹のいるところをさがしている。そのうちに、バノは穴のあるところがわかった。みると、穴は土でふさいであつた。

さて、娘はいう。

「わたしのバノよ、でておいで。いこう、わたしのバノよ」

さて、穴のなかにいるバノがそれをうけて、いう。

「わたしのバノよ、わたしはいまいく。」

わたしのバノよ、わたしは石でおさえられている。

わたしのバノよ、穴はふかい。

わたしのバノよ、わたしは岩でおさえられている。

わたしのバノよ、あなたの母親はわるい人。

わたしのバノよ、あなたの母親はおそろしくわるい人」

穴のなかにいる娘はこのようにいう。穴のそとにいるバノはずっとないている。穴のそとにいるバノはこうしている。

さて、王さまと右大臣と左大臣がそこをとりかかると、

さて、王さまが、「娘よ、おまえはなにをしているのか」といっ

た。

さて、娘は、「わたしの姉妹はわたしの母親に穴のなかにうめられていて」といった。

さて、王さまたちがやってきて、「よろしい」といった。

さて、王さまはウマからおりと、石をとり、穴をほる。王さまたちはどんどん穴をほっていき、穴のなかにいるバノをそとにだした。とうとう、バノをそとにだした。

さて、王さまが、「わしは穴のなかにいる娘をそとにだしたら、その娘をわしのよめさんにする。穴のなかにいる娘がそとにできたら、わしのよめさんになる。穴のそとにいる娘は左大臣のよめさんだ」といった。

さて、王さまたちはバノを穴からだした。バノを穴からだした。

王さまはバノを自分のウマのうえにのせた。もう一人をとり、左大臣と結婚させた。穴のなかにいたバノはずっとないている。王さまたちは穴のなかにいたバノを王さまの屋敷につれていった。バノは女奴隷たちをもらった。

さて、バノを穴にうめた母親は気がおかしくなりました。気がおかしくなると、女はトビになった。

さて、バノと王さまのあいだに子どもができた。女がトビの姿になって、自分のうんだ娘の屋敷にいくと、娘は女をおいはらい、食べ物をつたせなかつた。穴のなかにうめたバノのいる、王さまの屋敷にやってくると、バノは女に食べ物をくれる。トビの姿になった女はバノがぬぐった子どものウンコをとって、たべる。いつも、トビはそうするのだつた。ある日、トビがおりにきた。

さて、バノは、「このトビはわたしの母親のライバルにいてる」

といった。

さて、パノは、このトビはわたしの母親のライバルにちがいないといった。パノがトビをみて、ずっとなっていたとさ。

お話は、みじかく、わたしの命はながい。わたしはアッラーに懺悔する。

(一九八三年一月二日、語り手 マーマール・アリ、ガウンデレにて。この話は、一九六三年ころ、ラカ族の曾祖母からボゴ村で聞いたという)

170 イッルンデと腹違いの姉妹(1)

お話、お話。

さて、ある王さまに二人の娘があった。二人の娘の母親はちがった。

さて、一人の娘の母親は死んでしまった。二人の娘はちょうどおなじくらいのおおきさだった。二人はたいへんよくにていた。だれも、どちらが母親に死なれた娘か継母の娘かわからなかった。

さて、女は二人にもものをおなじようにやっている。というのは、女は自分の娘がどちらかわからなかったからだ。女は自分のうんだ娘がどちらかわからなかったのだ、たいへんくるしんだ。

さて、女がいくと、ある老女がいた。女は、「わたしは娘たちの

ことにたいへん気をつかっている。わたしはどちらがわたしのライバルの娘か、わたしの娘かわからない。というのは、二人はにているからだ。わたしはどちらがわたしの娘かわからない」といった。

さて、老女は女に、「いつて、落花生を日にほしなさい。おまえさんはいつた落花生をつくるのだ。落花生をまっかになるまで炒り、それを日にほしなさい。わかるとおもうが、おまえさんが落花生を日にほしておく、子どもというのはその落花生のところにはしつていき、それをとろうとするだろう。そこで、おまえさんは、大声をあげるのだ。落花生をとったものはひどいめにあわせてやる、とるなというのだ。そうすると、おまえさんの娘は腰をおり(したのものをとるとき、膝をかめるのではなく、膝をまっすぐにしたままで、腰をおつてとる)、落花生をとるだろう。おまえさんのライバルの娘はとらないだろう」といった。

さて、女はいくと、(落花生をほしておく。そこへ、娘たちがやってくる。女は)大声をあげる。わかるとおもうが、自分の娘は腰をおつて、落花生をとった。母親に死なれた娘はたちどまった。

さて、女は、「なるほど、この子がライバルの子か」といった。女はなにもいわなかった。だまっていた。その日から、女は自分のライバルの娘にいいものをやらなかった。女は自分の娘にだけいいものをやった。継子娘はくるしいめにあっている。

さて、王さまが戦争にいくことになった。母親をなくした娘はイ

ツルンデという。家に母親がいる娘はその名前をファデーメという。

さて、母親をなくした娘はくるしいめにあっている。

さて、王さまは戦争にいくことになった。戦争にいくとき、王さまはよめさんをよんで、「わしの子どもたちの面倒をみるのだ。便所にもついていってやりなさい。わしがかえるまで、なにもおこらないように」といった。女は、「わかりました」といった。王さまは黄金の井戸をのこしておいた。この黄金の井戸には、しほりたての牛乳がはいっていた。

さて、黄金の井戸からくんだしほりたての牛乳をなにかのうえにこぼしたら、その牛乳のついたものとおいところにある川までもついていって、(その水をくんできて) その川の水で、牛乳をあらっておとさなければならなかった。わたしはその川の名前をわすれてしまった。

さて、継子娘が黄金の井戸にしほりたての牛乳をくみにいくと、継母は娘をたたいた。すると、牛乳がこぼれた。牛乳をこぼすと、王さまがかえってくるとき問題になる。

さて、継母は娘に、「よろしい。おまえは牛乳をこぼしたな」といった。継母はライバルの娘をたたいて、娘が牛乳をこぼしたので、川までいって、その水をくんでくるようにといった。娘はヒョウタンをもち、いくとき、(母親の墓により)、「母さん、こういう

ことで、わたしは川までいって、その水をくんできて、それをあらいいおとせといわれた。もともと、わたしがしたのではないのに」という。

さて、母親は、「もどつていきなさい。あそこにいったら、死んでしまう、娘よ」といった。いつも、娘はそうにした。娘はもどつていき、こわいのでいけない、もどつてきたという。継母は娘をたたき、つく。とうとう、継母が娘をつれていくと、そこに娘の母親の墓があった。娘はそこにいて、いつも、母親に別れをつけるのだった。娘は母親の墓につくと、話をし、もどつていった。

さて、継母は、「よろしい」といった。

さて、継母はやってくると、火をとった。

さて、継母はいくと、ライバルの墓に火をつけた。墓はもえてしまった。そのつぎの日、娘はたちあがり、そこにいった。

さて、だれも、娘にはなしをするものがなかった。母親はこたえなかった。

さて、娘は墓をとりこし、川ににかけていく。娘はどんどんあるいていった。とうとう、娘は川についた。娘は川につき、腰をおつて、水をくもうとした。

さて、大蛇は鎌首をもちあげた。

さて、大蛇は娘をみて、娘をとらえてしまった。大蛇は娘をとらえたので、娘はそこにいた。王さまはながいあいだ戦争にいったま

まだ。ある日、王さまはたちあがり、家にかえってくる。

さて、王さまの太鼓が音をだす。

「ギリム、ギリム。

イッルンデの父親だ。

ファーディメの父親だ。

ファーディメはよろこぶ。

おまえたちの父親がかえってくる。

ギリム、ギリム。

ファーディメの父親だ。

イッルンデの父親だ。

おまえたちの父親がかえってくる」

さて、太鼓がこのような音をだす。太鼓がこのような音をだす

と、娘は、「父さんがかえってくる」という。

さて、大蛇は娘に自分のシラミをとるようにという。娘は、「はい、わたしはシラミをとった」というではないか。大蛇は娘に自分のシラミをとるようにという。娘は、「はい、わたしはシラミをとった」というではないか。大蛇は娘にそのシラミをとって、たべるようにという。大蛇は、「おまえは、シラミをとり、口にいれていたのはきだし、ほかし、べつのシラミをとり、そのシラミの頭をつぶすのだ。おまえはシラミを三つつかまえるごとに、それを三回くりかえす」という。

さて、娘は、「よろしい」といい。大蛇にいわれたようにする。

さて、太鼓が川についた。

さて、川をわたるとき、王さまの奴隷が、「王さま、みてください。あなたのお嬢さんのイッルンデが川のなかにいます」という。王さまの家来たちはその奴隷をつかまえて、「こん畜生め、うそつき」という。王さまの家来たちはその奴隷をつかまえる。王さまは、「そのものをころせ」という。王さまの家来たちは、その奴隷をころす。そのうちに、王さまは奴隷たちがもうすぐ、いなくなってしまうということがわかった。

さて、王さまは使いのものをいかせて、イッルンデとファーディメが二人ともやってきて、自分をむかえて、いっしょに村にはいるのだといった。

さて、ファーディメだけがやってきた。王さまは、「イッルンデはどこにいる」という。ファーディメは、知らないといった。王さまは、「イッルンデはどこにいる」という。ファーディメは、知らないといった。

さて、王さまは、「ひよつとしたら、奴隷たちのいつていたことはほんとうかもしれない」といった。王さまは奴隷たちをつつき、「みてみる、娘は水にいる」といった。奴隷たちは水をさらえる。奴隷たちは水をさらえた。水をさらえて、水がなくなりかけた。イッルンデはすわって、大蛇のシラミをとっている。水がなくなりか

けた。大蛇は水をはきだし、まえとおなじように川を水でみたす。奴隸たちはどんだん水をさらえる。大蛇はザーツと水をはきだす。

さて、奴隸たちはどんだん水をさらえる。奴隸たちはすっかり水をとりぞいてしまった。大蛇はやわらかい砂をはきだす。奴隸たちはどんだん水をさらえる。奴隸たちはすっかり水をとりぞいてしまった。大蛇の腹のなかにはなにもこのこっていないかった。

さて、奴隸たちはやってきて、大蛇をつかまえた。奴隸たちは大蛇をころしてしまった。奴隸たちは、娘の手をとり、娘に、「おきあがりなさい」という。娘は、「手に根がはえた」という。奴隸たちは、「おきあがりなさい」という。娘は、「わたしのお尻に根がはえた」という。奴隸たちは、「おきあがりなさい」という。娘は、「わたしの足に根がはえた」という。奴隸たちは根っこをみんなきってしまった。

さて、王さまの家来たちは娘をつれていき、水浴びをさせ、着飾った。奴隸たちは娘の毛をそった。奴隸たちは娘の髪の毛をとき、髪の毛をあんだ。わかるかな、娘はずっと髪の毛をあんでもらっていないかった。

さて、娘をつれていった。娘を着飾らせ、ウマにのせた。王さまたちは家にかえってくる。太鼓の音がする。

「ギリム、ギリム。
イツルンデの父親だ。

ファーデイメの父親だ。

ファーデイメはよろこぶ。

おまえたちの父親がかえってくる」

とうとう、王さまたちは屋敷につく。太鼓がなっている。とうとう、王さまたちは屋敷につく。王さまたちが屋敷につくと、そこに娘の継母がいた。娘は継母の血をもってきてもらい、その血をまたがなければ、屋敷にはいないといった。血をまたがなければ、屋敷にはいないという。娘はこのようにいった。

さて、奴隸たちは雌ウシをころし、その血をもってくる。娘は、「なんだって、これはあの女の血ではない」という。奴隸たちはいろいろな家畜をころし、その血をもってくる。

さて、奴隸たちはやってきて、娘の継母をころした。奴隸たちは女の血をもってきて、ながした。娘ののったウマは入り口のまんなかにながされた血をまたいだ。娘は屋敷にはいったとき。

お話は、おしまい。

(一九八三年一月二三日、語り手 キンギ・アイサトウ、ガウンデレにて。この話はガウンデレで、老女たちからきいたという)

171 イッルンデと腹違いの姉妹 (2)

ある娘がいた。母親は死んでしまつて、娘を父親のもとにのこした。父親は王さまだった。この娘は王さまの子だった。母親が死んでしまい、娘を継母のもとにのこした。娘たちはこのようにして、屋敷にすんでいる。

さて、継母は自分のすべき仕事をみんな継子がするのだという。継母は自分のすべき仕事をみんな継子がするのだというのだ。自分のすべき仕事をみんな継子がするのだというのだ。娘はいつて、その仕事をどんどんする。娘は苦勞をしている。

さて、継母は娘がじゅうぶんおきくなつたのを見ると、娘を使いにした。娘は野原にいき、川にいった。川のあるおきなどころには、ワニやカバなどなんでもいる。いちばんおそろしいおきなワニがそこにいる。

さて、継母は、「よろしい」といった。女はやつてくると、ワニに、娘がやつてきたら、その娘をやるといった。ワニは、「よろしい」といった。王さまは戦いにでかけていった。

さて、娘は川にいくと、すわっている。娘は川のそばにすわつたのだった。娘は洗濯をしている。洗濯をしているのだ。

さて、ワニはやつてくると、娘をとつてしまい、水のなかにいれてしまったこの娘の名前はファードウメという。

さて、わかるかな。娘は水のしたにはいつていった。ワニは娘といっしょにいた。ワニは娘の体のあちこちに根をはらせた。娘はすわつて、水のしたで、ワニのために髪の毛をあんてやつている。

さて、王さまは戦いにでかけて、家にかえつてくる。人びとは太鼓をたたいている。王さまの一行はどんどん家にかえつてくる。継母はウス、キネなど、いろいろなものをとり、それをうずめて、娘が死んでしまったといつた。継母はうそをついた。

さて、王さまが家にかえつてくる。とうとう王さまはやつてくる。王さまたちは川についた。川のそばにある木のしたでやすんでいる。王さまたちはすわつた。

さて、人びとは娘が歌をうたっているのをきいた。娘がうたう。

「ギリム・ギリム、あれは、ファードウメの父さん。

あれは、イッルンデの父親。

イッルンデはよろこんでいる。

というのは、父親がかえつてくるから」

王さまが、「なんといふことか」という。一人が、「王さま、あなたのお嬢さんがみつかりました。あなたのお嬢さんはその水のなかにいます」といった。王さまは、「そいつはうそをついている。そいつの首をはねてしまえ」といった。人びとはこの人をころした。王さまは、またその歌をきいた。娘は歌をうたう。

「ギリム・ギリム、あれは、ファードウメの父さん。

あれは、イッルンデの父親。

イッルンデはよろこんでいる。

というのは、父親がかえってくるから」

そのあと、王さまは、「なんだ。水をくみだせ。水をかいだせ」といった。人びとは水をどんどんくみだした。ワニはべつの水をはきだした。人びとは水をどんどんかいだした。ワニが水をはきだした。人びとは水をかいだした。ワニが水をはきだした。人びとは水をかいだした。

さて、ワニはどんどん泥などをはきだしていった。

さて、そのあと、人びとはワニとたたかい、ワニをころしてしまった。(そこに、娘がいた。)人びとは娘に、「たちあがりなさい」といった。娘は自分の足に根がはえてしまったといった。人びとはその根っこをきりとった。人びとは、「たちあがりなさい」という。娘は、「手にも、背中にも、根がはえてしまった」といった。人びとはその根っこをきりとった。娘の頭にも根がはえていた。人びとはその根っこをきりとった。

さて、娘はたちあがった。王さまは、「どうしたのか」という。娘は自分の継母にここまで使いにだされ、洗濯をしにやってくる、と、ワニがいたといった。ワニは継母が自分をそこまでよこすと、自分をとるようにといったといった。

さて、人びとは屋敷にはいりかけた。人びとは太鼓をたたいて

いる。そこで、継母はすわった。みんなすわって、首をうなだれている。王さまは、「どうしたのか」という。継母は、「ファードウメが死んでしまった」という。王さまは、ファードウメが死んだというのか。屋敷にはいつて、みてみよう」という。王さまと継母たちはあるいていった。王さまは屋敷のなかをみてみて、「わしにあの子の墓をみせてくれ」といった。王さまは、「この墓をほりだそう。わしはみてる」といった。人びとが墓をほりおこすと、そこにキネなどがあつた。人びとは、「それで、ファードウメはどこにいるのか」といった。継母たちは、「あの子は死んでしまいました。あの子はキネになりました」といった。

さて、王さまは、「よし。いまから、娘をよびなさい。娘が屋敷にはいるのだ。娘は娘の母親のライバルと話をするのだ」といった。娘は、「とんでもない。あなたたちはわたしの継母をころし、その首をもつてきて、入り口の小屋にぶらさげておくれ。そこをとおるすぎるものは、みんなその頭をたたいて、屋敷にはいるの」といった。そこをとおるすぎるものは、みんなその頭をたたいて、屋敷にはいる。とおりすぎるものは、みんなその頭をたたいて、屋敷にはいる。娘の継母は死んでしまった。王さまはべつのよめさんをもらったとき。

さて、このお話は、おしまい。

(一九八三年一月二日、語り手 アーマドゥ・ルファイー、ガ

ウンデレにて。この話は、コーザで、コーザの王さまの子どもからきいたという)

172 ナーヌミとジャツリフ

王さまは戦争にでかけていく。王さまには、ジャツリフとナーヌミという子どもがいる。ジャツリフは息子で、ナーヌミは娘だった。(ナーヌミの母親は死んでいなかった。ナーヌミは継母にそだてられている。)王さまは戦争にいく。王さまはジャツリフをつれていく。でかけるとき、王さまはよめさんに、「ナーヌミはそとにでてはいけない。屋敷のなかにおらせるのだ。わしは、ナーヌミにそとにでてほしくない。あの子をそとにださせるな。とういのは、わしは戦争にいくからだ」といった。よめさんは王さまに、「よろしい」といった。王さまがでかけてしまうと、王さまのよめさんはナーヌミをつれてきて、「子どもたちよ、いつて、野草をつみなさい」といった。女はいくと、大蛇と話をした。継母は、「ナーヌミがいいたら、つかまえないさい」といった。大蛇が、「よろしい」といった。この女は娘の継母なのだ。

さて、継母は娘をつれたした。父親は戦争にいつている。父親は弟をつれて戦争にいつた。

さて、継母は娘に半截ヒョウタンをもたせ、野草をつみにいか

せた。娘は野草をつみにいつた。ほうとうのこと、継母は大蛇に、「娘がいいたら、のみこんでしまいなさい」といつていた。

さて、娘はでかけていき、野草をつんでいる。娘たちは一日中、野草をつんでいた。娘たちはかえつてくる。娘たちはおおきな池のところによつてきた。娘たちは水浴びをしている。

さて、娘たちは水にはいつた。

さて、大蛇がでてきて、娘をつかまえて、「おまえさんの名前はなんというのか」という。娘は、「わたしの名前は、こういう」という。大蛇は、もう一人の娘をつかまえて、「おまえさんの名前はなんというのか」という。娘は、「わたしの名前は、こういう」という。大蛇は、もう一人の娘をつかまえて、「おまえさんの名前はなんというのか」という。娘は、「わたしの名前は、ナーヌミ」という。大蛇は娘をもちあげると、水のなかにいれてしまった。大蛇はやつてくると、娘をすわらせた。娘の父親は戦争にでかけている。大蛇は娘を膝のうえにすわらせた。大蛇は、「わたしのシラミをとつておくれ。わたしのシラミをとつておくれ」という。娘はシラミをつかまえて、「はい、シラミ」という。大蛇が、「それをたべなさい。シラミをとつて、それをつぶしなさい。シラミをとつて、それをほかしなさい。シラミをとつて、それをたべなさい」という。大蛇はこのようにいう。大蛇と娘はそこにいる。とうとう、娘の父親が戦争からかえつてくる。父親は使いのものをだして、自

分が泊まるところに、ナヌミをつれてくるようにといった。父親も、池のそばにやってきて、そこに泊まることにした。父親はすわった。

さて、王さまの家のものたちが使いをだすと、継母は、「ナヌミは食器をあらう人たちのあとについていき、まだかえってきていない」という。父親が使いをだす。使いのものがもどってきて、「ナヌミは食器をあらう人たちのあとについていき、まだかえってきていない」という。王さまは使いのものをころして、「ナヌミにきてもらわない」という。使いのものが、さんざんといつめると、子どもたちは、「わたしたちは野草をつみにいった。川にいき、水浴びをしていると、ナヌミは大蛇につかまってしまった」といった。父親は、「よろしい」といった。王さまたちはやってきて、川岸に宿営をつくった。王さまの太鼓の音がする。

「ギリム、ナヌミの父親の太鼓だ。

ギリム、ジャツリフの父親の太鼓だ。

ギリム」

さて、大蛇は娘をのみこんでしまった。大蛇は娘をつかまえてから、ずつとのみこんでいなかったが、ナヌミの父親がやってくるのがわかると、娘をのみこんでしまった。娘は、「なんだって、父さんが戦争からかえってくるのね」といった。大蛇が、「なんだって」という。娘は、「父さんが戦争からかえってくる」という。太

鼓がやってきて、人びとは川岸に宿営をつくった。太鼓の音がする。

「ギリム、ナヌミの父親の太鼓だ。

ギリム、ジャツリフの父親の太鼓だ。

ギリム」

王さまの家のものたちは川にはいり、水のながれてくるころをせきとめ、川の水をくみだした。すると、そこに大蛇がいて、娘をのみこんでしまっていた。

さて、王さまの家のものたちはやってくると、（大蛇をつかまえて、ころしてしまい）大蛇の腹をひらいた。王さまの家のものたちは娘に、「たちあがりなさい」といった。娘は、「わたしの体から根っこがでている」といった。王さまの家のものたちはその根っこをきつてしまふ。王さまの家のものたちは娘に、「たちあがりなさい」という。娘は、「わたしの頭から根っこがでている」という。王さまの家のものたちはその根っこをきつてしまった。王さまの家のものたちは娘に、「たちあがりなさい」という。娘は、「わたしの足から根っこがでている」という。王さまの家のものたちはその根っこをきつてしまふ。王さまの家のものたちは根っこをすっかりきつてしまった。王さまの家のものたちは娘に、「たちあがりなさい」という。娘はたちあがった。

さて、王さまの家のものたちは娘をつれていった。父親はいく

と、娘をつれてきた。王さまの家のものたちは娘に水浴びをさせ、着物をきせ、ウマにのせて、つれていった。王さまたちは道があるき、村にかえってくる。王さまの家のものたちは娘をウマにのせ、ウマをはしらせている。太鼓の音がする。

「ギリム、ナーヌミの父親の太鼓だ。

ナーヌミはうれしい。ほら、ナーヌミの父親がかえってくる。

ギリム」

とうとう、王さまたちは屋敷のまえについた。ナーヌミは継母の首が地面によこにならないと、屋敷にはいらないといった。父親が、「はいりなさい」という。ナーヌミは、「はいらない」といった。父親が、「はいりなさい」という。ナーヌミは、「はいらない」といった。

さて、王さまの家のものたちはいくと、ナーヌミの継母をつかまえて、やってくると、屋敷のまんまえて継母の首をきってしまった。

さて、家のものたちは継母の首をもちあげて、そこになげすてた。ナーヌミは父親の屋敷にはいった。ナーヌミは継母の首をそとにげた。ナーヌミは継母の首をもちあげると、そとにげた。

さて、みんなははしっていった。みんな屋敷にはいって、おちついたとさ。

お話は、みじかく、わたしの命はながい。

(一九八三年一月二五日、語り手 ファートウマタ、ガウンデレにて)

173 テッリベとセツリコ

ちいさなお話、ちいさなお話。

ある王さまに、二人の娘がうまれた。一人はテッリベ、もう一人は、セツリコという。王さまは略奪戦争にでかけていった。一人の娘の母親は死んでしまい、娘をあとにのこした。父親は母親をなくした娘、テッリベがすきだった。父親は母親のある娘がきらいだった。略奪戦争にいくとき、「テッリベはけつして、屋敷からではならない」といった。

さて、父親は略奪戦争にでかけていった。

さて、女はテッリベにしほりたての牛乳をやった。女は継子に、「おまえの父親の敷皮のうえにすわって、牛乳をのみなさい」といった。娘はそのうえにすわって、牛乳をのんでいる。牛乳が敷皮にしみこんでいった。娘はその牛乳をふきとるが、しみでてくる。その牛乳をふきとるが、しみでてくる。継母は娘に、「その皮をもつて、どこそこの池にいつて、あらいなさい」といった。娘は池にいくと、敷皮をあらう。

さて、怪物が娘をひっぱって、水のなかにつれていってしまつた。怪物は娘の足をのばさせ、娘の膝のうえに頭をのせ、「シラミをとって、つぶせ。シラミをとって、かみつぶせ。シラミをとって、ほかせ。シラミをとって、つぶせ。シラミをとって、かみつぶせ。シラミをとって、ほかせ」という。(娘は怪物にいわれたようにしている。)そのうちに、娘の父親が略奪戦争からかえつてくる。人びとは子どもたちの名前のはいった歌をうたう。それをきいて、娘は水のなかから、うたう。

「このような歌は、テッリベの父親、

サッリフの父親がうたう歌だ。

サッリフはよろこんでいる。

父さんがついた」

そのうちに、人びとは川の井戸の入り口についた。娘の父親の奴隷が井戸の入り口にいった。人びとは水をくみにいった。

さて、娘はうたった。

「このような歌は、テッリベの父親、

サッリフの父親がうたう歌だ。

サッリフはよろこんでいる。

父さんがついた」

奴隷はいくと、娘の父親に、「アッラーがあなたに平安をください

ますように。よろしかったら、わたしをころしてください。よろしかったら、ころさないでください。テッリベは井戸のなかにいます」といった。娘の父親は、「こいつをころせ」といった。人びとはこの奴隷をころした。もう一人の奴隷がいつて、娘の父親に、「よろしかったら、わたしをころしてください。よろしかったら、ころさないでください。お嬢さんは井戸のなかにいます」といった。娘の父親は、「こいつをころせ」といった。人びとはこの奴隷をころした。家来の長が、「川の入り口までいつてみましょう」といった。人びとは川の入り口までいった。人びとは太鼓をたたいた。人びとは太鼓をたたくのをやめた。

さて、娘は太鼓にこたえて、水のなかからうたった。

「このような歌は、テッリベの父親、

サッリフの父親がうたう歌だ。

サッリフはよろこんでいる。

父さんがついた」

そこで、人びとは池から水をくみだした。水をすっかりくみだしてしまった。怪物が水をはきだした。池の水はもとどおりになった。人びとは池から水をくみだした。怪物が水をはきだした。池の水はもとどおりになった。人びとは池から水をくみだした。怪物が水をはきだした。池の水はもとどおりになった。人びとは池から水をくみだした。人びとは水をすっかりくみだしてしまった。

さて、人びとはその怪物をころした。人びとは、娘に、「たちあがりなさい」といった。娘は、「わたしの手に根っこがはえている」という。人びとは根っこをきった。人びとは、「たちあがりなさい」といった。娘は、「わたしの足に根っこがはえている」という。人びとは根っこをきった。人びとは、「たちあがりなさい」といった。娘はたちあがった。人びとは娘をつれていき、ウマにのせた。人びとは娘をつれていった。娘の継母は娘の父親がかえってくるのをきいた。女はいくとふかい穴をほった。女は土ナベをとると、そこにいき、穴にうずめた。女はテッリベが死んでしまったといった。継母はすわって、屋敷のなかで、娘が死んだといった。父親は、「テッリベが死んでいても、その墓をみせておくれ。その骨だけでもみる」といった。継母はさきをあるいていった。女はないている。女はいった。奴隷たちがやってきて、土ナベをほりだした。父親はなにもいわなかった。父親は屋敷のそとにでた。父親は自分の奴隷に、「テッリベに、わしがテッリベの継母になにをしたらよいかきいてくれ」といい、娘のところに行かせた。娘は、「父のところいき、わたしに自分の屋敷にかえってきてほしいのなら、自分の屋敷の半分をくれ、わたしが結婚して、そこにすむようにいっておくれ。父は継母をわたしのはいる小屋の入り口のまんなかになかせ、その頭をしつかりともち、その喉をかききる。わたしはその血をまたいで、小屋にはいる」といった。奴隷たちはいき、継母をつ

かまえた。奴隷たちは継母の頭をしつかりともち、その喉をかききった。娘はやつてくると、父親の屋敷にはいった。

お話は、あちらにある。わたしは、ここにいる。

(一九六五年五月、語り手 マイラマ・マヨ・ルウェ、マヨ・ルウェにて)

174 デイージャとドゥードゥ

ちいさなお話、ちいさなお話。モロコシのちいさな墓。きく人とみる人の禿のまんなか。

王さまは二人の女をめとった。王さまは二人をめとった。二人のよめさんは、それぞれデイージャとドゥードゥをうんだ。デイージャの母親は死んでしまった。ドゥードゥの母親があとにのこった。

さて、ある王さまが使いをよこし、デイージャをめとった。

さて、王さまがデイージャと結婚すると、ドゥードゥの母親は呪いをつくり、それを自分の娘ドゥードゥのところにのこり、「ドゥードゥよ、この呪いをデイージャにわたしにいきなさい」といった。

さて、(ドゥードゥはデイージャのところにでかけていく。)デイージャはむこさんに、「この人はわたしたちのドゥードゥ」といった。むこさんはデイージャに、「その人はおまえさんたちのドゥー

ドウではない。うそをつくな」という。

さて、ドゥードゥはディージャのところにいった。ディージャは、「ここにいるのは、わたしたちのドゥードゥよ。へんなことをいわないで」といった。(ドゥードゥのもってきた呪いのおかげで、ディージャは小鳥になる。ドゥードゥはディージャのかわりに王さまのよめさんになります。)

さて、ディージャは小鳥の姿になって、とんでいった。毎朝、夜があけると、小鳥はやってきて、王さまの小屋にとまてうたう。

「わたしが毎日すごしていた日除けをみておくれ。」

わたしが毎晩ねていた建物をみておくれ。

わたしが水をやっていたウマをみておくれ。

わたしが水をやっていたロバをみておくれ。

ドゥードゥは小鳥に、「どこかにいってしまいなさい、小鳥よ。どこかにいってしまいなさい、小鳥よ」という。王さまは小鳥に、「きなさい」という。小鳥はやってこようとしない。小鳥はいってしまふ。そのつぎの日、小鳥がやってきてうたう。

「わたしが毎日すごしていた日除けをみておくれ。」

わたしが毎晩ねていた建物をみておくれ。

わたしが水をやっていたウマをみておくれ。

わたしが水をやっていたロバをみておくれ。

ドゥードゥは小鳥に、「どこかにいってしまいなさい、小鳥よ。ど

どこかにいってしまいなさい、小鳥よ」という。王さまは小鳥に、「おりてきなさい」という。小鳥はおりてこようとしない。そのつぎの日、王さまはドゥードゥの母親がつかったイスラム教の先生よりの力のあるイスラム教の先生をさがした。王さまはその先生をつれてきた。先生がすわった。この先生は王さまのために聖なる文句をかいた。王さまはその聖なる文句をかいた木板からインクをあらいおとし、そのインクのはいった水を小屋のうえにたらしおいた。さて、そのつぎの日、小鳥がやってきた。小鳥はうたう。

「わたしが毎日すごしていた日除けをみておくれ。」

わたしが毎晩ねていた建物をみておくれ。

わたしが水をやっていたウマをみておくれ。

わたしが水をやっていたロバをみておくれ。

さて、ドゥードゥは小鳥に、「どこかにいってしまいなさい、小鳥よ。どこかにいってしまいなさい、小鳥よ」という。

さて、王さまは小鳥に、「おりてきなさい」といった。

さて、小鳥はおりてこようとしなかった。

さて、小鳥がおりてきた。小鳥がおりと、王さまは小鳥を紙と布でくるみ、自分の小屋においておいた。毎日、王さまは小鳥にインクのはいった水をふりかける。毎日、王さまは小鳥にインクのはいった水をふりかける。小鳥はもとの姿にもどってくる。ドゥードゥは小鳥をおいはらうと、ディージャの小屋にいる。

さて、王さまの家のものが王さまの部屋にディージャをいれてやろうとすると、そこにドゥードウがいた。王さまは奴隷たちをやらせて、ドゥードウを屋敷からだした。王さまの家のものたちはディージャをディージャの小屋につれていった。

さて、王さまはイスラム教の先生に、「わたしに呪いをかけておくれ」といった。先生は王さまに呪いをかけてやった。

さて、王さまはディージャに呪いをやり、「おまえがドゥードウたちのところにいき、『そこにいるのはわたしたちのディージャ』といわれたら、『わたしはおまえさんたちのディージャじゃない。イヌめ』といいなさい」といった。こうして、ディージャは旅をして、ドゥードウたちのところにいった。

さて、ドゥードウが、「そこにいるのはわたしたちのディージャ」といった。ディージャは、「わたしはおまえさんたちのディージャじゃない。イヌめ」といった。

さて、ドゥードウはおきあがり、ワンワンワンとほえている。ドゥードウはイヌの姿になってしまった。イヌがディージャにむかってほえている。

さて、ディージャたちは王さまのところにえつていった。ドゥードウは、いつもあるきながらワンワンワンとほえている。いつもあるきながらワンワンワンとほえている。人びとはイヌがくるったとおもう。そのときから、ドゥードウはイヌの姿になった。母親た

ちは一生懸命になって、イヌをもとにもどそうとしたが、できなかった。ドゥードウはイヌの姿になったとき。ワン。

(語り手 不明)

175 しやべらない子ども

お話、お話。

ある女が女の子をうんだ。女の子はおおきくなった。女の子はおおきくなると、よくしやべる。母親は娘に、「なんだって、どうしておまえはそんなにしやべりをするのか」という。

さて、娘はおしになり、しやべらなくなってしまった。

さて、娘はしやべらなかつたが、嫁入りをした。嫁入りをすると、むこさんの小屋にいくが、しやべらなかつた。

さて、むこさんが、「どうしたら、わたしのよめさんが話をするようになるだろう」といった。男は旅にでかけた。旅にでかけると、男はある老女に、「わたしの村にいるわたしのよめさんは話をしない。どうしたらよいだろう」といった。老女は、「雌ウシをころしなさい」といった。男は雌ウシをころした。老女は、「その胃の内容物を取り、それをおまえさんの体にぬりなさい」という。男は胃の内容物を取り、それを体にぬりつけた。老女は、「おまえさんは、よこになり、布をかぶりなさい」という。男はよこになる

と、布をかぶった。老女は、「鳥をよび、すべての鳥にこさせ、その雌ウシの肉をたべさせるのだ。歌がうまくたえるものがいって、もどってきたら、その肉をたべさせるのだ。よろしい、鳥がよめさんのところにいったら、鳥に、おまえさんがへびにかまれたというのだ」という。すべての鳥がやってくるが、歌がうたえない。そのうちに、カンムリヅルがやってきた。男が、「おまえさんを使いに出したら、おまえさんはどのようにかのか」といった。カンムリヅルはうたう。

「この人はだれのもの、ルンダン。」

この人はだれのもの、ルンダン。

その人は若者、ルンダン。

その人は、寒期をすごしにいった、ルンダン。

その人は、乾期をすごしにいった、ルンダン。

おおきなへびが、ルンダン、

その人の手をかんだ、ルンダン。

その人の足をつかまえた、ルンダン。

その人がいきているか、いないか、わからない」

(男はカンムリヅルをよめさんのところに使いにだす。カンムリヅルは歌をうたう。) 人びとはカンムリヅルに、「おまえさんのいこうとしている村はさきにある」という。カンムリヅルはとりすぎていく。カンムリヅルはとんでいくと、とまって、うたう。

「この人はだれのもの、ルンダン。」

この人はだれのもの、ルンダン。

その人は若者、ルンダン。

その人は、寒期をすごしにいった、ルンダン。

その人は、乾期をすごしにいった、ルンダン。

おおきなへびが、ルンダン、

その人の手をかんだ、ルンダン。

その人の足をつかまえた、ルンダン。

その人がいきているか、いないか、わからない」

人びとは、「おまえさんのいこうとしている屋敷はあそこにある」という。カンムリヅルはいくと、そこにとまった。女はなにもしゃべらない。女はよろこんでいる。女の幼友だちが女といっしょにいる。友だちが女をよぶと、女はわらう。カンムリヅルはいくと、とまった。カンムリヅルはうたう。

「この人はだれのもの、ルンダン。」

この人はだれのもの、ルンダン。

その人は若者、ルンダン。

その人は、寒期をすごしにいった、ルンダン。

その人は、乾期をすごしにいった、ルンダン。

おおきなへびが、ルンダン、

その人の手をかんだ、ルンダン。

その人の足をつかまえた、 런던。

その人がいきているか、いないか、わからない」

またしても、坎ムリヅルはうたう。

「この人はだれのもの、 런던。

この人はだれのもの、 런던。

その人は若者、 런던。

その人は、寒期をすごしにいった、 런던。

その人は、乾期をすごしにいった、 런던。

おおきなヘビが、 런던。

その人の手をつかんだ、 런던。

その人の足をつかまえた、 런던。

その人がいきているか、いないか、わからない」

またしても、坎ムリヅルはうたう。

「その人ははれている。病気だ、 런던。

おまえさんよ、その人は寒期をすごしにいった、 런던。

おまえさんよ、その人は乾期をすごしにいった、 런던。

おおきなヘビが、 런던。

その人の手をつかんだ、 런던。

その人の足をつかまえた、 런던。

その人がいきているか、いないか、わからない」

女は坎ムリヅルについていく。坎ムリヅルはずっとこのよう

に歌をうたう。女も、歌をうたう。坎ムリヅルはうたう。とうと

う、女はむこさんのいるところについた。むこさんは、「おまえは、

口がきけるのだな。たちあがりなさい。いっしょにかえろう」とい

ったとき。

(一九七〇年一月一日、語り手 パーセーウオ村出身のアブド

ウッラーイ・ウスマース、マルアにて)

176 両親にきらわれた娘

ちいさなお話、ちいさなお話。

いこう。両手でうけるちいさなものよ。話し手の禿のまんなか。

ある女が女の子どもをうんだ。

さて、父親はその子どもがきらいだった。母親も、子どもがきら

いだった。

さて、両親はその子どもをとると、とおい村にすむ男にやった。

野原には人をころす動物たちばかりがいた。

さて、この娘はどこかの村で結婚した。

さて、この娘のむこさんはいって、イヌの子どもをもつてくる

と、娘ともう一人のよめさんにわけあたえた。

さて、娘のイヌがおおきくなった。娘はむこさんに母親のところ

につれていってくれといった。

さて、むこさんの母親は、「だれにつれていってもらうのか」といった。娘は姑に、「わたしのイヌにつれていってもらい、つれてかえってもらう」といった。姑は娘に、「よろしい」といった。姑は娘を旅にださせた。娘はどんなあるいていく。娘はライオンにであった。ライオンは、「女よ、どこにいくのか」といった。娘は、「わたしはわたしの里にいくところ」といった。ライオンは、「おまえさんとだれがいくのか」という。娘は、「アッラーとわたしのイヌといく」という。ライオンは、「そのイヌをよんでみなさい。わたしがついてみる」という。娘はいう。

「ケー・ムーナよ、ケー・ダラ・ウーナよ、デルキティ・ムーナよ。

インニティ・ヤーバよ、デンギニ・アッラーよ、デンギニ・ヤーレよ。

カイ・マガランダツよ、カ・ヤルマナーよ。

カイ・マガランダツよ、カ・ヤルマナーよ」

さて、イヌがやってきた。娘はそこをとりすぎた。いくと、ハイエナにであった。ハイエナは、「女よ、どこにいくのか」という。娘は、「わたしはわたしたちの里にいく」という。ハイエナは、「おまえさんとだれか」という。娘は、「わたしのイヌだけ」という。ハイエナは、「そのイヌをよんでみなさい。わたしはそれをきいてみる」という。娘はいう。

「ケー・ムーナよ、ケー・ダラ・ウーナよ、デルキティ・ムーナよ。

インニティ・ヤーバよ、デンギニ・アッラーよ、デンギニ・ヤーレよ。

カイ・マガランダツよ、カ・ヤルマナーよ。

カイ・マガランダツよ、カ・ヤルマナーよ」

さて、イヌがやってきた。ハイエナはどこかにいつてしまった。娘はそこをとりすぎた。娘はあるいた。さきにくと、娘はヒョウにであった。ヒョウは、

「女よ、どこにいくのか」という。娘は、「わたしはわたしたちの里にいく」という。ヒョウは、「おまえさんとだれか」という。娘は、「アッラーとわたしのイヌだけ」という。ヒョウは、「そのイヌをよんでみなさい。わたしはそれをきいてみる」という。娘はいう。

「ケー・ムーナよ、ケー・ダラ・ウーナよ、デルキティ・ムーナよ。

インニティ・ヤーバよ、デンギニ・アッラーよ、デンギニ・ヤーレよ。

カイ・マガランダツよ、カ・ヤルマナーよ。

カイ・マガランダツよ、カ・ヤルマナーよ」

……

(一九六六年、語り手 ドウツジヨ、ガルアにて)

177 みにくい子どもとハイエナ

お話、お話。

あるところに女がいた。女はお腹がおおきくなった。女は子どもをうんだ。子どものうちの一人はみにくかった。

さて、夜があけて、朝になると、女は子どもたちをつれていて、穴のなかにいれ、蓋をしておく。女はでかけていき、食べ物をさがす。女が食べ物をさがしていると、乳房に乳がたまってくる。女はやってくると、穴の入り口でたちどまり、子どもの名前をよぶ。

「インナリ（アリの母親）の意味）・インナリよ、きて乳をのみなさい。

アルジェンナ・ギダーンゲル（「すかれている子どもの天国」の意味）」よ、きて乳をのみなさい。

デーレル・ダマリリー（「ダマリリーのちいさな腹」の意味）」

よ、きて乳をのみなさい。

ンゲーサ・ペハ（「土器のようにおおきな顔」の意味）」よ、

おまえはそこにいな。さい」

インナリ・インナリが穴からでて、きて、乳をのむ。アルジェンナ・ギダーンゲルが穴からでて、きて、乳をのむ。デーレル・ダマリリーが穴からでて、きて、乳をのむ。ンゲーサ・ペハは穴のなか

にいる。

さて、いつも、このとおりだった。

さて、ハイエナが女のいうことをきき、自分の声をよくしてやってきて、子どもの名前をよぶ。

「インナリ・インナリよ、きて乳をのみなさい。

アルジェンナ・ギダーンゲルよ、きて乳をのみなさい。

デーレル・ダマリリーよ、きて乳をのみなさい。

ンゲーサ・ペハよ、おまえはそこにいなさい」

子どもたちは、「あれは母さんの声ではない。あれは母さんの声ではない」という。子どもたちは穴からでてこようとしなかった。母親がやってきて、子どもの名前をよぶ。

「インナリ・インナリよ、きて乳をのみなさい。

アルジェンナ・ギダーンゲルよ、きて乳をのみなさい。

デーレル・ダマリリーよ、きて乳をのみなさい。

ンゲーサ・ペハよ、おまえはそこにいなさい」

子どもたちは穴からでてきて、母親の乳をのむ。ンゲーサ・ペハは穴のなかにいる。ンゲーサ・ペハはお腹がすいて、死にそうだった。

さて、ある日、ハイエナは自分の声をたいへんよくして、おきあがり、やってきて、子どもの名前をよぶ。

「インナリ・インナリよ、きて乳をのみなさい。

アルジェンナ・ギダーンゲルよ、きて乳をのみなさい。

デーレル・ダマリリーよ、きて乳をのみなさい。

ンゲーサ・ペハよ、おまえはそこにいなさい」

インナリ・インナリがでてきた。ハイエナはインナリ・インナリをつかまえて、たべてしまった。アルジェンナ・ギダーンゲルがでてきた。ハイエナはアルジェンナ・ギダーンゲルをつかまえて、たべてしまった。デーレル・ダマリリーがでてきた。ハイエナはデーレル・ダマリリーをつかまえて、たべてしまった。ンゲーサ・ペハは穴のなかにいる。母親ははしって、かえつてきて、子どもの名前をよぶ。

「インナリ・インナリよ、きて乳をのみなさい。

アルジェンナ・ギダーンゲルよ、きて乳をのみなさい。

デーレル・ダマリリーよ、きて乳をのみなさい。

ンゲーサ・ペハよ、おまえはそこにいなさい」

なんの音もしなかった。

さて、母親はまちくたびれて、穴の蓋をあけた。穴のなかには、ンゲーサ・ペハがいるだけだった。ンゲーサ・ペハは母親に、「インナリ・インナリとアルジェンナ・ギダーンゲルとデーレル・ダマリリーはハイエナにたべられてしまった。わたしがのこっているだけ」といった。母親は、「はしっておいで。わたしのンゲーサ・ペハよ、いきましよう」という。ンゲーサ・ペハははしった。母親は

いっしょにはしったとき。

お話はみじかく、わたしの命はながい。

(一九八三年一月二七日、語り手 ハディージャ・ブーバ、ガウンデレにて。ハディージャの父親はガルア出身。ハディージャはガルアとガウンデレでそだった。この話は祖母からきいたという)

